転生したら……ウマ娘だった。

シラネ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【ウマ娘】をプレイしていたある高校生が本当にウマ娘達がいる世界に転生してしまい、そのまま新たなウマ生を謳歌していく話です。

１０話ぐらいからようやくネタが安定してきたので、最初の方は見苦しいと思いますが、よろしくお願いします。特に１１話ぐらいから色々表やらギミックやらを入れているので楽しんで頂けたら嬉しいです。（ｂｙシラネ）（追記　１／２４）

第１話から第２０話までの台本形式だった内容を訂正しました。それに伴って、一部文章の書き換え、追加、消去を行いました。台本形式の部分が残っていた場合、誤字報告をお願いします。大規模な訂正になっておりますが、ご了承下さい。（追記６／１０）

目次

第1章　トキノメグルの小学校5年生まで
1話　転生したら……ウマ娘だった。 ―― 1
2話　モブ娘だって、てっぺん取りたい！ ―― 5
3話　土の匂い……染み付いて……焦る……。 ―― 8
4話　ホイクエンナンテツマンナイヨー ―― 12
5話　正月土手ラン ―― 14
6話　姉達の受験直前正月特別体験 ―― 27
7話　ピッカピッカの～1年生♪ ―― 43
8話　ピッカピッカの～5年生♪ ―― 51
9話　じゅぎょー前のメグルちゃんからのお願い ―― 63
10話　1年生　最初の授業 ―― 69
11話　天才（オリジナル）のライバル ―― 76
12話　ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０１ ―― 90
13話　天才は天才と愚才を生み、皆に恐怖と畏怖を与える ―― 100
14話　トキノメグルと男子高校生 ―― 123
15話　トキノメグルと時野巡 ―― 129
16話　小学校の四天王 ―― 136
17話　駿川家の買い物 ―― 146
18話　前期実技テスト【ＪＡＰＡＮ　ＮＯＺＡＮＳＨＯ　ＣＵＰ】 ―― 159
19話　変態と王者と怪奇 ―― 173
20話　モブ娘は考える ―― 190
21話　ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０２ ―― 195

２２話　トレセン学園第２回選抜レースの観客席 202
２３話　昇天 207
２４話　ボランティア講師始めました 210
２５話　夏合宿の始まり 214
別編　【幻空世界に響くファンファーレ】
オープニング 220
第１Ｒ　騎空士リデビュー！ 230
ウマ娘名鑑
ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０１ 252
ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０２ 262
ウマ娘名鑑ｖｅｒ．ｏｌｄ【緑色の金剛石】
ウマ娘名鑑ｖｅｒ．ｏｌｄ―０１ 269
注意事項
今作を読むにあたっての補足＆最新話リンク 272

第1章　トキノメグルの小学校5年生まで

1話　転生したら……ウマ娘だった。

突然だが、私はあまり動けない。
理由は単純で全身の筋肉がほぼ無い……というか、身体の全てが縮んでいるのだ。
決してどこかの高校生探偵とかではなく、何か話そうとしても出てくるのは「う…あーあ。」みたいな喃語だけだ。
横をゆっくりと見ると自分と同じように寝ている赤ん坊達がいた。
もぞもぞと動いていると看護士の格好をした人が覗いてきて、
「あら～起きたのね～。」
と、微笑んできた。
……なるほど。つまりは私は何らかの事で赤ん坊になっていて病院で寝かされているのか。

……何故か身体に違和感を覚えた。
音が聞こえすぎるのだ。更には音を感じる場所が何か違う。あと、腰の辺りが何か痒い。

……全く覚えていないが私が赤ん坊の頃はこんな違和感を既に覚えていたのだろうか？

そのような事を考えていると、看護士さんが私を優しく抱っこしてある女性に渡した。
「……ごはんだよ～。」
そう言いつつ出されたのはーーーーだった。

ちょっとまって！私、今こんな姿だけど心は高校生！それも男子！
一人称が『私』って言ってるけど普通の男なんだってば！

だからそれを向けるのは―！

赤ん坊の食欲には抗えなかった。

赤ん坊の食事を終えるとそのまま病室に連れてかれた。
そこにはラフな格好の男性がいた。
「おかえり。連れてきたんだね。……パパですよ～。」
「ふふ。まだ言っても分からないわよ。ママですよ～。」
やっぱり私を抱いている女性は私の母で男性は父だった。
母さんが父さんに私を渡し、抱っこする。

「全然泣かないな。大人しいね。」
「そうね。お姉ちゃんの時はあなたに抱かれた時は大泣きしてたのに。」
姉もいるのか。
前世？の時は妹がいたので新鮮だ。
そのまま抱っこし続けられていたが、あることに私は気づいてしまった。
さっきまでは気づいていなかったが父さんに抱かれながら母さんの方を向くと頭の上に耳があり、腰の辺りから毛が生えているのだ。
何で普通の耳ではなく、馬のような耳が付いているんだろうか？あと、髪の毛は凄く長いというわけではないのに。

「この子もきっと走る事になるんだろうなぁ。お姉ちゃんが走る事が好きなウマ娘なんだもん。この子もお姉ちゃんの事を追いかけようとするんだろうね。」
「そうね。もしかしたら私なんかよりもずっと速い子になるかもね。ふふ。」

ちょっと待て。今、【ウマ娘】って言った？

ここで一気に記憶が蘇ってきた。

【ウマ娘プリティーダービー】前世で物凄く人気が出た育成ゲームだ。

高校生だった私はリリースされて少し経った頃からやり始めたが、まぁ、ドはまり。

馬が好きだった前世の母さんと競う程（主にファン獲得数）にプレイしていたのだ。

Ｓランクのキャラが出来て調子に乗り、Ｓ＋を作ろうと一念発起していた（受験勉強は？）

え？推しですか？そりゃいっぱいいますが、中でも一番好きなのはオ……。

……このまま話すと止まらなくなりそうなので止める。

閑話休題。

何かそのまま抱っこされ続けながら両親の会話を聞いていると、病室の扉が開いて二人やってきた。

「ねぇねぇ、お父さん！私にも赤ちゃん抱かせて！」

「良いよ。気を付けて、優しく。」

「わぁ、軽い……。お姉ちゃんだよ～分かるかな？」

「まだ分からないかもね～。」

……姉にもウマ耳と尻尾があった。

こりゃ本当にウマ娘の世界なんだなぁ。

少し唖然としながら赤ん坊ならではの眠気に襲われいつの間にか眠ってしまった。

「あ、赤ちゃん寝ちゃった。」

「お母さんに妹ちゃんを渡してあげてね。」

「うん！……ねぇ、この子の名前は？お母さん。」
「この子はね……
【トキノメグル】」

2話　モブ娘だって、てっぺん取りたい！

どうも、トキノメグルです。1歳になりました。速いものですね。

……人間の子供って1歳で走り回れましたっけ？いや、半年で歩けましたっけ？

物凄い勢いで自分の身体が生育しているのを見ると不思議に感じますね。

どうやら、家の鏡を見ると私の髪や耳、尻尾までほぼ黒色の黒鹿毛だった。

そういえばそうですが、【トキノメグル】っていう馬、前世の現実にはいないそうなので、ここが本当にウマ娘の世界ならば私はモブですね。なので……。

モブでもしっかりと闘えるように今のうちから特訓しないといけませんねぇ！

という訳でおかんと姉を引き連れて土手走ります（キリッ）

……

「よし！アップ終わり！トレセン学園に入る為、メグルに良いとこ見せるため、特訓しなきゃ！タイム計測お願い！ママ！」

「分かってるわ、気を付けてね！ほらメグルもミドリを応援してね。」

あれ、私、連れてこられた側ですか。

あ、母さんの名前が【ダイヤグリーン】。姉の名前が【トキノミドリ】です。

母さんは元中央トレセン学園の生徒でG1に出て最高で入賞。

因みに母さんは芦毛。

姉さんは今は小学校1年生で中央トレセン学園に入学するために奮闘してます。（小1から受験用トレーニングですか……。）

姉さんは鹿毛ですね。

ある程度の距離を離し、私達がいるところをゴールにして……。
母さんが合図を送り、姉さんが駆け出す。

こうして見ると姉さんは走り方はまだ荒削りな気がします。ウマ娘の元からの脚力によって速く見えますが素人目線からでも無駄な動きが多いと感じますね。まぁ、比較対象がいないのでどこまでかは知りませんが。
……だけど、やっぱり。速い。人間なんかよりもずっと。

……
「はぁ、はぁ……。どうだった？」
「１２００メートル１：１４．２よ。貴女の年齢にしてはかなり速い方じゃあないかしら。」
「……目標は？」
「新潟１２００なら１０．０ってとこね。でも貴女の場合、東京１４００で２３．０よ。あと、５年で頑張りましょう。」
「うん！直線だけじゃなくてコーナーも練習しないとね。」
その後、母さんからフォームなどの指摘をされ、走る。その都度に問題点を少しずつ修正していく。

姉さんの様子は楽しそうだった。

「メグル？貴女もお姉ちゃんみたいに走りたい？」
ずっと姉の様子を観ていたからか母さんが尋ねてくる。

……正直、凄く走りたい。私も頑張れば姉みたいに姉以上に速くなれるだろうか。
自問自答していたが、すぐに答えを出す。
「私も、走りたい！」
「そっか～！なら身体は鍛えないといけないね～！」
「うん。鍛えるよ！」

「ふふふ。本当にかわいいんだから～。」
凄い勢いで頭を撫でまくる。頭が痛くなってくるから止めて欲しい。
「もうちょっとしたらいっぱい走ろうね～。」
楽しそうに走り続ける姉が羨ましかった。
……
そのつぎの日
私は『モブだって頂点(てっぺん)取ってもええやん！』という目標を掲げ、母さんを喜ばし、そして、心配させるのだった。

3話　土の匂い……染み付いて……焦る……。

……きつい。苦しい。熱い。寒い。
吐き気まで押し寄せる。
目の前が暗い。
音が聞こえない。
……でも、走らねば。

……
姉の試走を見た次の日、私は母さんを物凄く心配させていた。

土手　ランニングコース3キロメートル地点
「メグル！今の貴女では無茶よ!!」
「だい……丈夫。はぁ、はぁ、はぁ、5キロ……走るまで……帰らない!!」
「1歳で1キロ走る子もいないのに、5キロなんて無茶苦茶よ!!」（こんなことになるなら最初っから距離を決めれば良かった！）

スタミナを付けるため。走る感覚にいち早く慣れるため。
私はモブ。学園に入れる実力が付いたとしても推しである天才の彼女らに対抗なんか普通では出来ない!!
……なら、天才のアドバンテージを埋めるために努力を惜しまない他無いの!!
フラフラになりながら……でも走る。
走る。
走る。

……
「お、終わり！」
５キロ走り終わった頃にはもう目の前がくすんでほとんど見えていなかった。
だが、目の前に差し出されたスポーツ飲料水だけははっきりと見えた。
震える手で掴み、中の水を体へと流す。
やっと視界が明るくなってきた。
そして、目の前には、
心配げに私を見つめる母の姿があった。

帰ってからは母さんの目を盗んで腹筋、腕立て伏せ、背筋などの筋トレを各々５０回からスタートさせることにした。
これも真ん中程からかなりしんどくなってくるが、ウマ娘の体力のせいか前世よりは楽だった。
それを何セットかやっていると母さんにばれ、問い詰められた。

「メグル。お姉ちゃんの走りを観てから焦りすぎじゃない？こんなになってまだ初日だけど、これをやり続けると身体を壊すし、何より貴女はまだ遊んでいても全然大丈夫な子供なのよ？」
「遊ぶよりトレーニングしていた方が気持ちいいの。お姉ちゃんみたいに早く速く走れるようになりたいから焦っているの。」
「まだ焦らなくても十分お姉ちゃんみたいになれるわよ？」
「ごめん、お姉ちゃんみたいに速くじゃなかった。お姉ちゃんと勝負して闘って勝つのもだけど、私はウマ娘の中で一番速くなりたい。」
「メグル……。気持ちは分かるけど、まだ……」
「早いってことは無いの。私は頑張らないといけないの。誰にも負けたくないから。」

そう言って、私はまた元いた場所で筋トレを再開させるのだった。

……

深夜

「……ねぇ、あなた、メグルの事なんだけど……。」

「どうした？元気がないとか？」

「違うの。……元気がありすぎる……。」

「なんだ、そりゃ良いことじゃないか。子供たるもの元気が大事だから。」

ダイヤ「……今日、私の制止を振り切って5キロマラソンやったり50回筋トレ数種を数セットやっていたって言ったら信じる？」

「……マジ？」

「うん……。」

「メグルの身体は？大丈夫なのか？」

「ダウンも行っていたし大丈夫だと思うけど、1歳でやりたがるメニューじゃないわよ。大体1歳でトレーニングなんかやろうとしないわ。ミドリもそんなにはやろうとはしないのに……。」

「メグルがどうしてもやりたいと言うなら止めれないが、本当に危険な事をしていたら止めさせないといけない。……1歳だってのに何を想ったんだ？」

「分からないわ。……お義姉さんに相談出来る？」

「姉貴か。……いや、忙しいし、まだ様子を見よう。身体に支障が出るようなら止めさせる。しかし、彼女がやりたいって言ってやってるんだから無理に止めるのも成長を止めるからな……。君のトレーナーだった頃を思い出すよ。」

「……なんで？」

「君も通常メニューの他にも自習練しようとしてたじゃないか。止めても「やらせてください！」って聞かなかったもん。……あれのおかけでG1優勝は出来なくても何個か入賞したのかもね……。」

「そうだった。忘れてたわ。」

「親譲りなら止めさせられないよ。」

そうして2人は結局彼女の思うがままにまずはやらせてみようという事になったのだった。

4話　ホイクエンナンテツマンナイヨー

はい、どうもトキノメグルです。
1歳と半年が経った頃、私は保育園に入れられました。
私としては家や外でいつものメニューをこなしたいのですがコミュニティは大事なようなので保育園で勉強することになりました。
……つまらんけど。
流石に保育園で筋トレをするような気持ちにはなれなかったので仕方なく色んな絵本の速読をしたり、粘土でミニチュアもどきを作ったり、ゴ〇シがやってたトランプタワーを作ったりしてるとまぁ、先生含めて皆がこっちを観てくるわ観てくるわ。んで疲れた。
例えば、
絵本の速読をやってたら先生に「凄く速いねぇ～メグルちゃん～。どんな絵本だったの～？」だとか、
粘土でミニチュア作ってたら他の子に変な感じに分解されたりだとか、
トランプタワー作ってたら完成間近で辺りを駆け回っていた子が急に近くにやってきて風圧で崩れるわで、

大変だった。
下2つの影響で先生から「よく泣かなかったね！偉い！」だとか言われるのでめちゃくちゃ羞恥心に襲われた。

それらのハチャメチャな保育園内での生活を過ごし、帰宅する。
毎日のように母さんからは「保育園どうだった？楽しかった？」と、聞かれるので、
「まぁ、普通だよ」
と、返すのが当たり前になっていた。
自分でも最近は愛想が無いなあとか思っているが元々こっちの性格なので修正は難しい。

帰ってからは母さん付き添いの上、もう日常と化したマラソン（今は１０キロ）や姉さんとの併走（１４００～２０００）、筋トレ数種１００回数セット、そこそこ有名な大学の赤本の取り組みなどが楽しみになっていた。（なんか、ウマ娘になって運動することによってかは分からないが前世よりも脳の働きが良い気がするのだ。）

そして、これらをきっちりこなす様子を家族に見せると、

「本当に無茶していない？大丈夫？」

「すげえな。学園のメニューに近いわｗｗてか、天才だわｗｗ」

「（赤本を開いて）コンナノヒトガトクモノジャナイヨー」

とか、言われるので笑顔を返した。

半年前ではマラソンをやって再起不能になったり途中で吐いたり、倒れたりしていたが、今はそんな事はない。１０キロに伸ばしてはいるが、それでも最後に倒れるというような事は無くなった。

姉さんとの併走は最初は全然追い付けていなかったが、何回かやっている内にスパートをかけるというのに慣れだしてからは少しずつ距離が縮まっていった。

筋トレが一番簡単で手軽になった。姉の筋トレグッズを借りられるようになり、今では競う程に毎日やっている。

……正直、家にいる時（トレーニングしてる時）が一番楽しい。

自分の事に時間を費やし好きな事に熱中出来るという事は前世ではあまりなかったから。

でも、こちらの世界は弱肉強食そのもの。それは前世で学習はしているがリアルとなった今の方が何十倍も恐ろしいのだろう。

（実際、目覚まし時計とかで時間を巻き戻すなんて事はあり得ないわけだし。）

だから、私は一つ一つを大切にする。自分の身を守るため、目標を達成するため、前世での残した母さん達への贖罪のため。

5話　正月土手ラン

どうも、トキノメグルです。
突然ですが、私達一家は毎年正月に父さん母さん各々の実家に帰省し、宴会を開くのですが、父さん側の家族……というか父さんのお姉さん、つまりは私達の伯母にはほとんど会った事がありません。
その人は中央トレセン学園で働いているそうなのですが、毎年とても忙しく、特に年末年始も学園内で残る生徒の為に奔走しているようなのです。

……なんとなく分かってはいるけど。

直で会えるのを楽しみにしています。

……そんなこんなで5歳になっての正月です。めっちゃ時が経つのが速いですね。数年分の行事はどこに行ったのでしょうか？（あと、書いている日全然正月関係ないけどｂｙ作者）

……
ある屋敷の座敷
「ミドリィ……メグルゥ……！……ひっく！ちょっとこっちにこ～い！」
「パパ、酔ってるね。メグルどうする？」
「行かなかったらめんどくさそうだから行こっか。」

二人揃って酔っぱらいの前へ座る。すると突然頭を片手ずつで大きく撫でてきた。
「お前たちは俺には出来すぎた娘達だよ～！ミドリはすっげぇ速いし。メグルも速いし、頭良すぎて怖いぐらいだし！あぁ娘が立派だよ～！」

「酔いすぎだよ！……でも、確かに孫たちは立派だねぇ。ありがとうね。立派に育ててくれて。ダイヤちゃん。」
「いえいえ！そんな大層な事は……！」
「何言ってるの。大層な事だよ。現に凄い良い子達じゃないか。」
「……そうですね。」
祖母が嫁であるダイヤを褒め、ダイヤは子供である娘達を優しく見つめていた。
……
「ねぇ、少し退屈になってきたから外で競走しない？」
鹿毛の従姉が退屈そうに尋ねてきた。
「良いよ！メグルもやるでしょ？」
「まぁ、そうだね。身体鈍っちゃいやだし。」
「メグルちゃん、大丈夫？」
「何が？」
「だって、まだ5歳でしょ？こんなことあれだけど、私達11歳だから……。」
年齢の事を考えて言ってくれているのか。実はこの従姉は正月になるとほぼ毎回インフルエンザの影響で正月に来れなかった子で私が既に1歳半ぐらいにはある程度ならば姉さんに置いていかれないぐらいには走れていたのに気づいていないのだ。
私が大丈夫だと言おうとすると……。
「レイン、私の妹を侮ってはいけない。普通に強いよ。」
「え？そうだったの。ごめん。」
「姉さんが言うほどでもないと思うけどね。」
そう言った途端、従姉のレインの態度が急変した。
「ミドリ。」
「？」
「この子、ウチの妹にしちゃダメ？」
「ダメだよ～。気持ちは分かるけど～。」

何のこっちゃ。

……

（実況……翔真）

（解説……翔真）

（スターター：ダイヤグリーン）

（判定・運営：アメノホマレ［叔母］）

そんなこんなで近くの土手のランニングコースにやってきました。

各自アップをし、このクソ寒い中何故かある体操服を来てゲート代わりのライン上に集合し、スタートを待ちます。

1番　トキノレイン　先行

2番　トキノメグル　逃げ

3番　トキノミドリ　差し

【EX　土手　ダート　ランニングコース2000　2000m

晴　良　直線】

晴れ渡る空、この酷く冷たいレースコースを暖める絶好のレース日和となりました。

一番人気を紹介しましょう。

3番　トキノミドリ

二番人気はこの子。

1番　トキノレイン

威風堂々と構える三番人気。

2番　トキノメグル

下剋上は起こりうるのか。

ゲートイン完了。出走の用意が整いました。

……

スタート！
各ウマ娘、綺麗にスタートを切りました。
先頭は、トキノメグル
続いて、トキノレイン
最後尾、トキノミドリ

トキノメグル、快調に飛ばしていきます。
３バ身後ろ、トキノレイン
続いて、トキノミドリ

トキノメグル、ペースが速い。
メグル～！頑張れ～！
「おい！解説！」
スタミナを切らさないか心配です。
残り１０００ｍを通過！
依然先頭は、トキノメグル
４バ身後ろ、トキノレイン
すぐ後ろ、トキノミドリ

トキノメグル、掛かっています。
残り４００ｍを通過！
土手の（最後の）直線は短いぞ！後ろの娘達は間に合うか？
先頭は、トキノメグル！速度を更に上げた!?
トキノレイン、トキノミドリ、上がってきます。
トキノメグル、速い、速い、独走だ！

……
トキノメグル、今、一着でゴールイン！
５歳が１１歳に逃げで勝った！奇跡だ！下剋上だ！
二着はトキノミドリ

三着はトキノレイン
よく頑張った！

……
Ⅰ　2
　　5
Ⅱ　1
　　クビ
Ⅲ　3
タイム　2：02．5
……

「マジで勝てんかった……。」
「最後、5バ身差って……。」
「ウチの妹、化けもんやわ。あれで5歳なのが分からん。」
「……一応、私もミドリも同学年どころか上級生と比較しても速い方だよね？」
「うん。逃げであそこまで加速できるのか……。」
「……鍛え直さないと。」

……
家に戻り、さっきのレースの反省会が行われた。

「……チェッカーやるか？皆。」
「チェッカー!?2種類の駒が各々12個あるあのゲームの事？やるやる！」
「そう！それ！……って違う！ステータスチェッカー！自分の強さを数値化又はランク化させて見るの！」
　姉さんが目を爛々とさせ、ボードと駒を即座に取りに行こうとしたが、父さんは突っ込みながら止めた。
「あれ、嫌なんだよね～。」

「どうして～？」
「自分がどのレースに適しているかやら自分がどれだけ弱いかを超的確に言い当ててくるんだよ。本当に嫌だったなぁ……。」
「仕方ないだろ？あれを見ないときちんとトレーニングが上手くいっているかをレース以外で判断しにくいんだから！」
「やるけど……どうするの？」
「これを使う。」
　そう言いながら父さんが出したのは見た目血圧計の機械だった。
「穴の中に腕を通して血圧を測定するみたいにする。すると、この機械は理屈は知らんが自分の強さをステータスでは５つの項目、適性では１０項目データ化してくれ、また、総合的な評価をも付けてくれる謎の極めて優秀な測定器なんだ。」
「本当に謎だね。」
「トレセン学園がトレーナーに無料で貸し出してくれるものなんだが、これは姉貴からくれたものなので問題なし。壊さないように使ってくれ。」
「伯母さん最近ホントに会わなくなったね……。」
「そのうち会えるよ。さあ、誰から使う？」
「じゃあ、私から！」
「ミドリの次は私！」
　最後は私か。

……

トキノミドリ
バ場適性
芝　Ｃ
ダート　Ｃ
距離適性
短距離　Ｂ
マイル　Ｂ

中距離　C
長距離　D
脚質適性
逃げ　E
先行　C
差し　D
追込　G
ステータス（MAX1200）
スピード　176　F＋
スタミナ　95　G＋
パワー　185　F＋
根性　103　F
賢さ　92　G＋
スキル
固有
Greens Ran Lv.1
総合
E　620

……

「結構、頑張っているじゃないか。」
「そう!?……でも、もっと頑張らないと!」
「作戦は先行の方が良いみたいね……。今度は先行ではしってみよっか。」
（あれで高いの……？メイクデビューのキャラ以下じゃん……。）

……

トキノレイン
バ場適性
芝　B
ダート　D

距離適性
短距離　Ｆ
マイル　Ｅ
中距離　Ｃ
長距離　Ｃ
脚質適性
逃げ　Ｇ
先行　Ｂ
差し　Ｂ
追込　Ｆ
ステータス（ＭＡＸ１２００）
スピード　１６７　Ｆ＋
スタミナ　１４８　Ｆ
パワー　１５３　Ｆ＋
根性　１２０　Ｆ
賢さ　１１４　Ｆ
スキル
固有
フォール・レイン　Ｌｖ．１
総合
Ｅ　６５８

……

「あれ、私の方が評価点は高いや。」
「あくまで、ステータス上ってだけだから、色んな要因が重なるレースでは数字だけでは勝負にならないよ。でも君もよく頑張っているね。」
「レイン、このまま頑張りましょうね！」
「そうだね！」
「さて、最後はメグルのだが……。」
……

トキノメグル
バ場適性
芝　Ｃ
ダート　Ｂ
距離適性
短距離　Ｃ
マイル　Ｃ
中距離　Ｂ
長距離　Ｂ
脚質適性
逃げ　Ｃ
先行　Ｃ
差し　Ｃ
追込　Ｃ
ステータス
スピード　２０１　Ｅ
スタミナ　２１４　Ｅ
パワー　１８３　Ｆ＋
根性　３５８　Ｄ＋
賢さ　８１４　Ａ
スキル
固有
オールターフ　Ｌｖ．１
総合
Ｄ　３００５
……

「「「「……。」」」」
全員が静まり返った。
「……なんで？」

静まった空間を切り裂くように姉さんがこぼす。
……まずい。嫌な予感がする。
変というかこんな気持ち悪い成績を見て嫌悪感を抱いてしまったか？
家族には嫌われたくなかったのだが……。
意を決し、今から言われるであろう罵声を耐えようと構える。
「……なんで、こんなに賢いの!?いつ勉強してたのよー!!」
……そこかよ。
「これは……。負けるわけだわ。……賢さ。」
（（現役時代の私達の賢さより遥かに高いんだけど。））
「ほえ～メグルちゃん、凄いねぇ～！」
（なんで、こんなに適性が高いんだ!?）
父さんだけがきちんと分析していた。
……てか、賢さだけでDになってないかこれ？（流石にそれはないか……。）

……

「いやー！目が覚めたわ。さっきのメグルのチェッカーで。」
「あの成績だったら飛び級できるんじゃない？」
ニシノフラワーみたいになれってか？……ありかも。無理だろうけど。
「……なんか、本当に出来そうなステータスだったな。」
うそやろ？てか、日本って飛び級制度普通にあったっけ？無いでしょ？
「小学校からかぁ。出来るの。」
へ？
「実はウマ娘科なら非常に優秀な成績を修めた生徒に限り飛び級が出

来るのよ。」
「ウマ娘科？なにそれ？」
「小学生からは人間をヒト属とウマ娘属に分けて学習させるのが義務なの。じゃないと特に体育の時にヒト属の子がウマ娘の元からある強力な力によって怪我をしかねないからなのよ。」
　確かにそうだ。ウマ娘の持つ力は絶大でそれを普通の一般人に振るえば良くて大怪我だろう。
「そして、大抵のウマ娘はスポーツ枠として学校に入学するの。だからスポーツ……というか足が速ければその時点で成績が上がるからあんまり学年が関係ないのよね。」
「ただ、勉強はしていないと飛び級制度の条件にある一定の学力を所有しているに反するから勉強は大事なんだ。」
「確か、最年少で１０歳でトレセン学園中等部に入学した娘がいたかな？ウマ娘はスポーツ推薦枠として普通の小学校なら小学校内での飛び級並びに学校間での飛び級が出来るのよ。」
　えぇ……。小４で？あと、その理論だと小１でもやろうと思えば中１になれるってことですやん。
「ただ、賢さがＡって……。一体本当にどこで色々な事を知ったのかしら……？」
　皆が不思議そうに私を見つめる。
　流石にまだ前世の高校生から転生してきましたなんて言いたくないので、
「姉さんの学校の教科書を見てたらなんか、分かったから。……それだけ。」
　そう言うと、また皆が黙り込んだ。

……
　正月が終わり、早くてもう８月。
　相変わらず保育園は退屈で仕方がない。
　ん？時間を飛ばしすぎ？

何を言っているんだねモルモット君。
私は【トキノメグル】。時が廻り、経つのは早いに決まっているじゃないか！はっはっは！
……冗談は良いとして、最近、家で困っている事があるんです。
「お願い！宿題、教えて！」
ええ……。

ミドリ姉さんが夏休みに入ってからずっと宿題を放った結果、残り1週間で追われておられます。
両親はやれやれ……。とかあまり怒らない様子。
そして、とばっちりは急にやって来て、
「この算数ドリルの問題が分からないの！教えて！メグエモン～！」というか、解いて！メグエモン～！」
どら焼き食いのロボットネタは良いとして、小学校高学年が保育園児に算数の問題を尋ねてくるなんてどういう了見ですか!?
「姉さん、宿題は自分でやるもんだよ……。あと、私、保育園児だよ？小学校の問題なんて分かんないよ。」
「異議あり！じゃあ、あれは何!?あの赤くて分厚い何が書いているかさっぱり分からない大量の辞書みたいなのは!?」
成る程、覚えていやがったこの姉さん。
このブツは赤本っすね。解きたいから母さんに頼み込んで買って貰ったものです。
因みに母さん曰く全く分かんないそうです。父さんも頑張っていましたが、流石に全問解くのはキツかったそうです。
……全問解いた？
「私、保育園児だから、小学校の問題分かんないもん！だけど暇だから高校の問題解くもん！」
「ワケワカンナイヨー！」
「Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ．」
「クソッタレー!!」

泣きながら机にかじりついて必死に宿題をやっていく姉さん。
結局終わったのは始業式があった次の日だったそうで。

6話　姉達の受験直前正月特別体験

早いもんで私、トキノメグルは小1です。
時間の飛ばしすぎについてはサポートセンター作者にお問い合わせ下さい。
今回はついこの間あった事を話していきます。
作者の意図により1話当たりの時間がはちゃめちゃで本当におかしい事になっておりますがご容赦下さい。
あと、決して正月がめちゃくちゃ好き!って言うわけじゃありません。単に保育園編で良いネタがさっぱり思い付かないからとの事です。
……ちょっと作者殴ってきます。

……
トキノメグル　保育園最高学年
トキノミドリ　小学校最高学年
トキノレイン　小学校最高学年
の、正月での出来事。

……

「タイマンだぁ!メグル!ミドリ!」
「タイマンは1対1だよ。」
「ふふ。かわいいポニーちゃん。強くなった私と競おうというのかい?」
「去年、負けてるけど。あと、ポニーって何?それと、何の影響を受けたの?」
「カッコつけたかっだけ。」
「何かかわいいらしい名詞が浮かんだだけ。」

……まだ、寮長ズ出てきてないよな？

「あー、皆、今日は土手じゃない所に行くぞ。車に乗るから支度してくれ。」

「？まだ朝だし、寒いよ？」

「良いから、今から楽しいとこ行くぞ！」

「？」

テーマパークでも行くの？こんな時期に？

……

【ＥＸ　東京（中央トレセン学園）　トレーニングコース２４００　２４００ｍ　芝　晴　良】

「ちょっと待て。なんで本当にレース場に来てるの？てか、ここトレセン学園じゃん!?というか、上の【】はどこから来た!?」

「だって、姉貴が使用許可取ったから……。」

「いや、どういう事？本当に訳分からん……。」

「いや、近いし、ミドリもレインもここの入学を希望してるって事を姉貴に言ったら、「……是非来て。いや、来なさい。来て下さい。……たまには正月らしい事したいの。姪っ子達に会いたいの……。」だって。」

ｏｈ……ｂｌａｃｋ……。

「お、噂をすればだ。姉貴！」

遠くから何やら土煙がこちらに向かってきている。

そして、次の瞬間。

「ぐぼはぁ!!」

ホマレ叔母さんが出してはいけないような声を出しながら土煙に飲まれた。

……

「ホントに酷い目にあった。……姉さん。ターゲットを確認したら頭突きを食らわす位の勢いで抱きつくの止めた方が絶対に良い。」
「だって……。やっと私にも正月っぽい再会が出来たんですもん。たまには妹達に甘えたくもなりますよ……。」

私達姪っ子達は目の前の事が凄すぎて唖然としていた。
「……紹介するわ。この人が貴女達の伯母で私達の姉さんの……」
「駿川たづなです。ミドリさん、レインさん、お久しぶりです！」
「久しぶり！6年ぶりかな？会いたかったよ～。」
「私なんか8年ぶりらしいけど覚えてないや。」
「そうですね……。本当は毎年行きたかったのですが、何分ここには色々大変で強い娘達がいますから……仕事が減らなくて。」
「メグルさんは……ほとんどはじめましてですね。」
「はじめまして。話は聞いていたので会いたかったです。たづな伯母さん。」
「もうこんなに立派になっていたのですね……。早いものです。6年前は小さい赤ちゃんだったのに……。」
「メグルが産まれた時以来だもんな。姉貴は。」

……そう、私が産まれた時、姉さんともう一人病室に入ってきていた人がいたが、その人が駿川たづなだったのだ。
しかし、あの時とまるで姿が変わっていないな。ゲーム補正か？
「んで、頼んでいたのやって貰えたか？」
「出来ていますよ。翔真。今から呼んできますね。」
そうしてたづなさんは軽い足取りで校舎に入っていった。
……
数分後
「な!?」
「初めまして諸君。諸君がウチの学園の理事長秘書の親戚方かな？」

そこに居たのは、
ジャージ服を来ているまだ【皇帝】と呼ばれていない時期の
シンボリルドルフだった。
「……トレセン学園の生徒さん……。」
「私はシンボリルドルフ。中央トレセン学園の中等部の生徒会長だ。今日は生徒会が極秘に計画していた正月最初のたづなさん慰労の会にお越しいただき感謝する。来てくださった諸君には是非とも私達のトレーニング、模擬レースの観察や校内見学などを体験していただきたいと思っている。楽しい気持ちで参加していただけると幸いだ。」
「うぉぉ!!ホントに?!凄いよ!毎年のファン感謝祭に行ってもこんな事は中々出来ないよ!!」
姉さんと従姉のレイン姉がおおはしゃぎする。彼女らがトレセン学園に受験する数週間前にこんな事が出来るのは相当に幸運な事だろう。(何たって受験する直前に学園の生徒から本物の技術を学べるのだ。付け焼き刃でも本物。ずっと間違え続けた技術を出すより全然ましだろう。)」
私は私でゲームで見た推しの1人が目の前にいることにまだ信じられていなかった。
本当に……凄いことだ。
「!君、大丈夫か?」
「!メグル、どうして泣いているの?」
……え、泣いているの?私が?
「すまない。怖がらせてしまったか?」
「違!違います!……凄く格好良かったので……つい、涙が……こぼれて。」
緊張のせいか、それとも感動か。ルドルフのまだ少し幼い姿であれども姿を見て私は無意識に涙がこぼれていたようだった。
「そうか……。ありがとう。ならば私はより一層精進し、君のような

娘に背中を見せなければいけないな。……君たちの名前を教えて貰えるかな？」
「じゃあ、私から！私はトキノミドリ！今年、トレセン学園に入学します！」
「ほう……受験する前から入学する……か。その心構え立派だ。ミドリ君、君が中央に入学する今年の春を楽しみにしておこう。」
「はい！」
「次は私。トキノレインと言います。私もミドリと一緒にトレセン学園に入って切磋琢磨していきます！」
「その心意気や良し。ミドリ君と共に是非ともトレセン学園に入ってターフを駆け抜けてほしい。」
「はい！有難うございます。」
「最後は君だね。」
　遂に私が自己紹介することになった。憧れのルドルフ……。見るだけで身体が震えそうなのを必死で抑えながら声を出す。
「私はトキノメグル。ミドリ姉さんの妹で今年、小学生になります。未だ保育園児ですが私も姉さん達と同じようにトレセン学園に入学してそこで出会うウマ娘全員と走りたいと思っています。」
「これは驚いた……。さぞや君は一所懸命。文字通り一つ一つを大事にし、それらに命を賭し、自分を裏切らない強いウマ娘になるのだろうな。……是非とも中央に入り、その剥き出しにした飢えを満たし尽くしてくれ。」
「はい。ありがとうございます。」

「それでは、諸君。まずは私達のレースを観ていただきたい。無論私も走る。私達が本気で魅せるレースをしかと目に焼き付けていただこう。」
　そう言うルドルフの眼は〝燃えていた〟。
……

【ＥＸ　東京　芝　たづなさん昨年もお疲れ様杯　２０００ｍ　晴良　左】
（実況　トレセン学園職員）
（解説　トレセン学園職員）
（スターター　トレセン学園職員）
（ゲート　トレセン学園職員）
（判定　トレセン学園職員）
レースメンバー人数　９人
レースメンバー紹介　省略

さぁ、晴れ渡る空、寒波押し寄せるこの冬の中パドックの中は真夏のように熱くなっております。
レースに出走するメンバーの紹介の前に、理事長秘書駿川たづなのご親戚の方々にトレセン学園にお越しくださった事、職員一同御礼を申し上げます。
それでは、三番人気までを紹介しましょう。
三番人気、４番マルゼンスキー
「ちゃお！たづなさんの親戚っ娘！私、かんばルンバ～！」
ちょっと何を言ってるのか分かりません。
二番人気はこの娘、９番エアグルーヴ
「頼みますから……変な事は言わないで下さい……。」
何やらエアグルーヴのやる気が下がりそうな雰囲気ですね。
実況「最後に一番人気、１番シンボリルドルフ」
「ふふ、誠心誠意レースに臨もう。」
（ほっ。）
ルドルフが短くレース前の言葉を述べたのを確認したエアグルーヴはホッと息をついた。……が。
「私は生徒会長として快調に会場を盛り上げよう！」
「うわぁーーー!!!!あぁ……。」
エアグルーヴのやる気が絶不調になりましたね。

ええ。彼女には御愁傷様としか言えませんね……。

周囲の観客席からは「あぁ……。」「かわいそう……。」「会長、副会長恒例行事だもん。」やらが聴こえますね。

今回のレースは皆勝負服を着ていますね。

今回のはたづなさんの親戚の方々がお越しになっているので気合いが入っているのでしょう。現在、エアグルーヴ以外は全員が良いところを見せようと張り切っています。

果たして出鼻をおもいっきり挫かれたエアグルーヴは立ち直れるのか？それともやはり会長が勝ってしまうのか？はたまた別の娘が勝利を掴むか？

……ゲートイン完了、出走の準備が整いました。

……

スタート！

エアグルーヴ以外綺麗なスタートを決めました！

やっぱりエアグルーヴ、会長のダジャレ（トラップ）に引っ掛かった！

先頭は４番マルゼンスキー

快調に飛ばしていきます。

続いて３番

その後ろ６番

１バ身差９番エアグルーヴ

すぐ後ろ７番

その横１番シンボリルドルフ

１バ身差８番

その後ろ５番

更に後ろ２番、現在殿だ！

エアグルーヴ、上がってきます。

スタミナを切らさないか心配です。
依然先頭は４番マルゼンスキー
１バ身差３番
続いて後ろ６番
すぐ後ろ９番エアグルーヴ
更に１番シンボリルドルフ
後ろ７番
１バ身差８番
後ろ５番
最後尾は２番！
レースは中盤に差し掛かり１つ目のコーナーになります。

最初はマルゼンスキー
エアグルーヴ、シンボリルドルフ、ペースが速くなる！これは作戦でしょうか？
シンボリルドルフの作戦でしょうね。マルゼンスキーが先頭をキープし続けているのでそのまま逃げられる可能性があります。その為に敢えて速めに足を出しているのだと思われ、エアグルーヴはそれに負けじとペースを速めていますが、スタミナが持つかどうかですね。
残り１０００ｍを通過！
エアグルーヴ、まだ何かぎこちない！

先頭、マルゼンスキー
続いて６番
後ろエアグルーヴ、
すぐ後ろシンボリルドルフ
更に３番
１バ身差７番
後ろ８番
更に５番

後ろ２番！
先団が段々と固まっていってます。
２番ペースを上げた！
彼女は追込ですのでここからが勝負どころでしょう。彼女のパワーに期待です。
残り６００ｍ、最終コーナーに差し掛かります。
マルゼンスキー、エアグルーヴ、シンボリルドルフ、５番、２番一気にペースを上げる！
６番、負けじと粘る！
さぁ、最終コーナー誰が最初に抜け出るか。
最初に出てきたのはマルゼンスキー！
続いてエアグルーヴ！
すぐ後ろシンボリルドルフ！外から加速する！
６番、５番、２番並んで先頭目指して加速する！

２００を通過！マルゼンスキー！粘る粘る！
だが、後ろからエアグルーヴとシンボリルドルフが更に速度を上げる！
誰が勝ってもおかしくない、３人の内、誰が最初にゴール板に届くか!?

……

勝ったのはシンボリルドルフ！
流石会長、模擬レースでも勝利は譲らなかった！
二着はマルゼンスキー！
三着はエアグルーヴ！

……
Ⅰ　１　クビ
Ⅱ　４　クビ

Ⅲ　9　1
Ⅳ　2　1／4
Ⅴ　5

……

観客席

「凄……。」

「これが、中央……。」

「レース中、殺気まで感じる程だった。」

「……でもやっぱ楽しそうだった。」

「レインもそう思う？」

「だって、勝ったルドルフさんは当たり前かもだけど、負けた8人も皆笑ってるもん。みんなやりきったって顔だよ。」

「そうだね。エアグルーヴさんも最初は事故ってたかもだけど、最後まで本気を出して先頭を目指している姿、格好良かったもん！」

「メグルはどうだった!?」

二人が一斉にこっちを振り向く。

「!?」

「……感動。」

……そう、感動のあまり滝のように涙が……。

前世でもその気持ちはある程度分かっていたが、今ならアグネスデジタルと3時間以上話せそうだった。

……

「私達のレースはどうだったかな？少しは君達に背中を見せられたかな？」

「「すごく格好良かったです！」」

「それは良かった。私達も本気で走った甲斐があったよ。メグル君はどうだったかな？」

「……感動。」

「一言にまとめたその言葉、重し。ありがとう。」

……

「ここからは私が案内しよう。付いてきてくれ。」

制服に着替えたエアグルーヴが私達３人の校内見学ツアーをしてくれることになり、私達は物凄い高揚感を得た。

ファン感謝祭でも校内見学をしたことはあるがトレーニング中の様子を生で見ることは出来なかったのだ。

「今日は元日だから人はかなり少ないがそれでもこの学園には帰省しないウマ娘もいる。そういう者達は今日は主に自主トレーニングをやっているのでそれを観察しよう。」

「お願いします！」

……

練習用コース

「ここが練習用コースだ。芝とダートの２種類があり、トレーニングの際にはここのコースを使う生徒が大半だ。」

「ほぇ……こんな広いんだ……。何個かコースがあるし。」

「コースの貸切を申請するトレーナーもいるからな。そのような要望の対応として何個かターフが用意されている。余程の事がない限りは使えないということは無いぞ。」

「あ！あそこでトレーニングしているウマ娘がいるよ！」

「では、あの者達を観察してみようか。」

……

「はぁ、はぁ、……５０００終わり。５分休憩した後は坂路をやろうかな……。」

「ふ～ダウン終了。さて、午後はプールに行こうかな？」

「王手！なんの……これでどうだ……？んな!?それは！幻の黄金の一艘……！」

「５５～５６～５７……ピ。」
「はぁ……はぁ……どうだった？」
「５８．６秒。さっきより０．３秒速くなってるよ。」
「よし。もう一回行ってくる～！」

「これでどうだ？ゴルＣ？私のアルティメットコンブには叶うはずがねぇだろ？」
「いや……まだいける。ハッ！……これで終いだぁ！タスＦ！
「なんだと!?」
「ヤター！勝ったぁ！おっし、これでポン・○・リングの丸いところは頂くな？」
「全部じゃねぇか!?」

……

「皆凄いね……。集中してトレーニングしてる。」
「私達もここで頑張れるようになろう！」
「……。」
（何か特別既視感のあるウマ娘がいたような……。）
　姉さん達が感動している中、グルーヴはさっきの変なやり取りをしているゴルＣとタスＦを遠くから睨み、黙っていた。

……

　その後、一通り校舎内を見学し、また練習用コースに戻ってきた。

　ルドルフ「エアグルーヴ、校内見学お疲れ様。ここからは私達も参加して、君達にトレーニングのアドバイスをしようと思っているが、参加するかな？」
「「やります！」」

「お願いします。」
「では、今から三人にはステータスチェッカーとトレーニング内容を私達に教えていただきたい。」

……

「最初はミドリ君……。うん。今年受験する者としては中々のものだ。ただ、少し賢さの値が低いかもしれないが……。総合的な評価は悪くない。」
「勉強……これでも頑張っているつもりなんですけどね……。」
「何にせよ継続的な努力は必要だ。あと、君は短距離型だからスピードとパワーをも伸ばしていこう。」
「分かりました！」
「次はレイン君……。成る程。かなり良いな。全体的にバランスが取れている。ただ、突貫した能力は無い。これは君が決めることだが、バランス良く弱点を無くしていくのも良し。突貫した能力を得て、武器とするのも良しという感じだ。適性は長距離型なので私はスタミナのトレーニングを勧める。」
「悩みますね……。」
「時間は有限だが、決して焦ってはいけない。後悔が無いように己を鍛えてくれ。」
「はい！」
「さて、最後はメグル君だが……。……ん？」
「どうかなさいましたか？……!?」
　姉さん達のアドバイスは順調に進み、私の番へとなった瞬間に会長と副会長が止まった。
「……こほん。そうだな……。はっきり言えば、極端で且つバランスが良い……という矛盾した能力だな……。うーん、どうしたものか……。いつもやっているトレーニングの内容とある程度の生活を教えてくれ。」
「そうですね……4時に起床して軽い朝食をとった後、朝の勉強として難関中学校（多分）の過去問一年分の文系理系のどちらかの早解き、

その後は毎朝のハーフマラソン、昼に食事をとった後、数種１００回筋トレ数十セット、又は週に数回プールのレーンを借りて3時間、夕方は坂路シャトルランもどき高度差５ｍ距離１００ｍの5セットと１００ｍシャトルラン1セット、夜は軽い筋トレしながら大学の赤本解いてますね。あ、絶対にアップとダウンは念入りにやっています。」
「「嘘でしょ……。」」
　事を聞いた学園の生徒達が引いていくなか、ルドルフは更に何かを考えながら私に尋ねる。
「……君、歳は？」
「6つです。今年、小学校に入ります。」
「6歳……このトレーニング内容を君のご両親は知っているのか？」
「両親だけでなく、ある程度の親戚なら。多分ですがたづな伯母さんも知っています。」
「……。ふふふ。……その歳でもう既にこれ程までに己の命と魂を賭けていたとは……。非常に興味深い。君のような子供に何がそうさせているんだ？」
　咎めるかと思ったが興味深いと言い、より追及してきた。
「……強いて言えば、自分が自分にやれと言うのです。
　そして、自分が自分に『お前には才能はない』……と。だから私はそんな自分に抗うのです。年齢関係なく、私は私に打ち勝つ為に。」
「やれ。しかし、才能はない。と言ってくる矛盾の己か……。
　そして君はそんな矛盾の自分に抗う……
　造反有理。君に道理があるならば示さねばならぬ。……一時でも時間が惜しい。君は今以上の茨の道を歩む覚悟はあるか？」

　そんな事はとっくに決まっている。
　私は貴女方に憧れを持っている。そんな貴女を間近に共に競うために、私は闘うに決まっている！
「絶対に己に抗います!!」
「その意気や良し!!君の最善を尽くせ！善は急げ！時は有限だ！……君の挑戦を心待にしよう。時が来次第、私は君のためにも全力で相手

になろう！」
「必ず最善を尽くします。それまで待っていてください。必ず貴女と肩を……いや、超えてみせますから！」
　気持ちは本心だけど、言ってて恥っずいなこれ。
「楽しみにしよう。必ず来てくれ。メグル君、ミドリ君、レイン君！」
「「はい！」」

　こうして、私達の為に開かれた正月の特別体験学習会は終わりを告げた。

……

　その後、コースでは、

「あんな会長……初めて見たかも。」
「なんか、すっごくヒートしてた。」
「てか、たづなさんのご親戚のお子さん方ヤバくね？」
「特にあの小さい黒毛の娘……。メグルちゃん？だっけ？あの歳で？あれを？」
「「……なんか、身震いする。トレーニング行こう。」」
　何か信じられないものを見たり聞いたりしたせいか、寒気を感じる者が出てくるようになっていた。

……

　生徒会室

「……会長。まだ悩んでおられるのですか。」
「当たり前だろう。まだ小さい娘だというのに……。私はあの娘に対して責任をとれるのだろうか。言うは簡単なれど実行するのは難し。その為に言葉には大きな影響力があるというのに……。」
「私はあの娘に本当にそのような力が出せるのか全く信じられません。そして、何故そのような結果が出たのかも。」

「全くだ。私ですら怯えかけているのだぞ。……それにあの娘は己の事を全く信じていない。中途半端な思想は身体や運動能力を蝕む事を分かってる上なのかは分からないが、少なくとも彼女のような娘では正常ではない。異常だ。だが、あれは私には止められない。止めてはいけないとあの娘の眼が訴えていた。……あれは、本当に努力の怪物になるのかもしれないな。」

「……これからのレースがより楽しくなりそうだ。」

生徒会関係の書類を片しながらルドルフは将来やってくるであろうライバル達の健闘を祈るのだった。

7話　ピッカピッカの～1年生♪

どうも、小1のメグルちゃんです。

どうやら姉さん達は無事中央トレセン学園に合格したそうですよ。
（コネなんか無いよ。）
受かった時はスマホをスピーカーモードにして
「受がっだよ〜!!!」
『わ〜だじもだよ〜!!!』
と、大声で泣きながら言ってましたよ。家の壁が震えていたよ。

因みに姉さん達から聞いた情報によると、
試験内容は、筆記試験、実技試験、面接、総合評価点の4つがあり、実技試験の結果によって大きく合否やら特待生などが別れるそうです。
姉さん達は特待生にはなれませんでしたが無事に合格し、今では家を離れ、寮生活を送っています。
入試は1月中旬、場所は勿論東京中央トレセン学園。
入学者は2月には晴れて中学生となるそうです。その為かウマ娘科の学級だけは普通の卒業式よりも一月程早く卒業式をおこなうそうですよ。（結構、インターバル短いのね。）

さて、私も4月から小1となり、無事にウマ娘科に入りました。
……どれだけいれるかは分かりませんが頑張りたいと思います。

……

小学校　教室　（入学式後）
「皆さん、おはようございます。」
「「「おはようございます！」」」

「今日から貴女達は小学校1年生のウマ娘です。私は担任の……です。皆と一緒にお勉強したり一緒に運動するのをとても楽しみにしていました。よろしくお願いしますね。」
「「「よろしくお願いします！」」」
……小学校に上がったのだから少しは保育園の時よりかはマシな生活をおくれると良いんだけど。
「では、最初に皆の自己紹介から始めましょう。誰か一番に自己紹介したい娘はいますか？」
「はい！……私、アイネクライトと言います！好きなことは走ること！足ならじしんがあるんだ！」
元気やな……。
「私はエミリアレッド。皆さんとこうしてお会いできる事、光栄ですわ。」
お、マックイーン？じゃん！ｃｖ．金船
「えと、フーラルレッド……。エミリアお姉様の妹です……。仲良くしてね？」
……ＧＪエミリアお姉様。歓迎します。……米くいてー。
「私はアイリスフェザー。これからよろしく御願いします。」
直訳　虹の神の羽？
「ビクトリングだ。よろしく。」
Ｖｉｃｔｏｒｙ!! Ｗｈａｔ　ａ　ｂｕｌｌｉｓｈ　ｎａｍｅ　ｙｏｕ　ｈａｖｅ！ Ｗｉｌｌ　ｙｏｕ　ｌｉｖｅ　ｕｐ　ｔｏ　ｍｙ　ｅｘｐｅｃｔａｔｉｏｎｓ？ ……Ｂｕｔ，ｉｆ　Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ａｂｏｕｔ　ｉｔ，ｔｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｕｎｅｘｐｅｃｔｅｄｌｙ　ｍａｎｙ　ｇｉｒｌｓ　ｌｉｋｅ　ｔｈａｔ．Ｈｍｍ……．Ｏｈ！ Ｔｒａｎｓｌａｔｅ　ｉｔ！
めんどくさかったら後書き見てね。
……
その後も私以外全員の自己紹介が行われ、その都度にうるさい私の

期待やら訳やらが脳内再生されまくったが、そうこうしているうちに最後に残った私の番になった。
「トキノメグルです。姉さんと従姉が中央トレセン学園に入学したので私も後を追って頑張ります。どうぞよろしく。」
メグル（自分で言うのもあれだけど、つまんない自己紹介……。）
「はい。全員の自己紹介が終わりましたので、能力測定、身体測定に移ります。皆、購買部で先ほど受け取った体操服を持って保健室に行きましょう。私に付いてきてくださいね～。」
「「「はーい。」」」
そして、ぞろぞろと保健室に向かうのだった。

……

「はい。ここが保健室です。怪我した時や何か身体が気持ち悪くなった時には遠慮なくここに来て中にいる先生に相談しましょう。今日は皆の身体の様子を診ますので中にいる先生に挨拶をしてくださいね。」
「「「はあい。」」」

……

とりま、ある程度の結果を伝えよう。
身長、体重は普通の小1と同じものだと思って欲しい。
（そういえば、オグリとかスペとかはあんなに食べてて体重がバカみたいに増えていないのだろうか……。特にオグリ……。育成の時には大食いイベントが多いお陰で初めて強いSランクが出来たんだよなぁ……。休まなくても連続３０回復とか普通にあるもん……てか、オグリだけ星が5だったなぁ……【ガチ】。女神像有るだけ使いまくってたもん【ガチ】。燃力、あげません、直一気、鼓動の４連終盤加速追込改造オグリ……育てたなぁ……【ウソ】。クリクリのイベント……最高でした……。ありがとう、Ｃ○ｇａｍｅｓ……。いや、マジで固有の演出好きすぎてあれだけでご飯が……。あ、……長文失礼し

ました。）

能力測定は、お察しのとおりです。

……

トキノメグル

バ場適性

芝　B

ダート　B

距離適性

短距離　B

マイル　B

中距離　B

長距離　B

脚質適性

逃げ　B

先行　B

差し　B

追込　B

ステータス（MAX1200）

スピード　254

スタミナ　308

パワー　237

根性　482

賢さ　905

ステータス補正

未定

スキル

固有

オールターフ　Lv.1

総合

Ｃ　４０２４
……
これが、どういう値なのか。
先生に調べて貰った所、
今年度の中央トレセン学園の合格者の無差別平均総合評価点、無差別最高総合評価点がこちら。
Ｅ　１２７７
Ｅ　１５１５
例年の無差別平均総合評価点、最高（おおまか）はこれ。
Ｅ　９００～１０５０
Ｅ　１３００～１４００
今年度はこれでもかなり高くなり、実技においてかなりの好成績を出した者が多かったのだそうで。（その結果、私の姉さんやレイン姉が割と好成績を修めたにしても特待生になれなかったという。）

絶対、評価点は賢さのせいだ。最初から分かってはいたけども！
……それより、何かハッピーミークみたいな適性だなぁ。全適性Ｂって……。あれ、彼女、脚質もだっけ？

放課後

……という訳で私、今、
校長、教頭、学年主任、担任含めた５人で会議室の椅子に座らされております。（誰か助けて……！って言いたいなぁ。）
「メグルさん、ごめんね……。怒っているわけじゃないの。ただ、こういう結果が出てしまったからには一応、訊かないといけないの。本当にごめんなさい。」
……。まぁ、そうなるよね。
「メグルさん、この成績については親御さんは分かっているのか？」
「ある程度は……。」
「因みにどのぐらいなんだ？」

「……私が５歳の時に、家で計測したら……。総合がＤ　評価点は３００５点です……。」
「５歳!?３００５点!?……なんか頭痛くなってきた。」
「君よりもメグルさんの方が大変だ。……しかし、賢さが９０５って……。何をやったらこうなるんだ？」
「相当賢さの値が高いですよね……。根性の値も小学生のものとしてはバカげてはいますが……。」
「他の値もだ。小６でもこんなに高いのはめったにいない。」
「メグルさん、君はもしかしてご両親に強いたげられてこんな成績になったのか？」
「待て。その質問はおかしい。この娘には姉がいたはず……トキノミドリか。あの娘の小１時の能力も他の娘よりかは高かったがここまでではなかった。更にはミドリは極めて健康的で且つよく「妹が凄いの！」とか言っていたではないか。その時は全く問題だと感じていなかっただろう？」
４人が頷く。
「……ということは、メグル。これは君の努力によるものかね？」
「まぁ……そうなりますかね……。あはは……。」
「具体的に何をしていたか、私達に教えてくれないか？」
「分かりました……が、１つ御願いします。」
「？」
メグル「入学したてで且つ生徒から言うことでは無いのは分かっていますが、私は姉や従姉を追いかける身。学校内での成績が良かった場合、私の飛び級を考慮して欲しいのです。」
「……本来なら、絶対はぐらかすのだが……。こんなものを見てしまってはなぁ……。分かった、検討する。他の者も良いな？」
「校長の仰る通りですよ……。」
「てか、なんでこんな結果になったんだ？」
「それはですね……」
私は１歳からやり始めた毎日の習慣を先生達にプレゼンした。

……

「……以上です。朝練に関しましては今朝も行いました。」

「やりすぎだ!!」

「1歳の身体から血反吐が出るようなトレーニングを始め、身体が慣れ始めたら同じような症状が出そうになる寸前まで身体を追い込む!?本当に身体を壊したらどうするんだ!?」

「てか、保育園児が過去問、赤本解くって何なんだ……!?何かそういう天才がいたような気もするけどまさか目の前に現れるなんて……。」

「さ、最近のトレーニングなんて、トレセン学園の中等部どころか高等部ですら満足に出来るかどうか……。」

「私らが教える事ってあるか?」

「「(ほぼ)無い(です)!」」

「だろうな……。」

この状況、どうすれば良いの……?

……

「……もう、私の独断で良いか?」(疲れた……。)

「「どうぞ!」」(疲れた……。)

「……明日から君をウマ娘科特進クラス5年生に編入する。」

「は……はい。」

「君が入る事になるウマ娘科特進5年生担任には私から話を通しておく。だが、君の所属はあくまで1年生。基本的には午前の授業を1年生のクラスで。午後からは5年生のクラスで授業を受けてくれ。表向きは1年生で裏の顔は5年生だ。勿論、君が卒業するであろう年も来年度にする。また、君のような事例は極々稀なのである設定を作る。」

「はい。」

「君は5年生に編入することになった転入生で且つ超成績優秀……。というのと、超成績優秀な1年生……。というものだ。これらの超成績優秀というのは学校側が容認する程の成績を修めたと認定した際

に出席しなければならない授業数の半分を免除するというシステムだ。元々は学業、トレーニングの2種類に授業を分けた際に学業の方を免除するというものなのだが君にはこれを利用して貰う。」
「成る程。つまりは私を飛び級させるということが他の人達にバレるのが怖いということですね。」
「直球に言うとそうなる。入学したての娘をいきなり飛び級させるなんて本当はあり得ないからな。」
「分かりました。その程度ならばやり遂げましょう。」
「これからよろしく頼む。」
「こちらこそ。」
握手をし、私は会議室を出た。
……
「あと、2年か……。それまでに会長とレース出来るようにならないと……。」
そうぼやきながら軽い足取りで帰宅するのだった。

……

「……教育委員会になんて言えば……。」
「ウマ娘の飛び級については各学校長に任されてはいますが……いささかぶっ飛びすぎです。」
「……さっきまで賛成してたよな?」
「はい。まぁ、あの娘についてなら委員会に何を言われても返せるのでは?」
「そう捉えることにする。はぁあああ……。」
重いため息をつきながら重い足取りで校長室に戻るのだった。

８話　ピッカピッカの～５年生♪

どうも、トキノメグルです。小６になりました。

あれ、違う？

……いつの間にか、前話の【小６】が、【小５】に書き換えられている……。

前書きの通りです。

誠に申し訳ございません。

気を取り直して、

どうも、トキノメグルです。小５になりました。

また、４年分も小学校編を間接的にすっ飛ばしたんですね……作者が。

本当にごめんなさい。（最近、謝ってばかりだな……作者のせいで。）

それらの件につきまして、罰としてトレーニングの時に足に３０キロの蹄鉄を両足にはめた状態で作者が中腰になっているのを飛び避けるあれをやりました。

……

公園

ドスンッ……ドスンッ……ドスンッ……

軽い足が落ちる度に土にはくっきりと蹄鉄の跡が残ってゆく。

小さい子供がジャージを着せられた中腰になっている男子高校生を避けるようにその上を跳ねていた。

「ひいい……!!何でこんな事になってるんだよ!!?」

「自分の……！胸に……！手を当てて……！考えろ！」
「だからって、ここまでする必要ある!?」
「あるわ！反省しろ！」

その様子を見ている友達、アイネクライトは何をやっているのか分からないままその既視感が何故かある光景を見ていた。
そして、少し経ち、その後ろからあるキッチンカーが止まった。

「あ、ドーナツ屋さんだ！」
「え？」
「ひぃ!?」

グギャッ（捻りながら）

「ギャアアアーーー!!!」

……

「ひいい……もう、絶対に……絶対に！落ちるなよ!?」
「ッー!!あー!!キツイ！流石に足だけ３０の１００回はキツイ!!身体が小さいから物凄くキツイ!!……だけど、行くよ!!」
「行ける！だから、落ちるな!!」
「みんな～！ドーナツ食べる～？」（ドーナツが大量に入った袋と一緒に）
「えｗｗ？」
「ひぃ!?」

グギャッ（メグル屋一同、心を込めて。）

「ギャアアアーーー!!!」

その後、（楽しそうだなぁ……。）と、思ったクライトにも重り無しで同じ事をさせて、（痛くないよ～。優しいなぁ……。）と、作者は思うのでした。（痛感神経が麻痺した。）

「普通の人間なら死ぬので絶対に真似しないでね！小５のお姉ちゃんとの約束だよ！それでは本編再開です！」

……

昨日、帰ってそれらの事を両親に言ったら、軽く笑われました。（因みに両親には既に電話で話が通っており、「ぜひ懇談会を開きたいのですが……」とか、教頭が言ったら「あ、そういうのは要らないんで。娘に任せてやってください。」……だって。無責任だねぇｗｗ……え？元凶は私？）

さてと、今日から授業が始まるよ！やったね！

５年生の教科書はまだ無い（学校側が急いで発注してるようで。）ので、筆箱と１年生の教科書類と多めのノートと２０キロのダンベルを２個、ランドセルに入れ、【１年生】と書かれた体操服の入った袋と【５年生】と書かれた体操服の入った袋各々に１０キロ相当の砂鉄袋を入れて、横のフックに１つずつかけて、両手足首に１０キロの重りを巻き付けて……♪

「行ってきま～す！」

「気を付けろよ～！」

「行ってらっしゃい！」

……

学校　１年生の教室

「メグルさん？その手足に巻き付いているものとランドセルの中と体操服袋の中に入っているものは何ですか……？」

「重り。」
担任が大きくため息をついた。

……
間違えた。授業はまだ。今日じゃなかった。
１年生　１～２時限目　総合
６年生のお兄ちゃん、お姉ちゃん……ではなく、私達には【ウマ娘のお姉ちゃん達】と一緒に校内の見学をしたり、校外に行って地域の観察をしたあとは、かけっこをしたりして交流した。
なんやかんや言って楽しかった。

１年生　３～４時限目　体育
体力測定でした。
以降、参考記録と私の言い訳も添えて。
無差別級２分間持久走
１年生平均　約８００ｍ
５年生平均　約１２００ｍ
５特進平均　約１４００ｍ
私　約１６００ｍ
だって長距離走るペースで走ってたもん。
５分後
ソフトボール投げ
１年生平均　２４ｍ
５年生平均　４０ｍ
５特進平均　４８ｍ
私　５７ｍ
手が滑った。
長座体前屈
１年生平均　２９ｃｍ
５年生平均　３７ｃｍ
５特進平均　４０ｃｍ

私　３２ｃｍ
私、身体のサイズ、１年生。Ｎｏｔ５年生。Ｎｏｔはちみ～。
バーベル上げ
１年生平均　未計測
５年生平均　５１ｋｇ
５特進平均　６５ｋｇ
私　１００ｋｇ
重りが足らねぇ……。

後省略。

……

１年生　教室

「何でそんなに強いの？」
「知らないよ。」
今はそう答える他なかった。
……

午後

軽く昼食を食堂でとり、午後の５年生のクラスに行った。
１年生は暫くの間は４時間だからである。
既に５年生特進の担任の先生からは授業が始まってから１、２分後に教室の扉の前で待っていて欲しいと言われており、その通りにした。
少し扉が開けられているので中から担任の声がする。
「よし、そろそろ来たかな……。あ、いた。入ってくれ。」
そう言われ、教室の扉を開け、先生の隣に立つ。
「この子が今日からこの学校のウマ娘科５年生特進クラスの仲間入りする転入生だ。自己紹介をして貰って良いかな？」
完璧に設定通りにしろって事だったな。
「初めまして。今日からこのクラスで一緒に勉強させて貰うトキノメグルです。どうぞよろしく御願いします。」

……流石、超少数精鋭ってとこか。人数が極端に少ない。私を合わせて5人になった。
そして、こちらを見つめる目はまるで品定めをするような目だった。
1人が急に口を開いた。
「先生、何でこんなちっこいのがこのクラスに入るんすか？ここは特進っすよ？お遊びのへちゃらけクラスじゃないんすよ？」
「グロー。この娘は5年生からある特進相当の能力を持っていると学校に判断されてここにいるんだ。そんな口のききかたをするな。」
「トキノメグル……？……あぁ、ミドリ先輩が言っていた娘か。妹がいる。凄いんだ！って妹自慢しまくる先輩の太鼓判かぁ。」
ギクッ！
マズイ。姉さんは自分の後輩にも私の事を言いふらしていたのかよ！年齢を言ったのか？それだけは勘弁して……！
「……まさか2つ下だったなんてなぁ。でも何で転入なんだ？姉がここにいたなら、アンタもここの学校に通っていたんじゃないか？」
ギクッ！
焦りすぎて校長、こういう返し忘れてたでしょ……。
「それについては俺から話そう。このトキノメグルは元々は酷い自閉症でな。この学校に来る前までは通信学校での授業と家庭教師を呼んでいたみたいなんだ。……だが、今年この娘の姉であるミドリと従姉が中央に入学したことによって自分もと一念発起し、やっと克服したんだそうだ。そして、この学校の編入試験を受けて合格し、この特進に入学したって事だ。」
そんな設定初めて聞いたんですけど!?てか、かなりアバウト!?……でも、合わせないと……。
「そ、そうなんです。……まだ、他人と話すのが慣れていませんが、2年間よろしく御願いします……。」
「……。」
さっきまで担任と話していたウマ娘が止まった。
そして、

「あたし、リアフルス。2年間だが、気張ろうな。」
「……！はい。」
こうして、一応認められた私だった。

……
「さっきは貶すような事を言って悪かったな。俺はバルトグロー。……よろしく。」
「私はレイショット。2年間よろしくお願いしますね。」
「僕はロードジャスト。共にライバルになろうか！」
「……皆さんよろしくお願いします。」
……

その後、5時限目は有耶無耶になり、お互いのレースの得意分野などの公開などを行った……が、私にはそんなものは無い。どれでもいけるからだ。
まとめると、
リア　追込　マイル、中距離、長距離　、芝
グロー　差し　短距離、マイル、　芝
レイ　先行　マイル、中距離、　芝
ロード　逃げ　マイル、中距離　、芝
という感じらしい（本人談）

……
6時限目　体育
何か私の特進クラス転入を祝ってレースを開くらしい。
恥ずかしいし、何でそんなに速く用意できるんだろう……。
……まぁ、良いだろう。せいぜい才能なんて無い私の姿を目に焼き付けると良い。
「そうだ、メグル。特進の奴らは普通の娘よりも気性難やら性格難な奴らが多いからな。」
ゴルシがテンプレ……っと。

……

【ＥＸ　東京　芝　トキノメグル転入記念杯　１８００ｍ　曇　稍重
右】
（実況　５学年ウマ娘科特進クラス担任）
（解説　教頭）
（スターター　校長）
（ゲート　５学年学年主任）
（判定　１年生ウマ娘科担任）
パドック
「おい！離せ！邪魔だ！」
「はいはい。はよ入って。」
「お、この絵面、シャメチャンス……！」
「早くゲートに、入って入って。」
「全集中……。ウマ娘の呼吸……。」
「１着の型（勝利ポーズ）はレース後でやりなさい。前じゃダメ。」
「ああ、皆！僕を讃えるために来てくれたんだね……。」
「ただの勉強です。はよ入れ。」
「……。」（皆さん、個性強すぎやしません？）
「あと、１人はっと……どこだ？あ、自分で入ってた。」

三番人気は３番レイショット。
集中しすぎていますね。
集中しすぎて出遅れないか心配です。
二番人気はこの娘、２番ロードジャスト。
ゲートの前にあったレッドカーペットは撤去されました。
５年生特進クラス長、逃げで本領を見せてくるか。
一番人気はルーキー、１番トキノメグル。
ルーキーですが、実力はあるそうです。
（（いや、なんでルーキーが一番人気なんだ!?））

ごめん、ルーキーだけは譲れないんだわ。
各ウマ娘ゲートに入って態勢整いました。
……
スタート！
レイショット、集中力を発動しても出遅れた！
先頭は2番ロードジャスト
後ろにトキノメグル
1バ身差レイショット
更に5番バルトグロー
2バ身差リアフルス
今回はトキノメグルは先行みたいですね。
バルトグロー、けん制を使って前2人を焦らせる！
（俺のけん制をくらったが最後、バテてお仕舞いよ！）
（つく！グローのスキルか……。最初からキツイなぁ……。）
（何か身体が赤い？……あ、これデバフのモーションじゃん。特に影響無いけど。）
トキノメグル以外は固有スキル以外にも通常のスキルを1つ持っています。それがトキノメグルを落とす武器になるでしょうか？
依然先頭はロードジャスト
続いてトキノメグル
1バ身差レイショット
直ぐ後ろバルトグロー
1バ身後ろリアフルス
レイショット掛かっています。
冷静さを取り戻せると良いのですが。
トキノメグル、ペースが速い！

スタミナを切らさないか心配です。
（この程度なら全然余裕なんだよな……。）
（焦っているな！やはり俺のけん制は強い！）
（ちょっ！ペースが速くないか君！）
残り１０００ｍを通過
先頭はロードジャスト
外にトキノメグル
２バ身差バルトグロー
後ろレイショット
直ぐ後ろリアフルス

ロードジャスト、ペースが上がった！
これは固有スキル【ｒｏａｄ　ｏｆ　ｌｏｒｄ】です！
レース中盤に抜かされそうになると発動する逃げにもってこいのスキルですね！
さあ、最終コーナーに差し掛かります。
リアフルス、コーナー巧者を使い、スピードを上げる！
（おっし、あげてこー！）
ロードジャスト、更に逃げコーナーを使い、スピードを上げた！
（ふふ。転入生の君には負けられないよ！）
さぁ、最終直線に入ってきます。最初に出てくるのはロードジャスト！
（……そろそろ、本気で行くか……！）
……
私を……無礼（なめ）るなよ
【オールターフ　Ｌｖ．１】
……

おっと、トキノメグル！凄い勢いで加速する！
これは！固有スキル【オールターフ】！
レース場が芝で且つ４種の作戦に誰かしらがいると最終直線に入った瞬間に加速するスキルです！
それ、強すぎません？主人公補正って奴？
トキノメグル、外から飛んで来る！ロードジャストまであと少し！
４００ｍを通過！
（首級貰うぞ。）
（ッ！……させない！）
ロードジャストも懸命に粘る！しかし、トキノメグルの猛追は続く！後ろからリアフルスも上がってくる！
２００を通過！
ロードジャスト！トキノメグル！どちらが先にゴール板を駆け抜けるのか!?

……

勝ったのは、トキノメグル！一着でゴールイン！圧巻する最後の走りでレースを制した！
二着、ロードジャスト！
三着はリアフルス！

……

東　１　Ｒ　京　１８００　ｍ　確　定
Ⅰ　１　／／／　／／／　１　Ⅱ　２　／／／　／／／
／　２　Ⅲ　４　／／／　／／／　１　１／４　Ⅳ　５

／／／　／／／　１　Ｖ　３　／／／

／芝／　稍重　ダート　稍重

タイム　１：５１．２　レコード

……

「完敗だよ。メグル。君の走りは偽物なんかじゃない。僕との戦いでそれを示してくれた。」

「そうか……。ありがとう、楽しかった。」

「また今度、対戦しよう。その時は僕が勝利を掴む。」

「……。ああ、でも私が勝つよ。次も。」

握手をし、お互いに笑い、称えあった。

メグルにとって今日が初めて、本物のレースというものを体験し、心底楽しかった日になったのだった。

9話　じゅぎよー前のメグルちゃんからのお願い

はい！どうも、アイネクライトだよ！
私は2日前に小学校に入学したばかりのピカピカの1年生！
今日は、同じクラスのお友だちのトキノメグルちゃんから、学校のじゅぎよーってのが始まる前にしてほしいことがあるって頼まれたの！
まずはこれを読んでって言われたから……。（ごそごそ）
えっと……？
『かんたんなじこしょうかいとすきなものをカメラのまえでしょうかいしてね。』
だって！
……良いけどなんで？メグルちゃん……？
「私がカメラを持ってるから、そのカメラに向かって1人ずつ簡単な自己紹介をしてって欲しい……って誰か（作者）が言ってました。」

……
罰ゲームの後
病院　診察室
医者に背中を見せつつ、レントゲン写真と一緒に診察してもらっている男とその様子を見ているメグルがいた。
（作者＝シラネ）
「シラネさん。」
「なんでしょう？」
「……折れています。」
「え？」
「えｗｗ？」
「骨折です。完治は2ヶ月後になるでしょう。」
「えぇ!?（迫真）」
「フフン……えええええ!?」
「入院してください。」

「ニュッ，ｙｏｕ　ｗｉｎ!?　ヤァダ！ヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダ」
「本当に折れてるんですか？」
「ヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダ」
「折れてます。とりあえず、痛み止めを打っておきましょう。」
「え？（ピタッ）」

グシャリ（背中に）

「ギャアアーーー!!!」

病院内に聞きたくもない男の悲鳴が木霊するのだった。

見せられるこっちの身にもなれっての。あれはテイオーがやるから良いものであって。

……

小学校　教室

「という訳でバカ（作者）が罰ゲームの影響で今寝てるので、みんなには自己紹介をしてもらいたいと思っています。どうやら、作者にとって前々話の自己紹介はただの挨拶だったそうで。そういうことなので……私に３分だけ時間をもらえますか？」

「「「……。」」」

事件の真相解説とかはしないよ。

……

【ＥＸ　東京　タイル　自己紹介ステークス　３分？　晴　良　】
（進行　アイネクライト）

（撮影　トキノメグル、フーラルレッド）
1番　アイネクライト
2番　エミリアレッド
3番　フーラルレッド
4番　アイリスフェザー
5番　ビクトリング
6番　トキノメグル

……
1番　アイネクライト
「はい！あらためまして、こんにちは！アイネクライトです！好きな事はやっぱり走ること！たくさんのお友だちと一緒に走って競走することが1番好きなんだ！でも走ると靴をよく壊すから、お母さんに新しいのを買ってって言うと嬉し泣きするの！」
「それ、多分だけど、壊されたのが悲しくて泣いていたんだと思う……。だって、買ってからたった数日でクライトが履き潰すから。」
お母さん、丈夫なレース用シューズをお買い求めください。私なんて普通のシューズで走ったら1日で壊しかねん。
「あとは、好きなのは食べることかな？特にニンジンが刺さっているハンバーグは大好き！」
あれって誰が発案したんだろ……。斬新すぎるわ。

2番　エミリアレッド
「エミリアレッドです。レッドの家の者としてその名に恥じない成果をお見せする事を今からお約束しておきますわ。」
「自信満々だね！」
「当たり前ですわ。私はレッド家のウマ娘として中央トレセン学園に入らなければならないといけませんの。その為にはまず、この小学校の5年次から配属が決められる特進クラスに入らなければなりませんの！」
「へぇ！5年生からはもっといっぱい走れるようになるってこと？」

「簡潔に言えばそうなります。……それと、好きな食べ物はニンジンを使った料理とパック納豆ですわ。」
しょ……庶民的お嬢様……。

※今作において登場するレッド家はかなり裕福な家だとお思い下さい。

3番　フーラルレッド
「じゃあ、次、フラン！」
「ひゃい！……フーラルレッド……です……。えと、エミリアお姉様の双子の妹です……。」
「フラン。毎回言ってるけど、お姉様とか要らないのよ？双子だし。お姉ちゃんなら付けても構わないけど！」
「お姉様の方がしっくり来るの……。えと、何から話せば良いかな……？」
「そうだね……好きな食べ物とか、好きな事とか、自分の言いたい事を話して欲しいな～。」
「好きな事……。あ……。最近テレビで流れているアニメが……好きです……。」
「最近のアニメ？あ、もしかして、『ウマレンジャーV（ファイブ）』かな!?」
「！それ！……あれを毎週日曜日に見るの……楽しみなんだ……。」
「面白いよね～あのアニメ。特に『グリーン』がツッコミ？だったかな！するのが毎回面白いよね！」
……あれ？グリーンで思い出したけど。母さん、今は女優やってるって言ってたけど、何の作品に出てるっけ……。

4番　アイリスフェザー
「次は私かな。私はアイリスフェザー。クライトとは家が近い幼なじみ。好きな事は走る以外には特にないかな。食べ物も特にはって感じだ。」
「アイリスちゃんは何かしたいこととかある？」

「私も出来れば中央に行って速い娘と対戦したいと思っているよ。その為には今この場にいる全員よりも速く、賢い程じゃないといけないんだが……1人既にバケモノがいるみたいだからな。ぼちぼち頑張っていきたいと思ってるよ。それじゃ次にいってくれ。」

誰だそのバケモノと呼ばれる恐ろしき奴は。

5番　ビクトリング

「ビクトリングだ。好きな事は食べることと勝負事だ。

走るのは当たり前だが、アタシは勝負全般好きなのでね。是非とも色々な奴らと色々やってみたいと思ってる。特にメグル！」

「どしたん？」

「体力測定ではアタシ……いや、私達全員が負けてしまったが、アタシは必ずアンタを負かしてみせる！それまでその足、洗って待ってろよ？」

「足？首じゃないの？」

「……。」

「「……。」」

しーん。

6番　トキノメグル

よし、このカメラを預けるから録ってね。

「うん……こう？」

違うよ、反対。それじゃあ君が自撮りしてるだけだよ？

「ご、ごめんなさい！」

大丈夫だから、落ち着いて。

「……よし。はい、どうもトキノメグルです。今まで何人かのクラスメートに簡単な自己紹介してもらいましたがどうでしたか？今後、より詳しい自己紹介を聞いてまわりますが、まだ待ってくださいね。あと、私の自己紹介は要らないですよね？あ、要るの。さいですか。そのうち私も詳しいのを言いますよ。

あと、腰を骨折したバカは診断によると2ヶ月って言われてましたが、この自己紹介が終わる頃には復活してるので気にしなくて結構ですよ。私も2回も心を込めてたから全く反省してないし。大体、アイツが悪いんだから。

まあ、私もこのレース……じゃなかった映像に出走してるんだから何か紹介しないといけないよね。

取り敢えず好きな事、趣味はトレーニング。レースも楽しいけどトレーニングだね。筋トレ脳トレ大事。好きな食べ物とかは何でも食うから特にって言いたいところ。だが……何故かニンジンが〝以前〟よりも甘くて美味しいんだよね。なんでやろ？

……と、まぁ私の言いたかった事はそんなところかな。」

「何かよく分からない事を言ってたけど、ニンジンは美味しいよね!!

それじゃあ今回のインタビューは終わりだよ～！じゃあね～！」

１０話　１年生　最初の授業

天の声もどきが頼んだ事をやり終えた後、チャイムが鳴り、入学してから2日目にして私達の最初の授業が行われた。

……

１時限目　ウマ娘科１年生教室　普通総合

キーンコーンカーンコーン♪

「はい、さっきの音がチャイムです。あの音は皆さんが先生と一緒に勉強したり、運動したりする授業という時間と、授業が終わった後にある休憩時間、授業が始まる前の準備をする為の時間の３つの時間の始まりと終わりを皆さんに教える為の音です。小学生からはこのチャイムという音を大事にして、今がどんな時間なのかというものを考えて行動するようにしましょう。

それでは、授業を始めましょう。まだ学級委員を決めていないので私が挨拶をするので皆は私と同じような動きをしてくださいね。

では最初は、椅子に座りながら『気をつけ』をしてください。」

担任の先生が１年生の皆に自分と同じ行動をさせ、学校の授業を受ける上で大事となる学校の挨拶を覚えさせていく。

「『気をつけ』をした後は、私が『礼！』と、言います。言われた後は、その姿勢を崩さずにゆっくりと先生に向かってお辞儀をします。それではやってみましょう。」

「……そうです。では、お辞儀をした後は大きな声で『お願いします！』と言って下さい。ただ、叫んではいけませんよ？では、やってみましょう。」

「「お願いします！」」

「そうです！大きい声で挨拶できていますよ。では、一連の流れを通してやってみましょう。

……気をつけ！礼！」

（ピシッ）（ペコッ）（スッ）「「お願いします！」」

「よく出来ました！これは授業が始まる時にする挨拶です。授業が終

わる時には『お願いします！』の所が『ありがとうございました！』に変わります。これはこの授業が終わる時にやってみましょう。

それでは授業の始まりの挨拶の練習を終わりにし、この学校のウマ娘科の授業について説明しますので、よく聞いていて下さい。

まず、体育について話します。

体育という教科は皆さんと一緒に運動し、身体を動かす練習をしながら身体の筋肉を成長させ、心と身体を丈夫にし、健康な身体作りを目指す教科です。

ウマ娘科の授業には、ほぼ毎日1時限分は体育があります。ですが、普通は2時限分連続で行います。なので、ウマ娘科に入っている皆さんには毎日体操服を持ってきてもらいます。皆さんのお母さん、お父さんには体操服は2セット以上買ってもらっている筈なので、忘れないように持ってきてください。

次に体育ではない教科について話します。

体育ではない教科の事を『普通教科』と言います。

教科は、国語、算数、理科、社会、英語、保健、道徳、総合です。『普通教科』では、昨日皆さんが学校で受け取った教科書、ドリル、国語辞典、漢字辞典、資料集、ノートなどを使って勉強します。

詳しい事はそれぞれの教科の授業を受ける時に説明します。

最後に『普通教科』とそれ以外の教科でヒト属の子と勉強する時間があります。

この授業を『補助教科』と言います。

教科は、音楽、図工、技術、家庭科、特殊混合授業です。

音楽、図工、情報はそれぞれの専用の教室があり、その教室で勉強することがほとんどです。その場合にヒト属の子と一緒に勉強することになります。

特殊混合授業というのは『普通教科』をヒト属の子と一緒に勉強する時間です。その時は『特殊○○授業』と言い、『普通○○授業』の時に使うこの教室では授業をしません。大きな教室があるのでそこに行って皆で勉強します。

何か分からないことがあったらその度に先生達に質問してくださ

いね。」
「「は～い！」」
担任の先生が一通りの学校での教科について説明し終わったあと、次は学校の設備利用について説明してきた。
「それでは次に学校の設備の利用について詳しく説明します。
昨日皆さんが6年生のお姉さん達と一緒に校内見学をした時に運動場、体育館、屋内プール、トレーニングコース、レースコースがありましたね。それらを皆さんに正しく使って欲しいので今から言うことをよく聞いてください。
運動場は体育を除いてウマ娘科に入っている皆さんを含め、ウマ娘は利用出来ません。理由は放課後はヒト属の子の為の運動場になるからです。ですのでウマ娘科の皆さんは絶対に授業以外で利用しないで下さい。危険です。
体育館、屋内プールは3年生から体育を除いて放課後の時のみ利用可能です。ですので皆さんは3年生から放課後で利用出来ますので1年生と2年生の時は絶対に放課後での利用はやめてください。これも危険だからです。
トレーニングコースとレースコースは1年生から利用出来ます。ヒト属の子は利用できません。
また、外での体育は基本的にトレーニングコースを利用します。
レースコースは事前に利用申請を出し、認可が下りた場合のみ利用出来ます。また、レースコースは学期ごとにあるテストレースの時にも利用します。
これらの事を踏まえた上で正しく利用してください。
次にテストレースについて説明します。
テストレースはウマ娘科の生徒限定の大きなテストで、それらの結果は体育の実技分野において大きな評価に繋がります。ですので、皆さん、テストの時にはいつも以上に本気を出して臨んでください。
分からないことがあったらこれもその都度先生達に質問してください。」
「「は～い。」」

「最後に先生から皆さんに伝えることがあります。

貴女達はウマ娘。走る事が大好きでお友だちと競走することも多くなるでしょう。しかし、その時には必ず【勝ち】と【負け】が付きまといます。テストレースの時もそうです。必ず【勝ち負け】があります。勝った時に喜んだり、負けた時に悔しい思いをするのはとても大事な事ですが、それらに『溺れてはいけません』。これは本当に大事な事です。もし、走るのが辛い、しんどい、怖いと感じるような事があったら直ぐに先生に相談してください。私に話せないことだったら貴女達のお母さん、お父さんやお友だち、私以外の先生達など色々な人に相談してください。必ず誰かには自分の事を打ち明けてください。必ず助けになります。

以上です。」

「「は～い。」」

その後、担任の先生は各々の普通教科の授業について説明し、授業の終わりの挨拶の練習を皆でやった後、1時限目はチャイムの音によって終わったのだった。

……

2時限目から3時限目にかけては国語と算数の授業が行われた。

私は授業内容は全て分かっているので、つまらないものになったのだが、他の娘達には新鮮なようで目を輝かして授業を受けていた。

私も前世の小学生時代の時はあんな感じだったのだろうか。

そのように過去を振り返りながら各々の時間で半年分の漢字ドリルと算数ドリルを終わらせたのだった。

「……速すぎです。メグルさん。」

「てへ。」

……

４時限目　体育　トレーニングコース

ウォーミングアップ終了後

「それでは皆さん、次に私と併走しましょう。では行きましょう。……私だってウマ娘。たまには凝り固まった筋肉をほぐしたいですから。」

「そんなに凝るような仕事をいつもなさっていますの？」

「いつもではないですが……最近やたら元気すぎる生徒がいるので対応が大変なんですよ。」

そして、クラスメートの何人かが走りながら私の方を向いた。

「え、私？」

「メグルさんではないですよ。６年生の特進の娘なんですけど、まぁ我が強い。お陰で私達は彼女の制止で大変なんですよ。まぁ、皆さんには関係のない話ですが。……メグルさんは別の意味で大変ですけど（ボソッ）」

「何か言いましたか？」

「いえいえ、何でもありません。それでは皆さん少しずつペースを上げていきます。しんどいと感じたら遠慮なくコースの外側に行って休んでください。このように徐々にペースをあげていくランニングを何回か行います。」

そう言うと、少し、全体のペースが上がった。

……

数分後

最初のペースよりかは確実にペースが上がったと確認できる所でクラスの大半がリタイアしたので５分間の休憩になった。

「……ふぅ。先生も運動は大事です。……メグルさん。」

「はい。どうかしましたか？」

「どうですか。貴女にとってこの授業の内容は？」

「そうですね。まぁ妥当なラインだとは思いますが私からで言うと物足りないしか言えません。偉そうに言って申し訳ないですが。」

「そうですよね……。貴女がかなりの異端児なのは既に先生達には分かってはいますが、いかんせん1年生の授業ではね……。……！そうだ。このように休憩時間をとった際に無理のない範囲で私と併走、または競走しませんか？」
「良いですよ。何なら今でも。」
「では休憩残り3分、少し〝速め〟の併走といきましょう。」
「了解です。」
「皆さんはまだ休んでいてくださいね！」
「分かりました～！」
「では行きましょう。」
　そう言い、先ほどのペースより遥かに速いペースで走り始めた。
　私もそれを見て少し出遅れたが先生に追いつくために走り始めた。

「……！中々やりますね。出遅れたのにもう追いつくとは。」
「ただの数値じゃないんで、あれは。まだまだいけますよ。」
「今は3分走りきる事を優先しますが、いつかは競走したいものですね。」
「ほとんど今のペースでも超長距離ペースにそこそこ近いハイペースだけど。」
「私も伊達に先生やってるだけのウマ娘じゃあないので。学生時代は地方でしたが長距離専門で走っていましたよ。」
「先生は地方出身なんですか。」
「そうですよ。中央には残念ながら落ちてしまったので。地方では優秀だと自負していましたがやっぱり中央は違った。もっと勉強やってれば良かったなぁ……と、今更ながら後悔していますよ。」
「……筆記で落ちたんですか。」
「当時はめちゃくちゃのバカだったので。レースで好成績を出せずに負けてしまった以上、後は筆記に殆どを託すのですが、これがまた出来なかった訳で。お恥ずかしいです。……なので、メグルさんのような速くて異常な程に賢い娘を見ると凄いなぁって思いますよ。」
「それでも私は中央に入った後が怖いですけどね。」

「ほとんど確定で中央には入れるでしょうけど。お姉さんも合格していたわけですし。ですが、緊張を持つのは良い傾向です。怠けて身体を鈍らせるより遥かに良いですから。……これ以上走るのは止めましょうか。」
「どうしてです？まだ1、2分ですよ？」
「皆が唖然としていますよ。ほら。」
そう言われ、皆が休んでいた所を見ると殆どの娘が口を開けて唖然としていた。

……

4時限目が終了し、終わりの会なるものをやった後、私は殆どの娘から「どうやったらそんなに速くなれるの？」だとか、「先生とあんなに速く走れるなんて凄いよ!!」だとか、昨日も似たような事を聞かれた事をもう一度聞かされているような気分になった。
まぁ、保育園に居た時に聞かされた先生からの〝誉めまくる〟よりかはマシだな。
と、そんな風に思いながらほぼ聞き流していた。

11話　天才（オリジナル）のライバル

さて、普通の小学校1年生なら今の入学したてのこの時期は4時限で終わるのだが、私は1年生でありながら特進5年生。午後の授業は普通にある。

食堂の横にあるパン売り場でバタートーストを1枚だけ購入し、それを食む。

食べ終わった後は直ぐに特進5年生の教室に向かい、1年生の授業道具を隠しながら5年生の授業の為に準備する。

そして、待ってました！のような感じで出迎えられ、何で4時限目までいなかったかを尋ねられると家で授業を受けていたとごまかしたのだった。

そこで、午前に先生から聞いたあの娘の話題が出てきた。

「そういや、私ら最近また、6年のパイセンにケンカ吹っ掛けられるんだよねぇ～。去年からなんだけど。なんか、特進に上がってから調子にのってる？ってか。そのなんか、『私、優秀ですから！』って言って長距離グループの所にわざわざ突っ込んで来て大負けする割には、短距離では絶対に私らは勝てないって感じのよく分からないパイセンが居るのよねぇ～。」

「そう言えば、今日も彼女、レース予約しているみたいだよ。放課後見に行かない？レースは短距離だけど。メグルも行こうよ。」

「見に行くよ。……そんなに長距離はダメなんだね。」

「そうだね。長距離では目も当てられないような結果を叩き出す彼女だけど、短距離ではこの学校で張り合えるような強いウマ娘は聞いた事がないなぁ。ただ、勝てもしないレースでも果敢に挑む精神は称賛に値するよ!!」

「るっせぇよ、学級委員。ケンカ吹っ掛けてくんのは別に良いが、極端すぎなんだよ、マジで。……なんで奴が【学級委員長】になったのか知らねぇけどよ。」

……なんか、確定したな。
『私、優秀ですから！』だとか、【学級委員長】とか、そんな事だけで私は理解(わか)った。

先生達を困らせ、いつの間にか長距離勢とレース(ケンカ)をし、大負けするのだが、短距離だけは絶対に勝ちを譲らなかった天才(オリジナル)スプリンター

そう、
彼女の名は……

【さくら、すすめ！】
サクラバクシンオー

ゲームをやった事がある人は勿論のこと、そうでない人もその名を知っている人は少なくないであろう。
知らない人は演歌歌手　北島三郎が所有している、これも天才(オリジナル)のキタサンブラックの祖父に当たる馬なので是非とも調べてみて欲しい。
とにかく速い。生粋のスプリンターで、短距離だけで見るとその活躍していた当時では最強とも呼ばれていた程の名馬中の名馬。しかし、マイル（１４００ｍ～１５９９ｍの短距離も含む）以上のレースでは１勝も出来なかったという。
因みにキタサンブラックは長距離を普通に走り、なんならサクラバクシンオーの系統はほとんどが長距離を走れる筈だったと思うのだが、何故かサクラバクシンオーは短距離限定だった。

というか、バクシンオー、この学校に居たんだ……。私は入学してからまだたったの３日だってのにお早い登場だなぁ。

【学級委員長】、【委員長】コールはこの学校での5、6年生での肩書きだったかぁ……。

……

5、6時間目は昨日と同じく体育。

レースは行わなかったが、ランニングトレーニングの時に全員で模擬レースっぽいものはやった。勝ったのは私だったが。

……

放課後　レースコース

レースコースに行くと、何やら騒がしい雰囲気だった。

見ると、体操服を来た鹿毛の娘が何やら監督官の先生に文句を言っているようだった。

「どうして人数が2人減ってレースが開催できないと言うのでしょうか!?」

「最低でも9人は必要なんだ。2人減って7人になっている以上、教育の観点からレースを継続してもあまり意味が無いと判断しているんだが……。」

「ですが、レース自体は少人数でも出来ます！走りたいんです！勝ちたいんです！」

「しかし、あくまでこのレースコースの独自使用目的はレース研究をさせるためのものであって自分の勝利欲望を充たす為のものでは本来は無いんだ……頼む。分かってくれ。」

「嫌です！絶対にレースを開催してください!!」

「困ったなぁ……。どうしたものか……。」

そんな感じで揉めていた。

「成る程、レースのメンバーが足らないのですね？」

「ん？君は……？」

「僕はロードジャスト。特進5年生の学級委員です。」
ロードが鹿毛の娘と監督官のもとでいつの間にか話し合っていた。

……

「……では、僕のクラスから2名メンバーを選出しますので是非、レースを開催してください。」
「しかし、相手はサクラバクシンオーだぞ？敵になろうとする物好きがそんな多くは……。」
「強い敵こそ燃えるってものですよ。参加をキャンセルした2名はさぞかし次の戦（レース）の為に準備しているのでしょう。」
「……。」
「では、紹介しましょう。僕の盟友達、バルトグロー、トキノメグル！」
「おい、何で勝手に参加することになってんだよ!?……ああ、クソッ！まぁ、やったるけどよ!?」
「同感です。……しかし、強い先輩と戦えるなら嬉しいですね。」
そんな私達2人の言葉に反応したのか、バクシンオーが急にこっちに向かって走ってきて真ん前に立った。
「ありがとうございます!!貴女達が私達に挑んでくれること……学級委員長として……記憶しました!!私は、サクラバクシンオー！バクシンする気持ちでよろしくお願いしますね!!バルトロードさん！ジャストメグルさん！」
グロー&メグル「名前が混ざってる!!」

……

【EX】【東京　芝　模擬レース　1200m　晴　良　左】
※東京レース場（東京競馬場）には本来1200mのレースはありません。東京と表記されているのはあくまでこの小学校やトレセン学園が東京にあるためですので、東京レース場でのレースではございません。しかし、今作品の地名に基づいて、ある程度はレース場の状

態を設定しております。（今回のレースは最終直線が２００ｍ分短くなった東京競馬場１４００ｍとお考えください。）今更感が強い謝罪になりますが、この場をお借りして訂正、謝罪させていただきます。

（実況　６年特進担任）
（解説　５年特進担任）
（ゲート　５年学年主任）
（スターター　４年ウマ娘科担任）
（判定　１年ウマ娘科担任）

出走者
１番　アルファラス　逃げ
２番　バルトグロー　差し
３番　モモクリサン　追込
４番　クイックフォース　逃げ
５番　ゴーソルジャー　先行
６番　サクラバクシンオー　先行
７番　セブンティセブン　差し
８番　ウルトラエイティ　先行
９番　トキノメグル　追込

さあ、サクラバクシンオーがまたまた強引に開催させたこのレース。ターフは絶好の良バ場となりました。
今回のレースの出走者は６番のみが６年生特進、２番と９番が５年生特進、それ以外は６年生進学での出走となっています。
一番人気から三番人気までをご紹介いたします。
一番人気は開催者で、この小学校のスプリント王者６番サクラバクシンオー
「私、頑張りますよ!!応援してくださいね!!」
先行での出走だそうです。
彼女の力強い走りに期待されています。

二番人気は４番クイックフォース
この娘もかなり強い。スピードがとても速い娘なので逃げとして持続させれば一着は狙えます。
ただ、スタミナがかなり低いようですが大丈夫か。
三番人気、９番トキノメグル
「……バクシンオー。勝てるかは分からないが全力は出そう。」
戦法自在、今回は追込の作戦だそうです。
はたして５年生のルーキーはどこまでその力を見せてくるのか。

各ウマ娘、出走の用意が整いました。

……

スタート！

各ウマ娘、そろって綺麗なスタートを切りました！
アルファラス、クイックフォース、激しい先頭争いを繰り広げる！
（それじゃ、お手並み拝見！ダブルけん制！）
バルトグロー、けん制で逃げの２人を焦らせる！
更に先行３人も焦らせる！
（（（グッ!?キ、キツい……。））））
（ちょわ!?少ししんどくなりましたね……。）
（ナイス、グロー。）
クイックフォース！ペースが速い！先頭に躍り出るも掛かっているぞ！
短距離とはいえ、スタミナが無くなると走れませんからね。耐えて欲しい所です。
順位を紹介します。
先頭、クイックフォース
１バ身後ろ、アルファラス
３番手、サクラバクシンオー

少し後ろ外に、ゴーソルジャー
直ぐ後ろ、ウルトラエイティ
1バ身後ろ、バルトグロー
外から、セブンティセブン
ウチ、モモクリサン
最後尾、トキノメグル。
先頭から最後尾までおよそ7バ身。
アルファラス！焦っているぞ！
スタミナを切らしてしまわないか心配です。
ゴーソルジャー、最初からペースが速いバクシンオーに付いていこうと必死な様子です。
セブンティセブン、調子が悪い!!
全員のペースがかなり速い状態でレースが展開していきます。
残り８００ｍ
３コーナーから４コーナーへと進出してくるウマ娘達。
トキノメグル、上がってきます。
モモクリサン、それにつられて上がってくる！
セブンティセブン、落ち着かない。
バルトグロー、徐々に進出してくる！
サクラバクシンオー、更にペースを速めた！
一気にレースの様子が変わっていきます。
依然先頭は、クイックフォース
外から、サクラバクシンオー
直ぐ後ろ、アルファラス
1バ身差、ゴーソルジャー
外から、バルトグロー
ウチ、ウルトラエイティ
外に、モモクリサン
更に外、トキノメグル
ウチ、セブンティセブン、現在殿だ！
残り６００ｍを通過！

コーナーが終わり、最終直線に入っていきます！
（皆さんの熱い走り……熱い心……私は一緒に走る者として、胸が高鳴ります!!ならば！あれをやる他ないですね!!）
……
『ハッハッハッ！』
【学級委員長＋速さ＝バクシン　Ｌｖ．２】
……
おっと！サクラバクシンオー！
急激にペースを上げた！一気に先頭へと向かう！
彼女の固有スキルのようですね。
今回のレースの直線は短いぞ！果たして後ろの娘達は間に合うのか!?
更にサクラバクシンオー、直線巧者、先行直線を使って一気に加速する！
クイックフォース、追い越された！
（！……負けてられっかよ!!）
……
『私を……！無礼（なめ）るなよ!!!』
【オールターフ　Ｌｖ．１】
……
トキノメグル！固有スキルを発動して先頭を走るサクラバクシンオーを追いかける！
「抜かす!!!」
（へぇ？前回は負けたけど、そうもいかないぜ？メグル？）

……

『抜かれたら抜かし返す……倍返しだ!!!』

【Ｔｒｙ　ａｇａｉｎ　ａｎｄ　ｄｅｆｅａｔ　Ｌｖ．１】

……

バルトグローも抜かされた影響で抜かし返すという反骨精神、反撃精神でトキノメグルを猛追する!!

残り２００!!

「ウォーーーー!!!!」

「ちょわ!?……負けませんよ!!!」

サクラバクシンオー!!懸命に粘る!!しかし、トキノメグルとバルトグローが飛んで来て更に差を縮める!!

「負けない（ぜ）!!!」

「負けませんよ!!!」

サクラバクシンオー、まだ耐える!トキノメグル、あと少し!バルトグローももう少し!少しずつ詰まっていく!!

果たして誰が最初にゴール板を駆け抜けるのか!!!?

……

勝ったのは、

サクラバクシンオー!トキノメグルとバルトグローの猛追から見事逃げきり、ゴール板を駆け抜けた!

この学校のスプリントの王者は揺るがない、負けなかった!!だが、２人もよく頑張った!!

二着、トキノメグル!!

三着は、バルトグロー!!

おっと！タイムは現在壊れて表示されていませんが、サクラバクシンオー、レコードです！この学校内の且つ自分の短距離レースレコードを０．２秒更新しました！

……

……

……

東１　：Ｒ：　京　１２００　：ｍ：　確　定

Ⅰ　６　／／／／　／　／／／　ハナ　Ⅱ　９　／／／／　／

／／　１／２　Ⅲ　２　／／／／　／　／／　３　１／４　Ⅳ

３　／／／／　／　／／　１／２　Ⅴ　４　／／／／

・／芝／　：良：　・ダート　：良：

・タイム　１：０１．２　レコード

地方名確認、ラウンド確認、距離確認、ドット２つ良・重ドット２つ確認、ドット１つ稍重・不良ドット１つ確認、タイム確認、オリジナルタイムのｔｒａｎｓｐａｒｅｎｔ確認、レコード確認

……

「はぁ……はぁ……はぁ……勝ちました……私、勝ちました!!!」

「はぁ……はぁ……！クソッ！あと、少しだったってのに！もう少し速く、詰めれば良かった!!」

バクシンオーの勝利の笑顔、グローの敗北の悔し顔、メグルはというとそれらとはまた別の顔をしていた。

はぁ……めっちゃ楽しかった。ゲーム内のキャラと同じ環境下で対戦できるなんて……マジで楽しかった。てか、バクシンオー速い……。なんで短距離だけこんなにも速いんだ……。私だって凄く小さい時から訓練してたってのに……というよりも、これが初めて負けた感覚か……。確かに溺れるなって言われただけある。私はレースが出来て嬉しかったという思いがあるから良いが、そういうものがないウマ娘は敗北感やら喪失感に心を蝕まれるかもな……。【目覚まし時計】の恩恵がどれ程のものだったか、身に染みて分かる。

メグルは初めて敗北したことによって生じた自分の思いに対して恐怖しており、それが少し顔にまで出ていたのだった。

……

レース終了後、観客席ではその結果によってざわめいていた。

観客席

「……凄。バクシン先輩にあそこまで迫れるウマ娘が居るなんて。」

「二着と三着はどっちも5年特進らしいよ。でも、あの背が異常に小さい先輩は知らなかったなぁ。」

「なんか、噂によると転入生だって。あと、〝あの〟ミドリ先輩の妹さんだって。」

「え？あの〝逃げ〟もどきのミドリ先輩？」

「それ。先行が強すぎてほとんどの逃げのウマ娘達が恐怖して走れなくなる程に怯えさせた伝説の先輩。」

「ミドリ先輩とバクシン先輩のレースもっと見たかったなぁ。私、怪

我してたからほとんど見れなかったもん。」
「どっちも拮抗してたよ。少しバクシン先輩の方が勝率が高かったかな。でもほとんどのレースでバ身差は『ハナ』が多かったけど。あの2人のせいで逃げの作戦の娘が減ったのも有名だね。」
「絶対に勝てないからってわざわざ苦手な作戦に踏み切る娘もいたね。大半はダメだったけど。」
「今回は勉強になったなぁ。来年、特進に入るためにもあの人達みたいに頑張ろ。」

……

「メグル、惜しかったなぁ。」
「いやいや、レコード出してるバクシンパイセンにメグルがハナ差なのがおかしくて笑いそ。」
「この学校の短距離レースのレコードは自分で塗ったバクシンオー先輩が自分で塗り替えるのが去年からの伝統だからね。
しかし、メグルもだがグローも素晴らしい戦いを繰り広げてくれた！盟友達よ！その頑張り、称賛に値する!!」
「うるさｗｗまぁ、2人とも凄かったけど。」
「それじゃ、2人を迎えに行こうかな。来るでしょ？2人とも。」
「行くとも！盟友達に感謝を述べないと気が済まないからね!!」
「ハイハイ。ほいじゃ、レッツゴー！」

レースを見ていた5年特進のクラスメートは今回の主役を立てた名脇役達を迎えに行くのだった。

……

3人がメグルとグローを迎えに行くとそこには、
バクシンオーが、物凄い勢いで興奮しながらメグルとグローに迫っていた。

「私、感動しました！」
「は、はぁ……。」
「トキノミドリ先輩以外にもこんなに速い人がいるとは！私、あの先輩とレースをするのがホントに好きで楽しかったんです!!ですが、ミドリ先輩は今年からは中学生……。もう、この小学校にはミドリ先輩みたいな方は現れないと思っていました。私の学年では短距離で強い方はいませんから……。しかし！貴女方が今日！私とレースをし、その強さを私に見せてくれました!!本当に楽しかった!!また、ミドリ先輩みたいな方々とレースが出来ると思うと、私、感動して……！ありがとうございます!!トキノグローさん！バルトメグルさん！」
「そ、それは……良かったです……って、また名前が混ざっている!!」

……
「ヤッバｗｗグローが普通の敬語ってｗｗ……吹き出しそｗｗ」
「初めて見たかも、グローの困り顔。」
「僕の名前がどっちの２人にも入っていること……光栄だね！」
「反応する所そこじゃないでしょｗｗ……おっかし……ｗｗ」
……
「埒があかねぇ。……先輩、俺はバルトグロー。短距離は得意だから、また勝負しようぜ。次は絶対負かすがな!!」
「分かりました！グローさん！次のレースもまたよろしくお願いしますね!!」
「次、メグル。」
「あ、うん……。私はトキノメグル。その、ミドリ先輩……トキノミドリの妹です。短距離なら出れるので、また是非誘って下さい。」
「やや!?ミドリ先輩の妹さんでしたか！それは確かに強いわけですね!!メグルさん！今日はありがとうございました！次のレースも楽しみにしています!!」

その後、私とグローはバクシンオーと握手し、お互いの健闘を称え

てレースの幕を下ろした。

「それでは、私は帰ります！バクシン！バクシーン!!!」

レースが終わってそこまで経っていないが、バクシンオーは着替えてから直ぐに帰宅した……と、思ったら何回か止まって休んで、駆け出す……を繰り返していた。

「歩けよ。」

「それな。」

……

これが、私とグロー、バクシンオーとの短距離戦において長きに渡るライバル関係の始まりとなったのだった。

１２話　ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０１

はい、どうもトキノメグルです。
昨日はバクシンオーとグローとレースが出来て本当に楽しかったです。
今回は私、私の家族、クラスメート、先輩、作者について今、分かる範囲内で名鑑風に話していきます。（何回自己紹介すんねん。……今後もこういう紹介を何回かします。）
まずは、私、現在のトキノメグルから。

……

トキノメグル　★
自己紹介『トキノメグル、今作の主人公、推しは全員だが中でもオグリ、以上』
誕生日『１月１４日』
年齢『６歳』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
好きなこと『トレーニング』
嫌いなこと『作者』
得意なこと『トレーニング』
苦手なこと『シラネ』
耳のこと『前世と比較するとめちゃくちゃ聞こえるので未だに慣れない』
尻尾のこと『痒くなりやすいので手入れは欠かしたくない（だけど、めんどくさい）』
身長『１１８ｃｍ』
体重『前世と比較できるかこれ？』
足のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』
固有【オールターフ　Ｌｖ．１】『レース場が芝で且つ４種それぞれの作戦で１人でも誰かが走っていると、最終直線から少し加速する。』

……

トキノミドリ　★★

自己紹介『私、トキノミドリ！強くて速いウマ娘になるために……！頑張るよ！』

メグルとの続柄『姉』

誕生日『５月４日』

学年『中央トレセン学園中等部１年生』

毛色『鹿毛（茶色）』

好きなこと『メグルやレインと一緒に走ること』

嫌いなこと『勉強（だけど、頑張る！）』

得意なこと『時間把握』

苦手なこと『空間把握（方向音痴）』

耳のこと『最近、緑色のカバーを着けてみた』

尻尾のこと『最近、寝癖のようにブワッと広がるので手入れが大変』

身長『１５３ｃｍ』

体重『問題ないよ！』

足のサイズ『左右ともに２３．０ｃｍ』

固有【Ｇｒｅｅｎｓ　Ｒａｎ　Ｌｖ．２】『レース場が芝で且つレース中盤に先団にいると先頭目指して少し加速する。』

……

トキノレイン　★★

自己紹介「トキノレインです。伯母さん、お母さんみたいになれるかな？……ううん。なれるよね！」

メグルとの続柄『従姉』

誕生日『６月６日』

学年『中央トレセン学園中等部１年生』

毛色『鹿毛（茶色）』

好きなこと『雨に打たれながら、先輩と散歩すること』

嫌いなこと『へっくちゅん！』

得意なこと『復習』

苦手なこと『予習』

耳のこと『ミドリの真似をして自分も青色のカバーを着けてみた』
尻尾のこと『雨や水で濡れても直ぐに乾く』
身長『１５０ｃｍ』
体重『少し痩せた』
足のサイズ『左右ともに２２．０ｃｍ』
固有【フォール・レイン　Ｌｖ．２】『レース場の天気が雨で且つ中盤で自分の前と後ろにウマ娘がいると雲を分けるように少し加速する。』
……
ダイヤグリーン
メグルとの続柄『母』
職業『俳優・声優《グリーンダイヤ！》（キュピーン！）』
好きなこと『子供達の成長を見守ること』
嫌いなこと『子供達が無理をすること（特にメグル、貴女よ！本当に心配したんだから！）』
……
駿川翔真
メグルとの続柄『父』
職業『非常勤トレーナー（以前はトレセン学園の常勤トレーナーだったが、とある理由で非常勤に切り替えた）』
好きなこと『家族に決まっているだろ!!』
嫌いなこと『姉の愚痴話』
……
アメノホマレ
メグルとの続柄『叔母』
職業『郵便局員、シングルマザー』
好きなこと『レース観戦』
嫌いなこと『姉のタックルもどきの抱擁』
……
駿川たづな
自己紹介『こんにちは、トレセン学園の理事長秘書、駿川たづなで

す。みなさんがより良い学園生活を送れるよう、支えてまいります♪』

メグルとの続柄『伯母』

誕生日『５月２日』

職業『中央トレセン学園理事長秘書』

好きなこと『家族や親戚に会うこと、ラーメンと餃子定食』

嫌いなこと『膨大な量の仕事を学生時代からの友人兼上司から押し付けられること』

???『???』

……

アイネクライト

自己紹介『アイネクライトだよ！走るのが大好き！皆と一緒にレースをたくさんしたいな～！』

学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』

毛色『鹿毛（茶色）』

好きなこと『食べること』

嫌いなこと『食べないこと』

得意なこと『勿論、走ること！』

苦手なこと『メグルちゃんが持っている本を読むこと』

耳のこと『アイリスとメグルが話していると何故かピクピク動く』

尻尾のこと『好きなことや得意なことをしたりする時、大きく揺れる』

身長『１２０ｃｍ』

体重『ちょっと太った？』

性格『スペちゃんとウララをそれぞれ半分にして混ぜた感じ』

足のサイズ『左右ともに１９．０ｃｍ』

……

エミリアレッド

自己紹介『エミリアレッドと申します。レッド家の者として恥じぬ存在になるために、日々精進してまいりますわ！』

学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』

毛色『芦毛（青紫色）』
好きなこと『食べるのなら、パック納豆がいいですわ。特に納豆と卵とネギを混ぜた納豆卵かけご飯。健康的でいいですわよ。』
嫌いなこと『うるさいこと』
得意なこと『魅せる走りをすること』
苦手なこと『算数（今は！今はですわ！）』
耳のこと『双子の妹の声を聞くとピクッとなる』
尻尾のこと『誉められると揺れが速くなる』
身長『１１５ｃｍ』
体重『完璧』
性格『マックちゃん』
足のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』
……
フーラルレッド
自己紹介『フ、フーラルレッドです……。えと、お姉さまからはフランって呼ばれてるの……。その……よろしくね？』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『栗毛（金色）』
好きなこと『アニメ、ドラマ鑑賞』
嫌いなこと『騒がしいこと』
得意なこと『足音をたてずに素早く歩ける』
苦手なこと『人気が多い所』
耳のこと『好きなアニメ、ドラマの話になると少し伸びる』
尻尾のこと『耳と同じような内容でよく揺れる』
身長『１１４ｃｍ』
体重『痩せぎみ』
性格『ライス（妹）』
足のサイズ『左１７．５ｃｍ　右１８．０ｃｍ』
……
アイリスフェザー
自己紹介『アイリスフェザー。クライトとは保育園よりも前から知

り合っている幼なじみ。……絶対に彼女には負けない。』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『芦毛（白色）』
好きなこと『走ること以外特になし』
嫌いなこと『まず嫌いにならなければ良い』
得意なこと『……走ることだ』
苦手なこと『だから、苦手なことも（以下略）』
耳のこと『ペタッて曲がるってなる時は眠いときらしい』
尻尾のこと『揺れている時は心が揺れているときらしい。』
身長『１２５ｃｍ』
体重『変動なし』
性格『よく分かんねぇな。ビワか？イクノか？』
足のサイズ『左右ともに１９．５ｃｍ』
……
ビクトリング
自己紹介『ビクトリングだ。とりあえず、この学校には強い奴が多いみたいだからな。……速く戦いたいものだ。楽しみで仕方がない。』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『黒毛（黒色）』
好きなこと『食べること、勝負事』
嫌いなこと『本気を出さないこと』
得意なこと『ポーカーフェイス（勝負内のみ）』
苦手なこと『国語』
身長『１２２ｃｍ』
体重『要る情報か？』
性格『ウオッカ、アマ寮長、フェスタを１：１：３にした感じ』
足のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』
……
バルトグロー　★
自己紹介『俺は、バルトグロー。俺の周りに居ると……ヤケドする

ぜ？』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『黒毛（黒色）』
好きなこと『本気で走るレース』
嫌いなこと『自分が邪魔されること』
得意なこと『けん制』
苦手なこと『ロードにうまくのせられる事』
身長『１４５ｃｍ』
体重『計測不可』
性格『ウオッカとロジカルじゃないシャカールを混ぜた感じ』
足のサイズ『左右ともに２１．５ｃｍ』
固有【Ｔｒｙ ａｇａｉｎ ａｎｄ ｄｅｆｅａｔ Ｌｖ．１】『レース後半で自分が抜かされると反骨精神で抜かし返そうと少し加速する。』
スキル【逃げけん制】【先行けん制】
……
リアフルス ★
自己紹介『よっ！アタシ、リアフルス！強い奴追いかけ、引き離す……！マジでこれ、超最高だから。アンタもやってみな！追込！』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『鹿毛（赤茶色）』
好きなこと『追込、気分をアゲること』
嫌いなこと『逃げること』
得意なこと『溜まった宿題の追込（……？）』
苦手なこと『静かなこと』
身長『１３８ｃｍ』
体重『増えたり減ったり』
性格『ネイチャとヘリオスを混ぜた感じ』
足のサイズ『左右とも２２．０ｃｍ』
固有【マジで最高！皆！ Ｌｖ．１】やる気（調子）が絶好調の時且つレース中盤に後ろ側にいると気分アゲアゲで少し加速する。』

スキル【コーナー巧者】【仕掛け準備】
……
レイショット　★
自己紹介『こんにちは、レイショットです。私の全力を出すために、集中してレースに臨みますよ！』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『白毛（白色）』
好きなこと『アニメ鑑賞、オンラインサバイバルゲーム』
嫌いなこと『調子を狂わされること』
得意なこと『集中』
苦手なこと『スタートダッシュ』
身長『１４０ｃｍ』
体重『増減なし』
性格『若干バクシン』
足のサイズ『左２２．０ｃｍ　右２１．５ｃｍ』
固有【ゼロ距離ショット　Ｌｖ．１】『スキル【集中力】又は【コンセントレーション】を使った上でレース後半の時に前のウマ娘と極端に近いと集中力の賜物がようやく出るように少し加速する。』
スキル【集中力】【ウマ好み】
……
ロードジャスト　★
自己紹介『僕は、ロードジャスト！特進５年生のクラス長……学級委員だ！僕達の活躍をしかとその目に焼きつけてくれたまえ！』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『毎年、宝塚に行く際には必ず公演とレースを見る』
嫌いなこと『そんなものは無いよ？』
得意なこと『Ｉ　ｃａｎ　ｄｏ　ａｎｙｔｈｉｎｇ！』
苦手なこと『強いて言うなら……昨日の自分かな？』
身長『１４３ｃｍ』
体重『いつも完璧』

性格『まんまオペラオー』
足のサイズ『２３．０ｃｍ』
固有【ｒｏａｄ　ｏｆ　ｌｏｒｄ】レース中盤に抜かされそうになると主君の為の道だと誇示するかのように少し加速する。
スキル【逃げコーナー】【逃げ直線】
……
サクラバクシンオー　★★【天才（オリジナル）】
学年『私立濃山小学校特進６年生』
固有【学級委員長＋速さ＝バクシン　Ｌｖ．２】
スキル【直線巧者】【先行直線】
……
シンボリルドルフ　★★★【天才（オリジナル）】
学年『中央トレセン学園中等部』
役職『中等部生徒会長』
固有【汝、皇帝の神威を見よ　Ｌｖ．１】
……
エアグルーヴ　★★★【天才（オリジナル）】
学年『中央トレセン学園中等部』
役職『中等部副生徒会長』
固有【ブレイズ・オブ・プライド　Ｌｖ．１】
……
マルゼンスキー　★★★【天才（オリジナル）】
学年『中央トレセン学園中等部』
固有【紅焔ギア／ＬＰ１２１１—Ｍ　Ｌｖ．１】
……
シラネ
自己紹介『こんにちは、作者ことシラネです。今作、【転生したら……ウマ娘だった。】をお読み頂きありがとうございます。これからも精進して参りますので今後ともよろしくお願いいたします。それでは、メグル、あれをどうぞ！』
メグル「引っ込んでろ！」

シラネ「ありがとうございます。（ＧＪ）」
メグル「Ｍかよ……。」
シラネ「Ｍであり、Ｓでもあります！（ピシッ）」
メグル「こんな奴放っておいて、次、行って下さい。お時間を取らせてしまって申し訳ないです。それでは！」
シラネ「ちょっと待って、まだ、話し終わってな……」
終わり。

13話　天才は天才と愚才を生み、皆に恐怖と畏怖を与える

はい、どうもトキノメグルです。バクシンオーとのレースから1ヶ月程が経ちました。あのレースはまだ感銘に残っていますよ。
だって、初めてゲームの中のキャラに会えて、レースも出来たんですから、僅差で負けても物凄い満足感はありましたよ。

……早速ですが、皆さんにお伝えしないといけないことがあります。

はい、

私が1年生で且つ特進5年生ってこと、

フツーにバレました。

入学して初日、1年生のウマ娘は6年生のウマ娘と一緒に校内回ったり、校外に出て遊びに行くって事がありましたよね。その時、私と一緒に回ってくれていた先輩が先日あったバクシンオーとのレースで一緒に出走していた【セブンティセブン】先輩でした。だから、あんなにも調子が悪かったんです。私が出走している所、そして、私が5年生特進だと紹介されたことでセブン先輩が非常に混乱し、スタートはまだ良かったにしてもその後は掛かりまくっていて結局最下位だったので……。非常に申し訳ないと思いました。
その事が原因で校内に私の存在についての噂が急激に広まり、私のもとに来て質問をしてくる生徒が急増しました。最初はしっかりと応対し、質問に対して全て嘘の否定をしていましたが、ずっと来るもんですから、授業にまで支障が出てくるようになりました。この事態

を重く見た先生達は急遽、職員会議、全校集会を行い、『今年のウマ娘科1年生には既に飛び級をしている生徒がいる。詳しくはその生徒の為に言うことは出来ないが、私の一存でこのように混乱を招いてしまい誠に申し訳ない。』と、校長が謝罪しました。

……私にも勝手にレースに出た事とか、止めるのを先生に懇願しなかった事やら猛省するところはありましたが、私にはお咎めはありませんでした。

結局、私が所属しているウマ娘科1年生のクラス、特進5年生のクラスにもその事が知られてしまい、更には校長が該当生徒の事を言わずに謝罪したことで薄々感づいていた生徒達が確信に代わり、結果、私は質問攻めと大量の宣戦布告を食らうことになるのでした。

本当に私達の詰めが甘々過ぎることによって生じた必然的な事件になりました。

んで、校長含め先生達はというと、全部という訳ではありませんでしたが、ある程度の事が教育委員会から同情され、生徒達に大人の事情で混乱を生じさせた事、一生徒に集中したイジメが起こりかねないということが問題点とされ、校長には2ヶ月の給料返上。教頭、5年生学年主任、5年生特進担任、1年生学年主任、1年生ウマ娘科担任は2ヶ月の給料減額で責任をとりました。

だからと言って彼らに恨まれるという事は一切ありませんでした。というか、普通に謝罪されました。（イジメが起きてもどうってこと無い気がするが。）

以下は私が所属しているクラスでの話。

……

ウマ娘科1年生　教室

「……ちょっと、皆、落ち着いてくれない……？」

「「落ち着ける訳無いでしょ!?」」

今、私の席を取り囲むように皆が陣取って私を逃がさせないようにしています。（助けて……。いじめられる気持ちが分かるよ……。）

「別に私達は怒ってるんじゃないの！……いや、怒ってるけど……。とにかく、何で言ってくれなかったの!?」

「ど、どゆこと？」
「確かにメグルちゃんは凄くこのクラスの中でも足が速いし、体力もあるし、凄く賢いなって最初の日から思っていたよ!?だけど、何、飛び級って!?何、５年生の特進って!?何、６年生のお姉ちゃん達に勝つって!?」
「ひ、ひぃ……。」
「言ってほしかったのよ!!そうしたら私達は喜んで祝ったのに!!」
「……え？」
　どういうこと？祝うって？
「つまり、私達が怒っているのは、飛び級した事では無くて、飛び級した事を隠した事なのですわよ？」
「……皆、私が飛び級した事が憎いんじゃないの……？」
「そんな事!!一回も言ってない!!!」
「……私、見たかったなぁ。メグルちゃんが６年生のお姉ちゃん達と一緒に走る所。皆と一緒に応援したかったなぁ……。言ってくれてたら、絶対に応援しに行っていたのに……。」
「そ、それは、無理だったなぁ……。」
　あれは無理だった。バクシン先輩が急に始めちゃったから……。
「……ああ、もう……。皆、メグルが怖がってるじゃねえか。私達の戦友（ライバル）を祝うんじゃなかったのか？……メグル。お前は私にとって……私達にとって、戦友（ライバル）だ。勘違いすんなよ？ただの好敵手（ライバル）じゃない。戦友だ。仲間だ。クラスメートだ。私達はお前が今、どのぐらい強かろうが、関係ない。必ず追い付いてみせるから、それまで怠るなよ。」
　長いよ……ビクトそれ凄く良い言葉なんだけど君が言うと違和感アリアリなんだよ。
「「……ビクトが言葉を間違えなかった……。」」
「良い雰囲気ぶち壊すなよ!?……あぁ、クソッ！めでたいな、ちくしょうめ!!……ちょっと外の空気吸ってくる……。」
「……ビクトは放っておいて、メグル。おめでとう。」

「……!うん……ありがとう。」
「まさか、ここまで速く飛び級するとわね。……でも、貴女のお陰かもよ？私達が入学してからまだ全然経っていないのにも関わらず、ここのクラスの結束が固まったんだから。」
「そう……なのか……？」
　結束とは？と言いたくなったが、少なくとも今は私以外は団結していたのだろう。

「おめでとう……メグル。」
「ありがとう。フーラル。」
「うん……。もう、メグルは5年生なんだね……。？……ということは……？メグルは、私達にとって、お姉様……なのかな……？」
「違います。」
「ううん。良いの。私は……今度からメグルお姉様って呼ばさせてね？私の事もフランって呼んで良いから……。」
　どないすればええねん。
「呼ばさせてあげてくださいな。フランは年上じゃなくても若くて立派なウマ娘の事を〝お姉様〟と呼んでるのですわ。私の事は普通に姉だから〝お姉様〟と呼んでるだけなのだけれども、フランにとって私以外の〝お姉様〟に当たるウマ娘は憧れと尊敬に値するそうですわ。」
「そうなんだ……。」
「……お姉様も私の憧れだよ……？」
「ありがとう。フラン。」
「……それじゃ、皆で実は決めてた事、言お！……せーの！」
「「メグル!!飛び級、おめでとう!!」」
「……ありがとう！」
　こうして、1年生のクラスでは皆が私の事を祝福してくれた。
　少しの間だったけど隠してごめん。
……
特進5年生　教室

午後になってから、私が1年生の教室を後にし、未だに生徒のパパラッチが来るのでそれを避けながら、特進5年生のクラスに行くと、ロードが大勢のウマ娘を説得していた。
「君たち、ここは特進5年生の教室だよ?ここの者ではないはずだが、どうしたのかな?」
「トキノメグル……先輩?と話をさせて下さい!どうしても何でそのようになったのか、聞きたいんです!」
「良いから、話をさせなさい。同じ学校の先輩としてどうしても聞きたいことがあるのよ!」
「まぁ、待ちたまえ。僕の後輩や先輩方。とりあえず、僕からは彼女の許可なくここを通してはいけないのでね。」
「私達のミドリ先輩の事は知ってるでしょ?去年、卒業していった。あの先輩だけが、唯一、特進6年生のバクシンオーと競える位の強さを誇っていたのよ!それを入学したばかりの1年生が〝ハナ差〟まで詰めたの!分かる!?この気持ち!私達が積もりに積もりあげてきた6年を……それでも届かない私達の努力を……あの娘はそれを1年どころか、たったの3日だけで超えたのよ!?あの先輩の妹という噂が本物であれ嘘であれ、絶対にあり得ない!!信じたくない!!認めたくない!!」
「気持ちは分からなくも無いが、ただ自分の欲求不満を私に言われてもね……。それが彼女なりの天才の証でしょう?それで納得してもらえないでしょうか?」
「「納得できる訳無いじゃない!!!」」
「……はぁ。やっぱりか。……それなら、僕達とレースをして、勝利した者だけがメグルに質問する事が出来るという事にしたらどうかな?……メグルは僕達の中でも多分だが〝ダントツ〟で強い。……今まで、僕達は何回かメグルと戦ったが一回も勝ててないんだよ……?君達にはそんな彼女に質問する権利があるというのかい?あるというのならば、本当なのか確かめるから、〝メグルよりも弱い筈〟の僕達とレースしようではないか!それで勝てなかったら僕達よりも弱

い……つまり、メグルよりかは確実に弱いという事になるだろう？……なに、既に数日前からこうなることを予測して、今週の日曜日のレースコースの予約は取っていたさ！……さぁ！誰が僕達に挑む？なんなら、そこにいるメグルにも参加してもらおうじゃないか!!メグルに勝てば御の字、僕達に勝てば質問の権利、盛り上がるだろう!?……良いだろう？メグル、そのぐらい？」

一斉にロードの前にいる大勢のウマ娘が私の方を向く。

「「絶対に勝つ!!!」」

「えぇ……。」（せめて確認してから言ってよ……。あと、話が最後無茶苦茶になってません？）

……結局、有無も言わずにレースを開催することになり、推薦や投票、抽選で選ばれたウマ娘と5年生特進組（グローを除く）が集結した。

グローは適性が無いからと拒否し、今回は観客席に行ってレースを観戦する事にしたらしい。

……

そして、今週の日曜日に開かれるレースの為に私は1人で練習していたが、1つ大きな問題が発生した。

それは、今回のレースはチーム対抗戦で行われるという事が発表された事だった。

実はゲーム【ウマ娘】には、チーム競技場や毎月の大きな大会であるチャンピオンズミーティングというものが存在する。そこでは個人戦ではなく、基本的には3人で1チームとして戦うというルールがある。例外的に1人や2人で参戦する場合もあるが。

しかし、現在の私は、一個人。そのまま1人で行くと周りの敵が団結して私に集中砲火してくる可能性が非常に高い。

なので、私は同じクラスである5年生特進にチーム作成を頼んだの

だが……。
……
「「無理（だね）。」」
「え？」
即答で断られてしまった。
「アタシ達だってメグルと対決したいわけじゃん？別にアンタの事を根掘り葉掘り聞く訳じゃないけど。同じチームになったら、それはそれで楽しいけど、戦いたいんだって。」
「大体、私らが今、３人で固まってる事で分かってたでしょ？」
「……既にチームになってる……。」
「今まで僕達は個人戦では負けてきたけど、チーム戦では戦った事がなかったからね。僕達は君と対決する事は諦めたくないんだ。」
「でも、私、チーム編成……。どうすれば……。」
「確かに１年の娘じゃ、メグル以外だったら完璧に実力不足だろうし……。」
「そもそも、『メグルに勝利する、又はロード率いるチームに勝利する』つまりは、『５年生特進のチームに勝利する事が条件』と、言ってしまっている以上、４、５、６年生のウマ娘は同じチームにならないと思うわよ。」
「そ、そんなぁ……。」
「諦めてくれ。」
そう言われ、私は少し絶望感……というよりも日曜日に起きる１人対大人数のレースが恐くなってしまった。（イジメではありません。一応、正当な行動です。）

……しかし、
「……とは、言えなくてね。当ては有るんだ。」
「え？」
「今の君がここまで精神的に追い詰められる事になった原因の人物。その人物ならば、チームに参加してくれるんじゃないかな？」
「……！」

「その人物でも良いんだったら、君が作るチームに5年生学級委員として僕から推薦しよう。彼女は今日は既に帰宅してしまっているから、今日は紹介出来ないんだ。明日、紹介しても良いかい？」
「是非、お願いします！」
「了解。明日の昼休憩、彼女をここの教室で待機させておくよ。」

……

翌日

この事件の元凶ともう1人の元凶が5年生特進の教室で互いに土下座する事になったのだった。

その後、そのやって来た先輩は、チームへの参加を快諾し、もう1人のチームメンバーは紹介は出来るが、当日でないと対面は出来ないと言われ、ほぼ確定でチームの出場するメンバーが決まったのだった。（理由は、所属しているスポーツクラブの関係で学校を今週末まで休んでいるということだった。そして、次に先輩に会ったときには既に連絡をしてくれており、チームに参加することを承諾したと言ってくれたのだった。）

その後の日々は先輩こと、セブン先輩と一緒に放課後トレーニングに励んだり、作戦の打ち合わせを行ったのだった。

……

数日後

私とセブン先輩、更にやって来た先輩の親友、ゼロワンピーシー先輩が集結し、チーム『メグル』として、チーム対抗戦に臨む事になったのだった。

……

レースコース

【ＥＸ】【東京　芝　模擬レース　２０００ｍ　曇　稍重　左】【チーム対抗戦】

（実況　５年生進学担任）
（解説　６年生進学担任）

（スターター　６年生学年主任）
（ゲート　４年生学年主任）
（判定　４年生ウマ娘科担任）

出走者

１　イットウニユウコン　差し　チーム『サイレンス』　２　リアフルス　追込　チーム『ロード』　３　ブラッドステイ★　先行　チーム『ブラッド』　４　スイヘイセン　逃げ　チーム『エンブレス』　５　トキノメグル★　差し　チーム『メグル』　６　エンブレス★　先行　チーム『エンブレス』　７　ロードジャスト★　逃げ　チーム『ロード』　８　ブルーシャワー★　差し　チーム『シャワー』　９　サテライト　逃げ　チーム『シャワー』　１０　セブンティセブン　追込　チーム『メグル』　１１　ダイヤモンドホーン　先行　チーム『サイレンス』　１２　レイショット　先行　チーム『ロード』　１３　ファーストロッド　逃げ　チーム『シャワー』　１４　ユウキトアイ　追込　チーム『ブラッド』　１５　ゼロワンピーシー　逃げ　チーム『メグル』　１６　ラクトブロッサム　追込　チーム『ブラッド』　１７　ファストフット

先行　チーム『エンブレス』　　１８　ナイツサイレンス★　追込
チーム『サイレンス』
…　追込…　　…　差し…　　…　先行…　　…　逃げ…
５人　３人　５人　５人
★が付いている出走者は各々のチームのエースメンバーです。
６年生進学チーム：チーム『サイレンス』、チーム『ブラッド』
５年生特進チーム：チーム『メグル』（エース以外は６年生進学）、チーム『ロード』
５年生進学チーム：チーム『エンブレス』
４年生ウマ娘科チーム：チーム『シャワー』

……
パドック

「今回はチームを組んで下さり、ありがとうございます。セブン先輩、ピーシー先輩。また、こんなことに巻き込んでしまった事、今一度謝ります。すみません。」
「そんな、謝らないで！私の方が悪いのよ！というか、もう何回も謝ってもらってるけど、違うからね！貴女が１年生というのを隠していた飛び級の５年生特進って事を知っていたら言わなかったのに……心配になったのと疑問に思ってつい、周りの友達に喋っちゃったの……何回も言うようだけど、本当にごめんなさい！」
「いいえ。セブン先輩は悪くないです。悪いのは私と私の正体を隠していた学校が悪いんですから……。」
「いやいや、私が喋らなかったら、こうはならなかったの……！１年生に責任を持たすなんて出来ないわ！」
「……どちらも悪くないのでは？」
「え？」
「メグルさんは混乱を避ける為に自分の正体を隠そうとしたのが偶然バレてしまっただけのこと。セブンさんは自分のパートナーを心配しての行動だっただけのこと。どちらも悪意はないので悪くは無い

のでは？」
「そうかもだけど……。」
「それに、ロードさんがこうして、実力で解決するような状態にしてくださったので分かりやすくなっています。要はメグルさん率いるこのチームが勝てば良いのですから。」
「……そうですね。ピーシー先輩、ありがとうございます。……勝てば良いんです。そうすれば皆、納得してくれますね。セブン先輩もありがとうございます。お陰でスッキリした気分ですよ。逆にあのままだとずっと抱え込む羽目になって、私はしんどい思いをしていたでしょうから。」
「そう……？……うん。分かった。もう、しょげない。……頑張って勝利を掴もう！」
「その意気ですよ。……メグルさんは、私の事をあまりご存知ではないと思いますので、ここで軽く自己紹介させて頂きます。私は、ゼロワンピーシー。主な作戦は逃げ。中、長距離のレースが得意です。また、セブンさんとは小さい時からの馴染みです。」
「セブン先輩とはそんな関係でしたか……。では、今度は私が自己紹介しますね。私はトキノメグル。昨年卒業した、トキノミドリの妹です。作戦は何でも、距離もある程度の距離ならどれでもいけると思います。今回はよろしくお願いいたします。」
「凄いですね……。作戦も自在、距離も自在、それが小学校1年生とは。確かにこれはヤジウマの気持ちも分かりますが、迷惑をかけて良い訳ではありませんね。頑張りましょう。……次はセブンさん、一応、どうぞ。」
「うん。私はセブンティセブン。主な作戦は差しと追込。距離は短距離から中距離まで。中長距離からはかなりきついかな？頑張ってメグルの事、サポートするからね、よろしく！」
「よろしくお願いいたします。……さてと、他のチームの殺意が凄いのでさっさとゲートに向かいましょう。」
「「うん（はい）！」」

……

学校の不手際で半強制的に行うことになったこの模擬レース、実況者としてではなく、教師として、まずは謝罪させていただきます

観客席には噂を聞きつけた1年生から6年生までの殆どの生徒が観戦しに来ており、既に観客席から熱気が溢れております

……が、パドックの方では更に熱気……いや、寒い程の殺気が満ち溢れております

さて、このレースはチーム対抗レースとなっております

今回の出走者は18人、フルゲート、チームメンバー数は各々3人、チーム数は6チームになっています

空は快晴とはいかず、厚い雲が澱めています。

ターフの方は前日の雨、今朝の小雨の影響が少し残って稍重となっております

それでは、気になる三番人気から一番人気を紹介しましょう！

三番人気は、7番ロードジャスト！

このレースの開催者で5年生特進、学級委員です

「メグル、本気を出してくれたまえ！でなければ……〝許さない〟からね？」

凄い気迫です。いつものロードジャストでは出さない雰囲気が……殺気が溢れております。

今回は『ロード』という5年生特進チームのエースになっていますね。

二番人気、3番ブラッドステイ！

今回のレースでは6年生進学のウマ娘達を2チームに分けております

彼女は『ブラッド』という6年生進学チームのエースになっていますね。

また、彼女は6年生進学のウマ娘の中では最優秀生徒で、学級委員です。元々は5年生特進だったこの娘、6年生に上がってからは自分

の適性の関係から、敢えて進学コースを希望した茨の道を突き進む強い娘です。
「……トキノメグル……。お前はミドリ先輩とは違う。……見せてみろ、私に。お前が持つその実力を。姉とは異なった天才の実力を！」

威風堂々と構える小さな巨人、一番人気、５番トキノメグル！
今回の事件の中心人物であり、１年生でありながら、５年生特進という謎の肩書きを持つ……チーム『メグル』のエースです
サクラバクシンオーとの戦いで見せたその実力は今回のレースではいかほどか。新たな天才……ウマ娘達の導となるのでしょうか？。
「……。」

……
観客席

「「メグル！頑張れ～!!!」」
「締まってけよ!!!、お前ら!!!、メグル!!!、ロード!!!、リア!!!、レイ!!!」
「あのお姉ちゃん、怖い……。」
「大丈夫よ。あの方もメグルさんやお仲間の方を応援しているだけですわ。」
「頑張れ～!!!」
（頑張れ。……メグル！）
（奴に勝つためにも、今回のレースで勉強しねぇと……。ともかく、頑張れよ。メグル。）
「頑張って下さいね！メグルさん！私の好敵手（ライバル）として……優秀であるために！……あ！販売員さん！桜餅下さい！」
「はいよ～。１パック、１０００ジンバブエドルね。」
「せ、１０００!?そんなに高いのですか!?その桜餅は!?」
「おうよ！極秘製造の金船印の超高級桜餅！限定１パック！今が買いだよ～！」
「分かりました！買います！はい！１０００！」

「毎度〜。ほい。お釣の６４５円。」
「やや!?お釣がこんなに!?どういう事でしょう……。ともかく、食べてみましょう!!いただきます！（はむッ）……やっぱり、桜餅は美味しいですね！」
「よし。餅が売れた事だし、次は、ドーナツの穴空けバイトだな……んじゃ、アディオス！」
「さようなら！……しかし、本当に美味しいですね！この桜餅！……さっきのウマ娘の販売員さん、またどこかで会えるでしょうか？会えたら、また買いたいものですね！」

「「「ステイ！頑張れ!!!負けちゃダメだからね〜!!!」」」
「「「１年生なんか、負かしてやれ〜!!!、スイ！、エンブレス！、ファスト〜！ファイト〜!!!（イッパーッ!!!）」」」
「「「頑張れ頑張れ！ブルー！頑張れ頑張れ！ライト！頑張れ頑張れ！ロッド！ワーーーー!!!!」」」
２、３ウマ娘達（私達は誰を応援すれば良いか分からないから、勉強しよう。……だけど、本当にパドックやゲートが寒いぐらいに殺気が漏れてるよ……。本当に小学校のレース？トレセン学園とか、重賞レースじゃなくて？）
……
ゲート

各ウマ娘、ゲートイン完了、出走の準備が整いました

※今回のレース（パドック内の実況、解説含む）以降、実況者が喋る言葉には、句点が付かず、解説者が喋る言葉には必ず句点が付くようになります。また、レース中に観客席から発言があった場合、『』の括弧が。思念があった場合、《》の表示があります。出走者はいつも通りの「」、（）になります。
ただし、固有スキルの発動時には、『』、【】。スキル発動時には【】を

用います。

……

スタート!!

各ウマ娘、キレイにスタートを切りました！

レイショット、今日は【集中力】を発動させても、出遅れなかった！

普通なら、【集中力】は出遅れを防ぐ為のものなんですけどね……。

先行争いを繰り広げているのは、内から、ゼロワンピーシー、ロードジャスト

直ぐ後ろ、スイヘイセン

更に後ろ、サテライト、ファーストロッド

一番人気、トキノメグル、集団の後ろ側に陣取っています

先頭は二人のつばぜり合い！ゼロワンピーシー、ロードジャスト、互いに譲らない！

続いて、先行の集団の様子を見ていきましょう

逃げ集団の最後尾から5バ身差、先行集団の先頭はブラッドステイ

1バ身差、エンブレス、レイショット、ブラッドステイを追いかける！

その後ろ、ダイヤモンドホーン

ファストフット、追跡

差し集団は先行集団の最後尾から4バ身後ろに構えています

先頭はブルーシャワー

その外、トキノメグル

1バ身後ろ、イットウニュウコン

ブルーシャワーとトキノメグルの激しい競り合いが続いています

そして、追込集団、差し集団から3バ身離れて、固まっています

追込集団、先頭は、リアフルス

続いて、セブンティセブン
直ぐ後ろ、ナイツサイレンス
ユウキトアイ、ラクトブロッサム、最後尾にて様子を伺っています
先頭から殿までおよそ２２バ身
全体が長くなっていますが、全員が各々のペースで走れているようです。
セブンティセブン！【逃げけん制（劣化版）】【先行けん制（劣化版）】を使って、２つの作戦の敵を疲れさせる！
一気に発動させて、自チームの勝率を上げようとしていますね。
（……フンッ）
（グローがいたのかい？）
（（（（（２０００ｍでのけん制か……。少し、調整しないと……。））））））
（私は今回、サポート。ピーシーとメグルの為に頑張らないと！……その為に数週間前から〝デバフ〟のグローにも会いに行ってたんだから。）
《お？ちゃんと使ってくれたか。》
ゼロワンピーシー、【先頭プライド】で先頭を譲らない！
ブラッドステイ、【中距離コーナー〇】で速度を上げる！
ブルーシャワー、【ポジションセンス】で自分の走る位置を調整しています
先頭集団、先行集団のペースが僅かに落ち、そのまま集団は向こう正面に入っていきます
先頭、ゼロワンピーシー
外、ロードジャスト
後ろ、スイヘイセン
直ぐ後ろ、サテライト
１バ身差、ファーストロッド
３バ身後ろ、ブラッドステイ
１バ身後ろ、レイショット
後ろ、エンブレス

その外、ダイヤモンドホーン、ファストフット
３バ身差、トキノメグル
続いて、ブルーシャワー
１、２バ身差、イットウニュウコン
更に２バ身差、セブンティセブン
内、リアフルス
後ろ、ナイツサイレンス
その外、ユウキトアイ
最後尾、ラクトブロッサム
トキノメグル！少し焦っているか
緊張はあるでしょうね。彼女は唯一の１年。他の娘達と比べても体格差が大きいです。
『頑張れ～！メグル～！』
（全く聞こえないけど、そう言ってる気がする。……頑張るよ。）
トキノメグル、【直線巧者】で自分の走るペースを上げた！
凄いですね。１年生でスキルを持った生徒なんて見たことがありません。どうやって手に入れたのでしょうか？。
（めちゃくちゃ努力したら手に入ってたんだよね。普通ならトレーナーから教わるもんなんだけど。本当にそれ専用のトレーニングしたら入ったんだ。効率悪かったけど。）
向こう正面中間、大きな坂を上っていくウマ娘達
ダイヤモンドホーン、イットウニュウコン、【登山家】で上り坂を駆け上がる！
そして、長めの下り坂に差し掛かり、ダイヤモンドホーン、今度は【直滑降】で下り坂を素早く駆け降りて行く！
ダイヤモンドホーンは坂路が得意な娘ですからね。今回のレースは彼女にとって有利なレースになるでしょう。
残り１０００ｍを通過！
３コーナーに入り、４コーナーを目指します
現在の順位を紹介します
依然先頭は、ゼロワンピーシー

続いて、ロードジャスト
1バ身差、スイヘイセン
その後ろ、サテライト、ファーストロッド
2バ身差、ブラッドステイ
後ろ、レイショット、ダイヤモンドホーン
1、2バ身差、エンブレス
その外、ファストフット
1バ身差、トキノメグル
更に1バ身差、ブルーシャワー
その外、イットウニュウコン
2バ身差、リアフルス
後ろ、セブンティセブン
直ぐ後ろ、ナイツサイレンス
その外、ユウキトアイ、ラクトブロッサム
（中盤に入って後半……そろそろ何かを……）
「やらせないよ……？」
（……！）
ナイツサイレンス！セブンティセブンに【ささやき】！
セブンティセブン、調子は大丈夫か!?
（ッく！……耐える！……耐えた！……よし……そして、焦れ！）
セブンティセブン、反撃の如く【追込焦り（劣化版）】！更に【先行焦り（劣化版）】を使う！
（ほほう……？）
（……チッ。）
（（（こちとら、けん制も焦りも食らってるんですけど……！））））
（とばっちりじゃん……。）
先行5人はかなり辛くなりましたね。
集団のペースが速くなったり遅くなったりを繰り返していく中の4コーナー
段々と集団が固まっていき、最終直線に臨んでいきます
（そろそろ最終……。ここからが勝負！よし、行く……ぞ？）

トキノメグル！【まなざし】だ！【まなざし】を食らっているぞ！
（行かせない！）
（我らがチームが勝利するために……行かせません！）
「大人げないとほざくなよ？」
ナイツサイレンス！メグルに【まなざし】を使いながら、【束縛】だ！全体のペースが下がる！
（メグル!!……ああ、もう！ヤケクソのためらいよ!!）
セブンティセブン！終盤に入って、【先行ためらい（劣化版）】、【差しためらい（劣化版）】、【追込ためらい（劣化版）】を使った!!
一体、何個デバフスキルを持っているんだ!?
デバフスキルが飛び交っていますね……。

『クククッ……あはははは!!マジかよ!!先輩、即席で教えた奴、ほぼ全部使ってらぁ!!あはははは!!あひ、ひぃ……はぁ、おっかし……ククククッ……』
《……どうなってるの？デバフスキルが多過ぎ……。》

集団のペースがだだ下がりの状態で最終直線に入ります！
最終直線は約５００ｍ！逃げのゼロワンピーシーが先頭を走る中、先行のブラッドステイ、追込のナイツサイレンスが進出してくる！

（体が重い……だけど……この程度のデバフじゃあ、私の〝教え娘（子）達〟はへこたれていなかった……。私もいける。いけるんだぁーーー!!!!）

……

『私を……！無礼（なめ）るなよ!!!』
【オールターフ　Ｌｖ．１】
【オールターフ　Ｌｖ．２】

……

トキノメグル！【束縛】と、３人分の【まなざし】を食らっている中でも勢いよく加速した!!いや、飛び出した!!!

「マジで!!?」

(!?)

「はあーーー!!!!」

(私だって、負けられないんだーーー!!!!)

トキノメグル！【末脚】を使って更に加速!!

「頑張れ！メグル！」

先頭ゼロワンピーシー！しかし、外からトキノメグルが飛んでくる！

(……あそこまでヤられてこれなのか……。フフッ……興味深い！)

……

『極限まで誘え！』

【ＮＯ　ＭＯＲＥ　ＮＥＧＬＩＧＥＮＣＥ　Ｌｖ．２】

……

ナイツサイレンス！更に自分の前方にいるウマ娘にデバフを掛けながら加速する!!

「「ゴフッ……」」

「……はぁ……はぁ……はぁ、はあ……ー!!!」

それでも尚、トキノメグルの加速は止まらないぞ!!

先頭が切り替わって、ブラッドステイ！しかし、後ろからトキノメグル、ナイツサイレンスが追いかける！

残り２００!!
（はぁ……はぁ……こんな〝重い〟レースは初めてだ……。だがな……走る身としては……！ここまで面白いレースも初めてなんだよ……!!）

……

『納得いかさせろ!!!』
【Ｎｅｖｅｒ―ｓａｔｉｓｆｉｅｄ　Ｌｖ．２】

……

ブラッドステイ!!抜かされまいと加速する!!

『『『行っけぇーーー!!!、メグル!!!』』』
『『『耐えろ!!!、ステイ!!!、押せ!!!、ナイツ!!!』』』
残り１００！
「「「はあああーーー!!!!!」」」

最後は３人の三つ巴!!
最初にゴール板を駆け抜けるのは誰なんだーーー!!!

……

ゴール!!!

……暫くお待ち下さい。

……

……お待たせ致しました。
結果がまとまりましたので、お伝えします。
最後の三つ巴を制し、勝ったのは、

トキノメグル!!!

デバフスキルの雨を潜り抜け、６年生優秀生徒を２人も打ち負かし、見事勝利した！
二着、ブラッドステイ!!!
三着、ナイツサイレンス!!!

優勝、チーム『メグル』！
準優勝、チーム『ブラッド』！
３位、チーム『サイレンス』！
……
……

……

東　1　：R：　京　2000　：m：　確定

Ⅰ　5　＼＼＼　＼　＼＼　ハナ　Ⅱ　3　＼＼＼　＼

＼＼　ハナ　Ⅲ　18　＼＼＼　＼　3　Ⅳ　14

＼＼＼　＼＼　4　Ⅴ　15　＼＼＼．

．＼芝＼　．稍重．　．ダート　．重．

．タイム　2：06．8　レコード

……

レースコース

……ぜぇ……ぜぇ……はぁ……はぁ……。……やったよ。皆。

やったよ。私……。

……。

…。

。

あと、ごめんね。

……

レースが終わると、空に澱めていた厚い雲が耐えきれなくなったように雨を降らす。

本物の雨がターフを濡らす中、

1人のウマ娘が芝の上で倒れていたのだった。

１４話　トキノメグルと男子高校生

……

「ねえ。この娘とか、チャンミ用、どうかな？」

「そうだね……もうちょいスタミナの値が高くないとキツいかも……。」

「やっぱり？……また、作り直しかなー？」

「まあ、回復スキルで賄えるか。後でルームやろっか。」

……ねえ、ここはどこ？

……夢？それとも現実？

私、走っていたのに……。いや、ゴールしたんだっけ。結局、勝ったのは……誰だったっけ……。

……

???

私は、時野巡。

３年の男子高校生。

１年後に控える受験の為に勉強しているが、中々うまくいかない。毎日、受験に向けた習った範囲の模試や未だに習っていない範囲の勉強、過去問の解き潰しに追われる日々だ。

そんな単調な日々を過ごす私の前にある友人がとあるスマホゲームをやらないか？……と、誘ってきたのだった。

そのゲームの名前は、【ウマ娘プリティーダービー】。

最初は来年の受験の為に拒否しようと思ったのだが、断りきれずにダウンロード・インストールを行い、プレイを始めたのだった。

……おもろかった。

個性溢れる馬を擬人化した女の子達が競馬場を走る、その女の子達を育成するトレーナーというものに自分がなり、育成して強くするというのがこのゲームのメインの遊び方なのだが、いかんせんそんなゲーム（育成ゲーム）をしたことがない、はたまた競馬の知識なんてさらさら無かったのにも関わらず、私は新鮮味でこのゲームにはまってしまったのだった。

その後、そういえば馬の事が好きだった私の母にもこのゲームの事を伝えると、タブレット端末でプレイしだし、ひいてはデータ容量が足りないからと言って、パソコン版に切り替えてプレイするほどだった。

……

「ねえ。この娘とか、チャンミ用、どうかな？」

「そうだね……もうちょいスタミナの値が高くないとキツいかも……。」

「やっぱり？……また、作り直しかなー？」

「まあ、回復スキルで賄えるか。後でルームやろっか。」

「そうね。その結果で決めましょうか。……そういえば、お知らせ見た？新しいウマ娘がピックアップされるみたいよ？」

「マジ？もう、２週間経つのか……前回の娘から。引けなかったよ。」

「また引いたの？石があれだけ無いって毎度言ってるのに……。貯めとけって言ったでしょ？」

「ギャンブラーなんで。」

「もう……絶対、次回の娘はあなたが好きになりそうなキャラだったのに……。」

「へえ？オグリよりも？」

「それは分からないけど……。親近感は沸くと思うわよ？」

「なんで？」
「だって、次回、ピックアップのキャラの名前が……
……
メグル!!!
……
???
「巡!!!、しっかりしなさい！、巡!!!……先生！巡は……助かりますか!?」
「分かりません。精密検査と手術をしないといけないので……！直ぐに手術室に向かって!!」
「はい!!」
「巡さん！聞こえますか！ここは病院です！手術しますので、それまで気を確かに持ってくださいね！」
「巡さん！巡さ…！めぐ……ん！め……！

……きつい。苦しい。熱い。寒い。
吐き気まで押し寄せる。
目の前が暗い。
音が聞こえない。
……でも、走らねば。

あの子の為に。

走らねば助けられなかった。

良かった。

でも、

痛い。

痛い。

痛い。

……きつい。苦しい。熱い。寒い。吐き気まで押し寄せる。目の前が暗い。音が聞こえない。痛い。痛い。痛い。痛い。痛イ。イたい。イたイ。いタイ。イタい。イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ……。

……

しっかりしなさい！

……

???

……。

……。

……。

。

……

メグル!!!

……

???

……何かが見える。……何かが聞こえる。……行かなきゃ。……

何か言い残した事はあったっけ？

……あ、あった。

……あと、ごめんね。

……母さん。

……

メグル!!!しっかりしなさい！メグル!!!

……
……
……
……

病院

目を覚ますと、そこには母さんがいた。

母さんは涙を流していた。

側の窓を見るとどうやら太陽が山の頂上からひょっこり、顔を見せていたようだった。でも、直ぐに見えなくなる。だけど、窓から目を離し、横を向くと母さんの場所はやっぱりそこにある。

「……おはよう。母さん。」

私はよくは見えない母さんに向かって言葉を紡ぐ。

それに反応して、母さんも言葉を返す。

「……グスッ。……おはよう。メグル。」

母さんが近づいてきて、私をギュッと抱き締めた。

暖かかった。今はそれだけしか言えない。でも、良いんだ。

生きている今が一番大事なのだから。

１５話　トキノメグルと時野巡

結局、私は入院していた。
私は１日と半日の間寝ていたのだという。
診断は過労。特にレース中のデバフスキルを浴び続けた中での無理な加速が祟ったようだった。
逆に私が幼少期からやって来た事、小学生から〝本気〟のレースを何回か行っていることを母さんが話した時に〝過労〟だけで済んでいる事が不思議だったらしく、精密検査を受けたところ、特に問題は無かった事でより不思議がられたらしい。（アップとダウンをしっかりやってました。って事しか言えないよ……。）
有給休暇を取ってずっと横に居たらしい母さんを含め、父さん、噂を聞き付けた姉と伯母、１年のクラスメートの何人か、ロード、先生達、何人かのレースメンバーがお見舞いに来ていたらしい。

以下は、私が寝ている時に起きた、ざっくりとした出来事、会話の一部である。
……
【家族（ミドリ＆たづな）】
「病院内で走らないで……！危ないですよ……！」
「そんな事、聞ける訳ないでしょ!!ああ、もう！」
「大きい声もダメですよ……！」
「６１５号室……！どこ！……あっち!?」
「違う！そっちは１～１０号室のフロアですよ！１１～２０号室のフロアはあっちです……！」
「！あの部屋ね……！」
「！……その部屋は……！ミ……
ガラッ！
「メグル！だいじょう……ぶ？」
「……誰かの～？」

ドアを開けるとそこには白髪のお婆さんがベッドの上でお茶を飲んでいるところだった。
「……メグルが……おばあちゃんになってる!!?」
「うるさいですよ……!すみません!失礼しました!ミドリさん!メグルさんのお部屋はこっち……!」
「ご、ごめんなさい!……こっちね……!メグル!だいじょう……ぶ?」
ミドリがドアを勢いよく開くと、メグルの横に座っていたらしいダイヤが立ち上がりにっこりとした笑顔で低い声を放った。
「ミドリ……よく来たわね……とりあえず、病院内でやるなと言ったこと、〝あれだけ〟言ったのにも関わらず破っていたわね……!!」
「ぴ……!」
「……はぁ、こっちに来なさい。あなたが入り口を塞いでるせいでお義姉さんが入れないでしょ……!」
「……ひゃい。ごめんなしゃい……。」

……

【家族（翔真）】

（スライディング!!）
「……。（ガラッ）大丈夫か!?メグル!!」
「……。あ・な・た?」（ゴゴゴゴゴ……）
「……あ。あ、あはははは……。」
「そこに直りなさい……!一回、メグルの無事を確認してからで良いから……!」
「は、はい……ごめんなさい。」
その後、ミドリと同じように何時間か正座させられながら説教を食らっていたらしい。
……
【クラスメート】
ミドリ姉さんが帰ったあと、自分の後輩に会ったらしく、その後輩

の妹が私の事を心配していると聞いた姉さんは私の入院している部屋を伝えたらしい。その伝から、1年生のクラスメートに情報が行き、ロードが連れてくる形で（他の5年特進は別件で来れなかったらしい。）私が眠っている間に何人かのクラスメートが私の病室を訪ねてきていたらしい。

ドアを開けるとクライトが一番最初に入ってきた。

「メグルちゃん！」

「……あら？メグルのお友達？」

「は、はい。あの、メグルちゃんのお母さん……ですか？」

「そうよ。はじめまして。メグルはまだ眠ったままだから静かにお願いね。」

「はじめまして。メグル君のお母様。5年生特進学級委員のロードジャストです。」

「あら、5年生の方も？メグルの為にありがとうね。」

「……メグルさんは、大丈夫でしたか？レースが終わってから直ぐに倒れてしまったので……。」

「大丈夫みたいよ。疲れて寝てしまっているだけみたいだから。……逆に小さい時からここまで無理をして身体と心が壊れていないのが不思議なくらいよ……。」

「どういうことですか？」

「……少し、気持ち悪くなる話かもしれないけれど、聞きたい？」

「……お願いします。」

そうして、母さんは私が小さい頃からやって来た所業を言い出した。

「メグルは……小学校に入る前から……いえ、生まれてから直ぐに〝変〟な子だった。生まれてから産声をあげるまでは普通の子だった。だけど、それ以外はほとんど泣かなかったのよ。……赤ちゃんって、言葉が喋れない代わりに泣いて、お母さんや周りの人に自分のしてほしい事を伝えようとするの。『お腹が空いた』『オムツを替えてほしい』『眠い』『眠いけど怖い』『寂しい』『暑い』『寒い』とか。色々な事

を伝えようとするの。……だけど、メグルにはそれが異常なまでに少なかった。
　まるで、私達に迷惑を掛けようとしないかのように。異常に大人しかった。」
「「……。」」
「最初はこの子の性格なのかなと、思おうとした。だけど、その時は赤ちゃんである以上、酷く大人しい方が心配になるのよ。この子に何かしらの障害があって、事を伝えれないんじゃないか。辛く思っていないか。……小児科のお医者さんと何回も相談して、検査をしてもらっても何も問題は無かった。……混乱したわ。ミドリやメグルの前では極力しなかったけど、実はこの子達のお父さんとよくケンカしていたのよ。お互いがメグルの事を想って……なんだったのだけれど、意見がまとまらなかったのよ。
　……そして、つい、私とお父さんがメグルの前でケンカしてしまってね。酷く言い争ったわ。……でも、その時、メグルが泣き叫んだの。今までよりも強く。激しく。大きな声で泣き叫んだの。その瞬間、私とお父さんは同時にメグルの方を見た。……ケンカが止まったの。だって、メグルが泣かない事で心配していたのだから。そして、私は泣き続けるメグルをあやす為にメグルをそっと抱き上げたの。……ピタリと泣きがやんだわ。そして、笑ったの。にっこりと。かわいい笑顔になったの。まるで、怒らないで。私の為に怒らないで。って、言ってるようだった。その時、私は、『ああ、なんで言い争っているのだろう。この子はこの子。私達が決める事じゃない。私達が今、すべきなのはこの子の為に言い争う事じゃない。この子の為に……この子達の為にしっかりと愛情を注ぐ事だ。』と、思ったの。お父さんも同じように感じてたみたいよ。……これが、メグルが生まれて直ぐの〝変〟な話。」
「……メグルちゃんって、赤ちゃんの時から変な子だったんだ……。」
「ふふ。今でもとっても〝変〟な子だけどね。私達にとってはとてもかわいい子よ。」

「ねぇ……。メグルお姉様が変な赤ちゃんだったのは分かったけど……。赤ちゃんじゃない時は、どうだったの……？」
「……お姉様？」
「あ、気にしないで貰えると助かりますわ。フーラルが呼びたくて呼んでいるだけですの。」
「そう？メグルが呼ばさせてるとかではないのね？……じゃあ、話すわね。……あれは、1歳の事だったわ……。」
　その後、私が1歳の時からメチャクチャなトレーニングを積んでいた事、5歳の時には、まだ天才と言われていなかったミドリ姉さんと従姉のレイン姉には既にかなりの差で勝っていた事を話したらしい。
「「……。」」
「引いちゃった？私としてはこれからも仲良くして貰えると嬉しいのだけれど……。」
「……凄すぎ。」
「……逆に小さい時からそこまでのトレーニングしていたら、先輩らにはもう、勝てたって事か？……いや、無理だな。まず怪我する。」
「これは……僕が聞いていたよりも凄いな……。ミドリ先輩ですら負けているとは……。勝てないわけだ。」
「言っておくけど、メグルの真似なんか絶対にしてはいけないからね？母親としてじゃなくて、貴女達の先輩として言っておくわ。」
（コクコクコクコク……。）

……

　数十分後、母さんと私のクラスメート
「元気になったら、また会おうね。メグルちゃん。」
「伝えておくわ。……メグルが元気になったら、また一緒に遊んでちょうだいね。走るのが好きな子だし、何より、止めても絶対に〝無理〟なレースはするでしょうから。」
「メグルさんなら、やりかねませんわね……。」
「また、メグル君と戦える事を楽しみにしていますよ。その時はお母様を御誘いしますよ。」

「ええ。メグルの代わりにお願いしますね。……是非誘ってね。今まで全く誘ってくれてなかったからその件についてはかなり怒ってるから。」
「ふふ。元気になってから文句を言ってあげてくださいね。お母様。」

そうして、ロードと1年生のクラスメート達は帰っていったらしい。

……

そして、先生達、レースメンバーには『貴方方は悪くない。自分の体力に余裕を持たしていなかったメグルが悪い』と言って泣く先生やレースメンバー、謝り続ける人達を母さんがなだめ続けていたらしい。（母さん……強いな……。）

……

そして、今、ちょっと大変な事になってます。

はい、

母さん、

激おこプンプン状態です。

……

「メ～グ～ル～？なんでお母さんやお父さんをレース観戦させていなかったのかな？」（にっこり）
「え、えと～それは～」（タジタジ）
「レースする時ぐらいは言いなさいよ～？」
「ごめんなさい……。」
「……はぁ。寂しいじゃないの。子供の頑張る所、見たいって思うのが親ってものだと思うわよ？……元気になったら、またどうせ直ぐに

トレーニングやらレースやらするんだから、少しはお母さん達にも見せなさいよ？」
「はい……。（ごめん、止められるかと思ってたんだ……。）」

……

その後、２日経ってから私は退院した。
学校に行ってからは１年生ウマ娘達、５年生特進のクラスメートに出迎えられ、パパラッチは来なくなっていた。
私と、学校によって起こった事件はようやく終息を迎えたのだった。

……

実は、皆に伝えていなかったことがある。
それは、私が眠っていた時に、〝母さんは大きな声を出していない。〟って事だ。病院内では騒ぐなと言う人だ。確かに大きな声は出していないのだろう。

……では、一体、誰が私を起こしたのだろうか？

あと、前世の名前は時野巡ではない……はず。

巡は、合っているはずなのだ。だが、時野では無かった……と、思う。分からないのだ。自分の苗字が。もしかしたら、本当に時野なのかもしれないが、分からない。そうなれば、私の名前がそのまま今の名前になってるのだが、確認する手だてはない。

前世の記憶があまり残っていない。特に自分に直接附随する事が。それよりも、私の名前よりも、好きだった物事の方が印象深い。だからゲーム【ウマ娘】の記憶が大きく残っている。我ながら呆れてはいるが、何かの要因で死んだのにも関わらず、前世の記憶が少しでも残っているだけありがたいと思いたい。

16話　小学校の四天王

【6時　小学校】

前回のレースから5日経った日、私は小学校に帰って来た。

そして1年生の教室には誰も居ない。まぁ、上に書いてあるように単純に登校が早すぎるだけなのだが。

……実は、私は普段の登校時間が他人よりかなり早い。（小学生で6時は異常やとは思っているけど。）

これは前世の名残で小学生の時からそうだった。

前世の小学生の時から既に受験戦争に足を踏み入れ、中、高のどちらも敢えなく敗北。（高校は滑り止めに入った）

……非常につまらない時期だった。

少し前にも言ったが、【ウマ娘】にはまったのはそんなつまらない受験戦争の大学編になっていた時期の事で、出会えてからは灰色だった景色が色が付くぐらいに私は感銘を憶えていた。

ゲーム一つでここまで変わるものなのだなと今更ながら感心する。

少し話が脱線したが、登校時間が早いことで学校に来ても一人ぼっちなのだ。

前世の小学校では決まった時間に開門していたのだが、今の小学校では先生の内、誰かが来てから直ぐに開門されているので、私みたいな生徒には助かるのだ。

因みに母さん、父さんには了承済み。

何を言っても聞かないのなら、やれるだけやりなさいという、自由主義な思考の持ち主達だ。（単に言い聞かせるのを諦めただけ）

朝ごはんは自分で準備する時もあれば母さんや父さんが起きて作る時もある。

実を言うと、父さんの方が料理などの家事は上手い。

母さんのトレーナーだった時期のサポートの賜物だろう。

私は5時に起きては寝ぼけ顔で歯磨きをしながらシャツやスカートなどを着用し、身支度を整えた後はご飯を作るか、もしくは作って

もらったのを食べて、ランドセルを背負い、体操服２セットを肩にかけるなり、フックにかけるなりしてさっさと学校に向かうという訳だ。
（てか、男子目線から言わせてもらうけど、スカートって寒くね？伝統衣装とか知ってるから全く恥ずかしいとかは前世の時から思っていなかったけど、足とか寒く感じるんだよね。夏はアリだと思うけど。……慣れてないから？）

またまた話が脱線したが、
そんなわけで私はいつも、学校が開いている６時には着いており、何をするのかと言えば更衣室で体操服に着替えて、トレーニングコースでトレーニングをするだけのルーティンを学校でやるだけの事。
ざっくりとしたメニューは、アップで念入りの準備体操とトレーニングコース（約２４００ｍ）をジョギング１周。その後は日によって変わるが、１２００ｍを少し速めに走ったり、それの２倍、３倍と距離を増幅させてペースを一定に保つというのを数セットすることを主なメニューにしている。
私の適性にバランスを持たすためだ。
ダートのコースは無いため、そればかりは家に帰ってから土手で走るなどで賄っている。
１２００ｍの倍数３倍までのランニングそれぞれにダウンをしっかりと取り、それぞれの間で５分は確実に休憩を取る。
だが、今は病み上がりなので休憩間隔を１０分にし、いつもよりもペースをほんの少し落として走っている。
脚質についてもそれ専用のトレーニングを本来ならばやるが、今は控えている。
その代わりに自分でフォームチェックをする。
貸し出しているカメラを使って自分を撮影し、スパートやその前の姿勢を確認するのだ。無理の無い姿勢か。本気が出せる姿勢か。はたまた楽にスピードを出せる姿勢か。色々な事を考えながらフォームを確認しないといけない。レースの間（特にスパート時）に考え事

をしていると雑念のせいで疲れかねないので身体に憶えさせる。
ランニングトレーニングを一通り終えるとパワートレーニングのスクワットを５０回数セットをやっていくのだ。

……そんな事をやっていると７時なんてとっくに超えているのが日常茶飯事。始業は８時半だが、生徒達の平均的な登校時間は７時４５分。この学校では少し早めに登校する子が多いのだ。理由はその早めの登校をする多くの生徒がウマ娘科の生徒だからだ。私と同じようにトレーニングをしに来たり、軽いレースっぽいものをやってたりする。そうなると人が多くなるので私のような〝少し〟ハードなトレーニングはしづらくなるのだ。
人が多くなると私はさっさと戻って着替え、いつも持って帰ることすら忘れている宿題（一部例外）に手を付け、ちゃちゃっと終わらせる。その後は読書なり、賢さトレーニングの一人将棋なりするのだ。
まぁ、今は職員室に行って復活したことを報告するのだが。（職員室は緊急時を除いて７時半以降に生徒達が入室出来るようになる。）

そういうルーティンをこの前皆に話すと、「やりすぎ！」、「なんで身体が壊れてないの!?」、「何がそうさせるの？」「代わりに宿題やってよ……」だとか言われる。
出来るものは出来るのだ。それしか言えない。

……

【７時半　職員室】

さて、職員室に向かうと、やれ体調は大丈夫か。やれ無理はしないでくれ。など様々な事を言われる。レースに関しては学校の責任の範疇外だと私は勝手に思っているので、大丈夫。？問題（モーマンタイ）。（問題ない。）と、先生に会って言われる度に言っている。（たまに『大丈夫だ。問題ない。（キリッ）』と、言うのはご愛敬）
１年生ウマ娘科の担任に報告し、改めての謝罪と休みの間の宿題

（1年生と5年生特進）を受け取った。
……その課題も直ぐに終わるのだが。
……
【7時50分　教室】
あらかたの宿題を済ませ、将棋をパチパチ打ちながら最後の方に残しておいた宿題の算数プリントをやっていると、ようやくクラスメートが教室にやって来た。
「おはよ～。今日も一番乗……。あれ？メグルちゃん！退院したんだ！」
「おはよ。そう、昨日退院したんだ。」
「そうなんだ～。元気になってくれて良かった～。……でも、これで私の教室一番乗りは出来なくなっちゃうな……あはは……。」
「1年生にしては早いんじゃない？」
「メグルちゃんが言っても全く説得力無いよ……。」
「それもそっか。なら、私みたいに6時とかに来たら？」
「起きてないし、そもそもメグルちゃんはそのぐらいの時間に来てたんだ……。」
「まあね。鈍った身体を解すためにも軽い朝練は良いよ？」
「メグルちゃんの〝軽い〟は、私達にはかなりハードだからね？……でも、6時は無理にしろ頑張れば7時なら来れるかな……？」
「私は1人でも良いけど、7時45分までだったらトレーニングコースに居るよ。一緒にやりたいんだったら付き合うけど？」
「分かった。頑張って早起きして、7時に来るよ！」

その後、何分か経つとクラスメートが段々と増えてくる。そして、私に対して退院したことを喜んでくれたのだった。
私はこの前のレースで皆に〝本気〟の姿を見せていたので少し引かれているかと思ったが見た目そうでもなかったらしい。……念のために尋ねてみると、
「「引いてるよ？」」

「やっぱし？」
「最初からですわよ？逆に今更ですわ？」
「やっぱり？」
「お姉様が凄すぎるの……。でも、仲良くはしたいんだよ……？」
「分かってるよ。私だって皆とは仲良くしたいし、遊びたいもん。」
「……メグルが遊ぶ事ってあるのか？」
「あるよ！何を言ってるんだよ!?」
「……メグルちゃんって、皆と遊ぶのとか、まず遊ぶ事が嫌いなのかと思っていた……。」
「そんなこと無いよ……。」
「じゃあ、何の遊びを普段やっている？」
「えっと……。ちょっと待ってね……。」

……
3分後

「えっと……。ちょっと待ってね……。」
「ループしているぞ。」
「いや、有るから……ちょっと待って……中々頭にそれが浮かばないだけで……。」
「人はそれを〝知らない〟と言う。」
アイリスがジト目になりながら正論を言う。
「……カップラーメン出来たぞ～。」
ビクトがカップラーメンを幾つか作っていた。
「ん!?おい！なんで教室にカップ麺なんかあるんだ!?」
「持ってきたから。」
「お湯を沸かしたから。」
「食べたくなったからですわ。」
「3分だけ時間をくれたから。」
「あれ（9話）と混ぜるな……。そもそもどうやって湯を沸かしたんだ？」

「おいしい……。」
「食べている者が既に……。」
「朝ごはん……♪」
「先生もどうぞどうぞ。」
「先生もか!?」（食べていなかったのか!?）

……

「という訳で、学校にカップ麺を持ってきてはいけません。……。（ズゾッズゾゾー）」
「全く説得力がありません！」
「……今度から、カップ麺を持ってくる時は職員室に来なさい。お湯をあげます。」
「話が変わりまくるな……。」
「とりあえず、メグルさん、退院おめでとうございます。」
「ありがとうございます。……あ、今、思い出した。私、トランプタワーを作る事とか、ルービックキューブで遊んでいたんだった。」
「「……。」」（……それ、遊びなの？）
遊びです。

……

その後は普通に授業……だったと思うのだが、いつの間にか先生と一緒に教壇に立たされて、先生の助手みたいな感じで先生と一緒に皆に教えていた。（全範囲分かるから良いけどさ……。）
そのような感じで1～4時限の授業があり、それらの授業が終わって昼休憩になったので、以前と同じようにご飯を食べてから5年生特進のクラスに向かおうとしたのだが……。
「メグルさん。ちょっと、私に付いて来てくれる？」
「……？はい。分かりました。」

私は先生に呼び止められ、ある空き教室に連れてこられた。
「そこに座ってくれる？」
机と椅子がそこにあったので椅子に座る。
すると、先生が2枚の紙を机に置いた。
見ると、それは1年生用の小テストと白紙の紙だった。
「どうしたのですか？」
先生は少し申し訳なさそうな声で返事をする。
「……これよりも少し難度の高い問題を作りたいけど、相談に乗ってくれない？」
「はい？」

……結局話をまとめると、
小テストを作成する時に、添削、修正、テスト後の生徒の対処を生徒である私に今度から相談したいとのこと。
報酬としては1年生の体育の授業内であれば自由行動（つまりは勝手にトレーニングして良い）ということだった。
……別にそんな難しいものなのかね？と思いながら、まぁ、約1時間から2時間程、自分の考えているようなハードトレーニングが出来るのならそれでも良いやと思い、承諾したのだった。

……
話を終えた私は、心配しているであろう5年生特進のクラスメートのもと……5年生の教室に急いで向かうと、これまた入退院の事、レースの事から話が始まるのだった。
【5年生特進　教室】

「お帰り～。元気になった？」
「うん。心配かけた？」
「そりゃ心配するっしょ。私らには大差で勝ってると思ったらいつの間にかターフでぶっ倒れているんだから。心配だし、担架で運ばれて救急車に乗せられていくわで大目立ちだったよ。」

「お騒がせしました……。」
「……本当に速かった。バ場は稍重、レース中盤からはデバフスキルの雨が降り注ぐ中、よく加速したよ。……本当に心配したんだからね？」
　レイが少し鼻声になりながらそう言うと、他の3人も頷く。
「……まぁ、復活したんだったらそれで良いじゃねぇか。それよりもこれ。」
　そう言い、グローは何かが大量に詰まった紙袋を差し出してくる。
「全部、お前宛の謝罪文、お見舞い、そして宣戦布告だ。」
「こんなに……？ありがたいと思うべきなのか、皆を戦闘狂だと思うべきなのか……。」
「仕方がないだろ？お前はこの間のレースに勝ったんだから。……未だにいるぜ。年齢に囚われている奴、努力した時間が長ければ良いと思い込んでいる奴、現状の強さに溺れている奴。……小学生ですらそんな事を思っている奴らばかりなんだよ、ウマ娘科の生徒なんて。そんなとち狂った奴らばかりだ。俺らなんかもそれに当てはまる。……そんなとち狂った連中の……この学校のトップの内の1人がお前なんだよ。トップらしくその手紙の差出人達に〝おもてなし〟してあげろよ？」
「う、うん？」（トップ？）
「ま、今は体調、気にしいや。体が動かないのに負けても、勝ってもいい気にはならない。……早く戻せよ。」
　なんか……いつものグローらしくない。
　どうしたのかと尋ねても、
「気にすんな。それよりも早くそれらを捌け。」
　と、言われてそっぽを向かれた。

「因みに、さっきグローが言った【トップ】というのは、別名【芝の四天王】と言われているよ。生徒達だけで決める非公式なものなのだけれども、その【四天王】に選ばれている生徒は一番強いと言われ、その者らの特徴を踏まえた二つ名があるよ。」

（なんか、中二臭くなったな……。）
「四天王はこんな感じ。
短距離の王者、【驀進王】こと、サクラバクシンオー
マイルの王者、【極限（死）への誘い】こと、ナイツサイレンス
中距離の王者、【小さな巨人】こと、トキノメグル
長距離の王者、【訝る血】こと、ブラッドステイ
この４名が現在、この学校で各々の距離において一番強いと言われているよ。」

「えっと……私がそれに入っている理由は……」
「言っただろう？先のレースで君が一着だったからさ。」
「あれ、そんなに大きなレースだったの？というか、１つのレースに勝ったぐらいで……。」
「何て事を言うんだい!?王者と呼ばれる者が２人も出ているレースだよ？凄く大きいに決まっているさ！あと、以前の中距離の王者はブラッドステイ先輩だったからね。ブラッド先輩とサイレンス先輩はこの学校では異様な生徒で、各々が持つ理念から、特進にほぼ主席で入れるような成績を持ちながら敢えて進学コースを選んだという、中々に不思議な先輩方なんだ。……君はそんなブラッド先輩に勝ったんだ。ブラッド先輩も思うところがあったのか、レースが終わって直ぐに『中距離においては現状、彼女の方が強い。』と言ったからね。だから君に中距離王者の称号が移ったし、君の走りを認めたって事だよ。」
（ブラッド先輩、この学校においては所謂二冠だったのかよ……。通りで強いわけで。サイレンス先輩もえげつなかったし……。）
「はぁ……あと、なんで私が【小さな巨人】って言われてるの？」
「まぁ……本来ならば１年生の君だからね……。こうと言ってはなんだが、体格が他の上級生と比較してもかなり小さいだろう？それなのにも関わらず、王者を倒す実力を持っているわけだ。巨人のような力を持っている小人。言い換えれば、【小さな巨人】にならないかい？」
「あと、メグルが勝つ前の実況紹介でも言われてたしね。あん時の事

もあっての二つ名だと思うよ？」
「……恥ずかしいわ。」
私がそのようにこぼすとグローが近づいてきて、
「……よ、小さな巨人さん。」
と、絶対からかっていると分かるような笑顔で、小声で言ってきたのだった。
「からかわないでよ……。」
「王者様もこんな表情を見せるんだなぁ？」
……と、笑いながら教室から出ていきやがった。

その後は、ロードに私が休んでいた期間の授業の内容を念のために聞いたり、休んでいた時に学校であった事を聞いたりするなどの普通の女子生徒がやるような話をして残った昼休憩の時間を潰した。

……そして、昼休憩のチャイムが鳴ったと同時に、私は先生に呼び止められたりだとか、5年生の教室に急いで行って皆に自分の報告をしていたせいで、昼食を取るのを忘れていることに気がつくのだった。（まぁ、トースト1枚で何とかなるから別に良いかもだけど……。）

17話　駿川家の買い物

どうも、トキノメグルです。
入院してから1週間。つまり、『お前が四天王だ！』的な事を言われてから2日かな？
徐々に体力は回復し、今はほとんどの体力が戻ってきました。
まぁ、入院期間が短かったんでそんなに落としてはなかったんですけどね。

早速ですが、困ってるんです。
マジで助けてください。
事の詳細を説明するために、時間を巻き戻しますね？

……え？なんでそんなこと出来るのか、だって？

だから言っているじゃないか、モルモット君。
私は『トキノメグル』。
輪廻転生をも操る事が出来ない私だからに決まっているじゃないか!?
はっはっはっは!!

……出来ないって言っています。誤字じゃありません。記憶を辿るだけだから。

……

【7時　土手】

いつも通りに5時には起き、朝ごはんを作って、食べてから、トレーニングジャージに着替えて、土手を走ってたんです。
学校ではダートコースが無いため、こうやって土手を走ることは私にとって大事な事なんですよ。

んで、土手を何周か、それを何セットかやってると、割と直ぐに7時とか来るんです。
毎回、良い汗かいたなぁ。とか、思いながら帰宅するんですけど、今朝は違っていて……。
「……ふぅ。よし。そろそろ引き上げるか……うん？」
帰ろうとしたら私の後ろの方からドドドドド……。という、なんか凄く不気味な音が聞こえまして……。見ると、なんか既視感のある大きな砂煙がこちらに向かってきていたんです。
それを見て、私は直ぐに逃げようと思いましたよ。
階段を降りて、歩道と車道の間にあるウマ娘専用レーンを走っていたんです。
（ここの法定速度は時速４０キロ……。それを超えると普通に危険だからね。まあ、階段を降りている時点で大丈夫だとは思うけど……ん!?）
振り向くと、ちゃっかり階段を降りてきていたんです。砂煙が。
そして、私がいるウマ娘専用レーン上を走るようにこちらに向かってきていたんです。
（マジ……？）
私は法定速度ギリギリで走っていました。しかし、振り切ることは出来ません。
（ウマ娘専用時速計の表示いっぱい……これ以上はアウトなんだけど……。）
そう思いながら、少し速くしようかと思っていた時でした。
「待ちなさい！メグル！」
すんごく聞き覚えのある声が。

「……しゃべったぁぁぁぁぁ!!」
「ハッ○ーセット!?って、違う！私よ！」
「私私詐欺ですか？」
「もう！いじわる！ミドリよ！」
「え？ミドリ姉さんって、砂煙だっけ？」
「こら！土手を全力疾走していたら砂が私の周りに舞っていただけよ!?」

……砂煙の正体はミドリ姉さんでした。

えーミドリさん曰く、何か今日は出掛けたい気分になったし、まだトレーナーが決まらないので、暇だから来ちゃった☆
だそうです。

あれ？【ウマ娘】って6月のメイクデビューどころか、入学して直ぐにトレーナー決まってない？
……ということは、モブ娘（私）目線から言わせて貰えば、天才（オリジナル）優遇制度ということか？

まぁ、そんな事は今は置いといて、いつも何かしら一緒にいるレイン姉もミドリ姉さんと話している間に来たのだった。

「久しぶり……メグル。」
なんかやつれていた。
「3、4ヵ月ぶり？……どったん？トレセン学園でなんか変なものでも食べた？」
「いや……食べてないけど……。中央ってやっぱ凄いって思って……。私ら東京の小学校ウマ娘科で割と上張っていたんだけど、それでも普通に超えられてるの。……メイクデビュー、しっかり勝てるかな？」
「努力次第だと思うよ？」

「伯母さんと全く同じ事を言わないでよ……。」
「……〝たづなさん〟ね？」

は！そうだった……。という風にレイン姉の顔が少し青くなる。
……何かあったのだろうか？

「ま、とりあえず家戻ろう？ママ達に会いたいし。」
ミドリ姉さんの発言により、早速家に帰ることになった。

……

【7時30分　実家】
「ママ～！パパ～！ただいま！」
「あれ？ミドリ。どうしたの？とりあえずお帰り。あら、レインちゃんも。いらっしゃい。メグルもお帰り。」
「お邪魔しま～す。」
「たらいや～。」

……

ミドリ姉さんが外出届を提出して今日は休むということを決めたと両親に宣言した。

「という訳で暇！」
「トレーニングしたら？」
「いつもと変わらないじゃん。そんな毎日は無理だよ。」
「ここに毎日休まず、止めろと言っても聞かない天才（バカ）は居るけどなｗ」
「そういえば居たわ。」

おい、皆よ。こっちを見るんじゃない。

「……暇なのは変わらないから、たまには買い物行きたいの！という

訳でママ！４人で買い物行こうよ！」
「たまには良いかもね。」
「決まり！それじゃあ、準備できたら行こう！」
そう言って、姉さんは直ぐに自分の用事を作った。
私には関係ない話なので、今日の昼御飯とトレーニングの内容を考える。
「……そんじゃ、私は家で留守番してるから、４人で行ってきて。」
そう言うと、姉さんがポカンとした表情になった。
「何言ってるの？メグルも行くんだよ？パパがお留守番だよ？」
「え？私（俺）、留守番じゃないの!?（留守番なのか!?）」
父さんはもう既に外出用の格好になっていた。

「だって、女の子だけで買い物したかったから……。」
「ショッキング……！」
父さんは盛大に落ち込んでしまった。

その後、父さんが膝をついてまで姉さんに行きたいとオーバーに頼み込み、父さんまでついてくる事が決定したのだった。

「やたー!!!」
「子供かよ……。」

……

【ショッピングモール】

父さんがいるので、今回の外出は電車で来た。
……これは前世の影響なのだが、東京、路線が複雑過ぎ。
慣れたら普通になるのだろうけど、私は前世の時には東京に住んでいたわけじゃなかったと思うので、慣れていないのだ。
更にこの体になってからは父さんがいる時以外には、走れば良かったので公共交通機関をあまり利用していなかった。

それのせいもあるのか私もかなり危なかったが、ミドリ姉さんが何回か道を間違えていた。
閑話休題。

そして着いたと思ったら、私は元気が余りある姉さん達に引きずられながらモールの中に連れていかれるのだった。

……

「とりあえず、貴女達が見たいものは何？」
「私は服とかアクセかな？」
「私は靴です。」
「丈夫な靴と蹄鉄、大量の本。」
「メグルは子供らしくないわね……。分かっていたけど。」

子供達の要望を聞いた母さんは最初にレイン姉と私が求める靴を売っている専門店に向かった。

……

【スポーツ靴専門店】

「えっと……私が欲しいのは中距離用だから……。」
「メイクデビューは中距離で申し込むの？」
「はい。中距離から長距離が得意って事がもう分かっているので。」
「そうねぇ。ここらのとかどう？少し丈夫さには欠けるけど靴のしなり具合や通気性はあると思うわよ。」
「そうですね。レース用なのでこのぐらいが良いのかもしれません。」
「こっちも良いわね。レースに出るんだからデザインや配色も拘った方が良いわね。」
「確かにかわいいです！……これにしようかな……？でも壊したくはないなぁ……。う～ん……。」
「靴は壊してなんぼが私のモットーだったからね。お父さんの財布を空にすることが多かったなぁ。」

「壊してなんぼ……ですか？そういうものになるんですかね……？実際どうだったんですか？」
「そのまんまだったよ。良い思い出だったな……給料前にフツーに高額な買い物させられ、俺はもやし生活になるんだから。……その分頑張って貰ったけどね。メグルも好きなの選んで良いよ。」
「分かった。」
レイン姉は母さんのアドバイスを受けながら軽くて走りやすい、そして見た目が良い靴を選んでいく。
私はというと、とにかく丈夫、靴のしなり、走りやすさ、手入れのしやすさで選んでいった結果。
……サイズがありませんでした。
見た目はどうでも良いんです。私は。
どんなごつくても、真っ黒でも。
なので、サイズ特注しました。
あとは蹄鉄……それはありました。

「えっと、中距離レース用靴と特注の靴、蹄鉄の３点で……」
「そういえば、お金……。」
ごそごそと鞄の中にある財布を探すレイン姉。
それを見て彼女の前に手を出したのは、父さんだった。
「俺が払うから大丈夫。」
「でも、値段が……。」
「大丈夫。」
自分のクレジットカードを見せ、レイン姉に笑いかけていた。

「……３６，５２０円です。」
「……え？」
父さんの笑顔が固まった。
その後はクレジットカードで支払い、レシートを貰うと……。

「えと……内訳は？」

……
領収書
中距離レース用靴○○　▪８，８００
特注トレーニング用靴　▪２６，４００
鉄製蹄鉄　▪１，３２０
合計　▪３６，５２０
（内消費税等　▪３，３２０）
……
「メグルさんや……高いっす……。」
「ごめんち☆（テヘッ）」
「普通のお店でここまで高くなるのはあまり無いのに……。」
「まぁまぁ、既に買っちゃったし。後は届くのを待つだけだから。次は本屋にする？服屋にする？それとも……」
「アクセサリー買いたいなぁ～。」
「じゃあ、あのお店に行こう？」
「……。」
そう言って、耳飾りや頭飾りを売っている店に行くことになったのだった。

……
【アクセサリー専門店】
ウマ娘にはある性格がある。
それは、自分のどちらの耳に耳飾りをつけるかというものだ。
ウマ娘のほとんどは耳飾りを好み、どちらの耳に付けるか、又はどちらの耳に重点的に飾りを付けるかという人が多いのだ。（これは実際の馬のある特徴に由来するのだが。）
学校でも外でもウマ娘を見ると、ほぼ全員が付けており、なかなか洒落ている。
私は今までそんなオシャレとかに対して興味が無かったので付けていなかったのだが、こういう店に来たからには私も選んでみようと

思う。
因みにミドリ姉さんは右耳に。レイン姉と母さんは左耳に付けるのが好きらしい。
「これとか……どうかな？メグル？」
「良いと思うよ？姉さんは緑色が似合うし。」
ミドリ姉さんは金色と緑色が上手いこと混ざっている少し長めのリボンを選んできた。
フツーに可愛い。
横ではレイン姉が母さんに耳飾りを見せて尋ねていた。
どうやら水色の少し大きい玉が付いた大人しい耳飾りを選んでいたようだ。

私も少し店内を物色する。
そして、気になるものを見つけた。

銀色のリングに雫の形の黒い光沢がある石が埋め込められているものだった。
その石は普通に見ると、吸い込まれるかのような漆黒の色をしており、向きを傾けると深い青みが出てきて、それが強く光るかのような、まるで夜を表しているような綺麗なものだった。
まぁ、私には特に夜は関係ないはずなのだが、綺麗なのでとりあえず右耳に付けてみた。

……
「普通に綺麗だな……。」
鏡の前で自分の右耳を確認する。ショートヘアーの黒髪の上にリングがキラリと大人しめに主張し、石が髪の間からチラリと見えた時に静かに且つ強く主張するこの耳飾りは自分で思うに非常に似合っていた。

「お客さん、その商品がお好みですか？」
鏡を見て、少し惚けている所にウマ娘の店員がやって来て尋ねてきた。
「あ……ごめんなさい。勝手に付けてしまって。」
「いえいえ。ここの店は試着は大丈夫ですよ。……しかし、その耳飾りは凄くお似合いですね。」
「ありがとうございます。」
「そのリングに埋め込まれているのは、ブラックラブラドライトという石なんです。一種のパワーストーンとして知られている石なんですよ。」
「へぇ……パワーストーン……意味とかあるんですか？」
「ありますよ。その石の意味は様々なものがありますが、大きく言われるのは『自由』です。……何かしようと思われたりするのを後押ししたり、限界を超えさせる……そのような意味を持ち合わせていると言われていますよ。」

『自由』……ね。

そのような感じで店員と話したり、考え耽っていたりしていると、姉さん達がやって来た。
「メグル！何か良いもの見つかった？」
「あ、うん。これとか……どう？」
そう言って少し遠慮がちに自分の右耳を見せる。
「……スッゴく綺麗！似合うよ！」
「あ、ありがとう……。」
「メグルもアクセサリー選ぶような女の子だったのね。興味無いとか思っていたけど、女の子らしい所もあるじゃない。」
「私だって、女の子だもん……。」（前世は男だったけど……。）
「という訳で任せた。お父さん。」
「娘達の為にも……良いところ見せないとな……？（キリッ）」
そう言って、またクレジットカードを取り出し、レジに向かって

いった。
（あれ、私の耳飾り……いくらだっけ？）
……
その後、震える様子で父さんは帰って来て、領収書を見せてきた。
……
領収書
３点
合計　▪１８，７００
……
合計金額の内、約１万円は私の耳飾りだそうで……。どうやら１点ものだったみたいでした。
ゴチになりやーす！
「靴といい、耳飾りといい、大事にしてくれよ！頼むから！」
「う、うん。耳飾りは当たり前だし、靴も使いまくるからね？」
「……靴も大事に……ね？」
その後は私と半泣きの父さんは引きずられながら服屋に連れられるのだった。
……
【ウマ娘用服専門店】
助けてください。
……やっと時間が戻ってきましたね。
今、私、
着せかえ人形状態です。
試着室の前でミドリ姉さんと母さんが私の服の事について言い争っております。

その様子を見て、父さんは既に疲れきっており、レイン姉は買ってきたお茶を父さんに差し出して、少し焦っておられます。

「だから！たまにはメグルにドレスチックな服を着せたいの！フリフリの可愛い奴！」

「何を言っているの！メグルにそんなもの似合うわけ無いでしょ！普通の洋服で良いわよ！」

「ムー!!じゃあ、これ！ダメパン!!カッコいいでしょ！似合うでしょ！」

「あの子は服ですら直ぐに壊しかねないの!!そんなズボンは直ぐに破れるし、普通ので直ぐにダメージになるわ！だったら普通のジーンズで良いです！」

「肩出し！」

「寒い！」

「マフラー！」

「熱い！」

「ヘッドホン風髪止め！」

「絶対にいらない!!」

「……ニンジンTシャツ」

「それで。」

母さん……まともな事を言ってると思ったらニンジンまるごと1本がデカデカとプリントされたTシャツを選んだよ……。

結局、自分で決めるという事にさせ、無地の白シャツと紺ジーンズ、黒いロングカーディガンを選んだ。

皆からは「普通。」と、お褒めいただいた。

だって、前世ではこんな服しか着なかったもん。服には興味無かったもん。いや、拘ってこういう無地なものしか選んでなかったもん。

そして父さんからは、「安い……。」

と、泣かれた。

私たちは3店舗も回り、来月に来る請求書が恐ろしくなったので帰ることになった。

「いやー楽しかった！買い物はやっぱ良いよね！」
「うん。靴も買えたし……本当に、ありがとうございます！」
「どういたしまして。大人がいるのに子供にお金は出させたくないもの。」
「疲れた……。」
「請求書……。」

と、各々が満足？した気持ちで電車で帰路についた。（姉さんとレイン姉は途中で別れた。）

そして、家に着くと、私はあることを思い出す。

……あれ？本買ってないじゃん。

と。

１８話　前期実技テスト【ＪＡＰＡＮ　ＮＯＺＡＮＳＨＯ　ＣＵＰ】

どうも、トキノメグルです。
買い物行ってから数日後にあの靴が届きました。
子供用の小さめの靴なのですが、ごつくて真っ黒の丈夫でよくしなる靴が出来ました。
まあ、これはあくまでトレーニング用なのですが、私は別に普段使い兼用でも良いなと思うような良い靴です。
とりあえずその靴を慣らすために今日は元の４時に起きて、学校へ行く準備をし、右耳に耳飾りを付け、朝ごはんを作って食べて、置き手紙をしてから学校へ行きました。
……
【４時半　家】
「……。」
ダイヤは黙ったまま、リビングのテーブルにある１枚の紙を取り上げてそこに書かれてある短い文を見る。
……
靴慣らす為に学校へ行ってるよ。
ｂｙメグル
……
「……。二度寝して良い？」
……
【４時４５分　小学校正門前】
流石に小学校の正門はまだ開いていないので、正門の前に鞄類を置き、ほとんどいない人の目を気にしながら制服を脱いで、既に着ていた体操服を晒す。
準備運動をし、体を少し柔らかくする。
そして、例のウマ娘専用レーンに向かい、まずはジョギングをする。

（……うん。靴は流石にまだ走りにくいけど、重い蹄鉄のお陰か力は入れやすいかな……。アルミ合金だと軽いからトレーニング用で継続的に使っていると壊しかねないし……。靴も慣れたら凄く扱いやすくなるな……。）

何分かジョギングをしていると、前方や横を確認した上で少しずつ加速させていく。

法定速度を意識しながら靴と足を慣らしていく。

（……加速時、直線はクリア。もう少し早めのペースとかコーナーは学校内でだな。……次は長距離。疲労対策だ。学校からは離れるが往復１０キロぐらいならいけるだろう。）

そう言って、ジョギングのようなスピードに戻し、道路標識を確認しながら今いる地点から５キロ離れた所を目指す。

……

そのようなトレーニングをこなして往復１０キロを走ってきたメグルは学校に急いで戻り、先生に見つからない内に体操服の上から制服を着るのだった。

……

【５時４０分　小学校正門前】

「……。」

いつもよりも早くに登校（出勤）してきた先生は眼を丸くしていた。

（メグルさんは一体、何時からこの学校に来ているんだ!?）

そう思いつつ、道路側で、早く早く鍵開けてと目が訴えているメグルを横目に小学校の正門の鍵を開けるのだった。

……

【７時　トレーニングコース】

（よっしゃ。一通りの朝練終了。）

いつもよりも多めの朝のトレーニングをこなしたメグルは水筒のスポドリを飲みながら休憩を取っていた。

そこにあるウマ娘がメグル目掛けてやって来た。

「……メグルちゃん！おはよ～！」
そうメグルを呼ぶ彼女、栃栗毛（茶色）の元気な1年生ウマ娘だった。
「おはよ。シャイン。」
彼女は、シャイニングバーン。
つい最近、朝7時から私と共にトレーニングするようになったウマ娘だ。
名前は非常に強そうである。
……
「……よし、頑張るぞ～。」
準備体操を終えたシャインはメグルの近くで張り切っている。
「じゃあ、今日はトレーニングコースを1周半、まずはアップから始めよう。その後に30分程のメニューを考えているからそれをこなそう。」
「うん！じゃあ走ってくるね！」
「私も行くよ。速すぎちゃダメだからね。」
「OK！」
そして、私とシャインは少し遅めのペースで3600mを走っていく。

……
実は彼女、シャイニングバーンには私（前世）にとって大きな関係性がある。
それは、現在トレセン学園中等部（多分）、天才（オリジナル）であるミホノブルボンの従妹だったのだ。
最近この事をシャインから伝えられ、非常に驚いた。
……そのせいなのかは分からないが、ミホノブルボンが〝あれ〟な事と自分の名前より、シャインはある影響を強く受けている。

ガ○ダム。

ミホノブルボンの親戚の子供達は何故かは本当に分からないが、ガ○ダムの影響を受けており、特にシャインとその姉妹はGガンの影響がある……らしい。

そして、これも何故かは分からないのだが、既にシャインは才能開花をしており、1年生でありながら固有スキル（Ｌｖ．１）を既に発動可能という、非常に優秀な娘だった。

本当に凄いよね。羨ましいよ。

※トキノメグルは1年生で既に固有スキル（Ｌｖ．２）が発動可能です。

……

【7時４０分　トレーニングコース】

アップをし、３０分まではフォームチェックを。４０分までは直線用のスパートを長くかけ続ける特訓をしていた。私にとっては普通のトレーニングだったが、シャインは一通り終えると、倒れるように芝の上で仰向けになり、疲労困憊した自分の身体を休ませようと必死になっていた。

因みにスパート練習はこんな感じだった。

「はい、頑張れ！コーナーから最終直線に入るとき、抜かすって気持ち、大事だよ!!」

「うん！」

……

「ほらほら！遅くなってる！バテるな!!」

「ぜぇ……はぁ……はぁあああ!!!」

……

……

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……はぁ……」
「お疲れ。息を整えたら、スポドリ飲んで。予備あるから。」
そう言って、シャインの横に家から持ってきていたスポドリを横に置く。
シャインは置かれたドリンクに手を伸ばし、苦しそうにしながら中の液体を身体に取り込んでいった。
「はぁ……はぁ……はぁーーー……。けほっけほっ……ふぅ……ようやく落ち着いたよ。ドリンクありがとう。」
「フォームもだいぶ綺麗になっていたし、スパートも上出来。1年生でこれなら普通に強いよ。というか、下手な3、4年より強くなるなこりゃ。才能あるし。」
「……メグルちゃんに言われても……まぁ、ありがとう。」
「私みたいに飛び級出来るんじゃない？」
「無理無理!!私はメグルちゃんみたいに強くないし、賢くもないよ!!」
「分っかんないよ～？もしかしたら、私、弱いかも……？」
「いや、冗談であっても性格悪いよ？」
ジト目で私を見つめてきて、少し低い声で言われた。

ごめんて。

7時半を過ぎるとウマ娘の生徒がチラホラとやって来る。
私達は更衣室に戻り、着替えて教室に向かった。

……

【8時半　教室】
始業のチャイムが鳴り、今日の学校が始まる。
「起立！……気を付け、礼。……着席！」
そうそう。言ってなかったが、このクラスの学級委員はエミリアになった。
勿論、私を推薦する者はいたが（というか私以外全員だった）、私は断固として拒否し、それならばと挙手をしたのがエミリアだった。

いやーホント、頼りになりますね。さっすが、お姉ちゃん。

……

挨拶を済ませ、先生による朝礼が始まった。

「……今日は皆さんに大切なお知らせがあります。1週間後、1学期実技テストを行います。実技テストの内容はいたってシンプル。レースをするということだけです。」

クラスがざわめきだす。初めての実技テストは彼女らには不安要素となるのだろう。しかし、テストに対して不安な気持ちはあってもレース自体は楽しみなようで怖がっているクラスメートはあまりいなかった。

「テストでは距離を2種目に分けて行います。皆さんはその内の1種目に参加してもらいます。内容は通常レース、距離選択です。ただし、希望があれば2種目のレースの参加を認め、得点が高いものを点数とします。」

……これはあれかな？

私、全部出ても良い奴かな？

そう思い、手を挙げると……

「特例でメグルさんだけは、1年生のテストは満点にしますので、5年生のテストを受けてください。1年生のテストの時には〝ちょっと〟手伝ってもらいます。」

「……あたしも出たいなぁ。（うるうる）」

「既に6年生に勝っていて且つ全部の種目で満点を軽く叩き出せそうなウマ娘が何を言っているのですか？」

「ごめんなさい。」

周りの皆から「ほっ……」と言われ胸を撫で下ろされていた。

そんな皆怯えないで？私だって皆と一緒に走りたかっただけだもん。ね？

……

1週間後！

という訳で、なんやかんや在りましてレース当日（低学年の部のみ）。
この実技テストは3日間にかけて行われ、学年を低学年、中学年、高学年に分けてレースを行います。
前に先生が言った通り、1年生では適性の関係から2種目。短距離とマイルだけです。レース形式は個人戦のみとなっています。
……スッゴく理不尽だけど、今回はマイルの第11レースだけ紹介するよ！（理由は分かりやすいクラスメートが多かったから）
「「ふざけるな!!、私ら短距離での出走なんだぞ!!、しっかりと紹介しろ!!!」」
ビクトとアイリスが叫ぶように訴えてきた。
彼女らは短距離のレースに出るため、今回は紹介されないのだ！
ごめんね。大人の事情なんだって。（便利な言葉だね。）

……

【G1】【JAPAN　NOZANSHO　CUP】【東京　芝　マイル（1600m）晴　良　左】
（実況　トキノメグル）
（解説　1年生学年主任）
（スターター　教頭）
（ゲート　1年生ウマ娘科担任）
（判定　5年生学年主任）

出走者

1　キンシャリガール　先行　↑?○好　調○　2　チョクセンソウチョー　先行　??･･･絶好調　3　フーラルレッド　差し　??･･･絶不調　4　ハリウッドセダン　差し　??○普　通○　5　アイネクライト　逃げ　↑?○好　調○　6　ニンジャシューター　差し　??○普　通○　7　シャイニングバーン　先行　↑?○好　調○　8　エミリアレッド　差し　??･･･絶好調　9　ハリコエレジー　追込　↘?○不　調○

……

（実況　トキノメグル）

私立濃山小学校、レースコース、第１１Ｒ（レース）第１回ＪＡＰＡＮ　ＮＯＺＡＮＳＨＯ　ＣＵＰ

全生徒が待ちに待った真の低学年１位決定戦

くじ引きで決まった９人のウマ娘達が遂に出走を迎えます

このレースで１番強いウマ娘は誰なのか

ここ、レースコースの観客席には２０００人の観衆（生徒達）が詰めかけ、その歴史ある？瞬間を固唾を飲んで待っています

それでは、出走ウマ娘の紹介です

１番、キンシャリガール、２年

無敗で濃山賞二冠を達成したウマ娘

見よう見まねのスシ食いねえ（スシウォーク）で三冠を狙います

２番、チョクセンソウチョー、２年

独自の無い胸に巻いたサラシと風紀委員長（竹のお方）が持ってきそうな竹刀

が自前の勝負服になっている、実力ある？ウマ娘です
口癖の天上天下唯我独尊がどんな意味か全く分かっていません

３番、フーラルレッド、１年
知らない人達に囲まれ、隣には巨人、もう片方には不良
そんな状況のせいで既に絶不調のウマ娘
姉の怒りが恐い、皆の嘲笑が恐い、早く帰って録り溜めしているウマレンジャーが見たい

４番、ハリウッドセダン、２年
２年生なのに６年生かと間違えそうな高身長、羨ましい
何故かチキン料理を酷く好んでいるウマ娘です、コケコッコー

５番、アイネクライト、１年
ウマ娘科１年生クラスでの和まし担当
勉強は苦手ですが、足には自信がある素直なウマ娘です

６番、ニンジャシューター、２年
２年生ウマ娘の隠れた逸材、ダークウマ娘
得意の気配隠しで相手に意表を突けるか
趣味は暗号製作

７番、シャニイングバーン、１年
親戚総出の趣味、ガ〇ダム
自分もめちゃくちゃに影響を受けているウマ娘
姉のトレーナー（マスター）からの修行は生かせるか
見よ、東方は赤く燃えている！

８番、エミリアレッド、１年
このテストを楽しみにしまくっていたウマ娘科１年生の学級委員
フランを泣かせた奴はぶっ倒す

レースに勝利して、帰ってから直ぐに半熟卵をかけた納豆ご飯が食べたい

９番、ハリコエレジー、２年
毎回のレースで惨敗を繰り返すウマ娘
勝負服は頼んだのにまだ届かず、急いでこしらえた継ぎ接ぎの衣装
借りようとしても全部自分に似合わなかった
第３コーナーは大っ嫌い

また、今回のレースは皆、勝負服を借りているか、自前のを持ってきています。
バフ効果は無いようです。
……
（ファンファーレ♪）
今回は、９人中、４人が初参戦
一番人気、２番チョクセンソウチョー
二番人気はテストの王者、１番キンシャリガール
そして、私が注目しているのは、７番シャイニングバーンです

ゲートイン完了、態勢完了

……

スタート！
各ウマ娘、揃って飛び出します！
まず先頭に躍り出たのは、５番アイネクライト
元気いっぱい、ウマ娘
初めてのテストだ１年生
２年生相手に大きく離す
続いて、１番キンシャリガール

何故か既視感がある
どこで見たことがあるのやら
あとは何故だが、ほんのり酢の香り……
それを見るように、２番チョクセンソウチョー
総長と番長の違いは分からない
バトン代わりの竹刀、何の為にあるのか
やや遅れて、赤く燃える、７番シャイニングバーン
赤いハチマキが目立つ
しかし、それよりもマスターとは誰なのか
外には、４番手、暗号で書かれたお見舞いの手紙、６番ニンジャシューター
忍装束もどきは走りやすい
煙玉は1日3個まで
続いて、お姉様、８番エミリアレッド
ソウチョーに目を付けた！
不良にケンカを売る気だ！
後ろ、大きすぎる！４番ハリウッドセダン
エミリア、逃げる、怯えているぞ！
背が高いのは怖かった！
ケンカは売れなかった！
直ぐ後ろ、３番フーラルレッド
セダンが高過ぎて前が見えない
お姉様の怯えた様子も全く見えない
大きく遅れて最後尾、我らがハリコ、９番ハリコエレジー
作った衣装の下には体操服
破れても、わぁお、あんし～ん！

さあ、混戦模様のＪＡＰＡＮ　ＮＯＺＡＮＳＨＯ　ＣＵＰ
各ウマ娘、３コーナーを回る！

『『『曲がれ!!!曲がれえええええええ!!!!!!!!』』』

おっと、ハリコエレジー！
曲がれない！大きく転倒！【コーナー巧者？】!!
そんなスキル、在ってたまるか!!!
さあ、３コーナーから４コーナーに差し掛かる
先頭は切り替わって、キンシャリガール
続いて、チョクセンソウチョー、上がってくる
３番手、アイネクライト、先輩達に追いつこうと必死
その後ろ、シャイニングバーン、表情が読めない
外から、ニンジャシューター、大きく回る！
後ろ、エミリアレッド、セダンが怖すぎる
２バ身差、フーラルレッド、セダンに前を譲ってもらった
それを見るように、ハリウッドセダン、コーナーは得意！
ものスッゴく遅れて、ハリコエレジー
破れた衣装、体操服が丸見えだ！

残り、４００!!!

シャイン（……!!!）
おっと、ここでシャイニングバーン!!!腕を大きく上げた!!!
走りにくくないのか!?
そして……？
指パッチン!!!?
コース内全域にフィンガースナップの音が大きく響く!!!
何故、響く!?
そして、瞬間的に観客席とシャインから聞こえるは……
「ガ○ッダーーーム!!!」
何故、知っている!!?
しかし、順番が逆だ!!!
……

『私のこの足が光って唸る！お前らを倒せと輝き叫ぶ！』
【必殺！シャイニング・レッグ!!!　Ｌｖ．１】

……

シャイニングバーン！一気に加速！足が何故か光っていて眩しい!!!
おっと!?フーラルレッド！一気に速度が上がった!!!
やる気が絶好調!!!レース中に変わるってありなのか!?
キンシャリガール！欽ちゃん走り！
それでも速度が落ちない!?
チョクセンソウチョー、蛇行!!?
ワケワカンナイヨー!!!
最後は４人の対決!!!
シャニイング、キンシャリ、先頭を争っている！
直ぐ後ろ、ソウチョー、フーラル!!!
いや、シャイニング！上がる！
抜けるか!?
抜いた!!
そのまま……!?
シャイニングレーーーーッグ!!!
フィニッシュ!!!
悪は許さない！
シャイニングバーン、初参戦、Ｇ（ガンダムファイト）１で勝利!!!
マスターからの修行は生かせた！
だから台湾人のマスターとは誰なのか？

……
……

……

東　１１　：Ｒ：　京　１６００　：ｍ：　確　定

Ⅰ　７　／／／／　／／　１／２　Ⅱ　１　／／／／／／／／　１／４　Ⅲ　３　／／／／　／／／／　アタマ　Ⅳ　２　／／／／　／／／／　１　Ⅴ　４　／／／／．

．／芝／　○良○　．ダート　．良．

．タイム　１：４３．２　レコード

……

確定しました

１着、７番シャイニングバーン

２着には、１番キンシャリガールが入りました

ＪＡＰＡＮ　ＮＯＺＡＮＳＨＯ　ＣＵＰ、実況はトキノメグル

またお会いしましょう

『ネタの盛り合わせ』

１９話　変態と王者と怪奇

どうも、トキノメグルです。
今日は前期実技テストの３日目（高学年の部）なんですが、その話に行く前に少し別の話をさせてくださいね。
少し前に私ら家族（親戚含む）で買い物に行っていた時がありましたよね。
その時に、ミドリ姉さんが、まだトレーナー決まらないの。というような事を言っていたと思います。
んで、自分も忘れていたのですが、ゲーム版ではメイクデビュードころか【育成】が始まる所からトレーナーとのトレーニング生活が始まるんですけど、アニメ版とかだとデビューよりも前に【選抜レース】ってものがあるんですよ。
そして、レイン姉が、中央だと色々な娘が強くて自分達が霞むとかそんな感じの事を言っていましたよね。
それ、３月にあった【選抜レース】に負けた（入賞も出来なかった）からそんな事を言っていたんですよね……。
実は【選抜レース】ってものは、トレセン学園で年に４回行われる大規模なレースで、担当トレーナーが決まっていないウマ娘が主に参加するビックイベントなんですよ。
そのイベントは、３月、６月、９月、１２月にあり、そこで結果を出したウマ娘はトレーナーからスカウトされる可能性が高くなります。
入学する時点で既に注目されている一部の天才のウマ娘達は入学して直ぐにスカウトされることもあるらしいです。
……あと、何で担当トレーナーをつける必要があるかと言うと、担当がつかないと【トゥインクル・シリーズ】に参加できないんすよ。（マジでこれがしんどい。）
【トゥインクル・シリーズ】ってのは、中央トレセン学園に在籍している生徒にとっては【選抜レース】の次にやって来るとても大きな目標、壁となるイベント且つエンターテイメントで、注目されるレースやウ

マ娘にはメディアに取り上げられます。
（これが、めちゃんこ人気でして、ウマ娘達はここで人気を得てアイドル化するんですよ。だから【ウイナーズ・サークル】やら【ウイニングライブ】があるんです。マジで大変そうやけど。）
【トゥインクル・シリーズ】に参加する事になったウマ娘達は各々のトレーナーと協力して自分の目標を達成していきます。
そして、数々の高い試練（目標）を乗り越え、３年間の特訓を積んだ優秀なウマ娘同士で最高のレースが行われる、【ＵＲＡファナルズ】や【ドリームトロフィーリーグ】を目指し、ウマ娘達は努力し続けます。

ウマ娘達のトレセン学園での生活や理想とされる生活は軽く言えばこんな感じですね。
今まで言っていなかったので、ごめんなさい。
何でこの事を今頃言ったかと言うと、前期実技テスト（低学年の部）があった日の夜に母さんから自分の過去の話を聞かされたんです。その話を聞いて思い出したんですよ。

……？……

【夜　家】
たまに父さんは仕事で夜遅くまで家に帰らないことがある。
そうなった日の夜は母さんと私の二人っきりになるのだが、私があまり喋らないことから家はいつも静かなのである。
しかし、この日は私がトレーニング（筋トレ）している時に母さんが私の部屋にやって来て私の様子を見に来たのだった。
「……貴女がトレーニングしている所を見ると、あれを思い出すわね。」
「あれって？」
「選抜レースの前の自主トレーニングよ。中央トレセン学園の生徒は選抜レースがある日まで担当のトレーナーが付かない娘がほとんどなのだけれど、担当が決まるまでは教官によって担当が決まっていない娘達と一緒にトレーニングするの。……でも私は教官からのトレーニングでは物足りなくてね……。よく朝早くに起きてコースに

出てトレーニングしてたり、門限ギリギリまでトレーニングしていたりしていたのよね……。それでメグルを見ていたら昔の私を思い出したってことよ。」
（そういうものなのかね。……選抜レース？あれ、メイクデビューからウマ娘ってトレーナーが付く訳じゃなかったのか。）
……？……
というような感じで私が忘れていたのを思い出したって訳です。
……アニメ見直したいけど、見れねえ……。本物見れるけど、リプレイ出来ねぇ……。目覚まし使えねぇ……。（当たり前だわ。ウマ娘の世界に転生しただけでも贅沢だってのに何言ってるんだ。）

そのような事を思い出した夜でした。
それでは長話失礼しました。
……？……

【レースコース　前期実技テスト高学年の部】
今日のレースには母さんも呼んでいます。ぶっ倒れたレースの時まで全く呼んでいなかったので未だにプリプリしていたのを宥めて招待しました。
そうすると、
『やっと呼んでくれたのね。必ず行くから頑張っているところ、見せてね。』
と、言ってくれました。
ここで勝て！と言わないのが優しいですわ……。勿論手は抜きませんよ。
あ、それと一昨日のレースでは私に対して1年生の担任の先生から手伝ってと言われて実況してました。（ふざけて、ＪＲＡ公式のゲームっぽい感じになっちゃったけど。……あと、メンバーの中にそういう本気なのだけれど行動がおかしいウマ娘達が揃っていたので。）
私が出場するのは、２６００ｍの中長距離（長距離）の実技テストです。
出場することが確定したとき、学校内では、

「なんで中距離の王者が長距離!?」やら、「勝てるかどうか分からない……!」やら、「ブラッドもいるのに……無理だよ。」やら、「いや、テストだから実力差考えられる……?」だとか、様々な声が。

とりま、頑張りましょう。

……

【ＥＸ】【高学年実技テスト】【東京　芝　長距離（２６００ｍ）左　晴　良】

（実況　６年生進学担任）

（解説　６年生特進担任）

（スターター　６学年主任）

（ゲート　５年生進学担任）

（判定　４年生ウマ娘科担任）

【コース内容】

私立濃山小学校レースコース（擬似東京レース場）２６００ｍ

ホームストレッチ約５９９ｍ

第１、第２コーナー約５２５ｍ

バックストレッチ約４５０ｍ

第３、第４コーナー約５００ｍ

最終直線約５２５ｍ

序盤約４３３ｍ

中盤約１３００ｍ

終盤約８６６ｍ

《ｌｅｆｔ》《／ｌｅｆｔ》

出走者
1　リアフルス　追込　??・絶不調　2　コモンマジシャン　追込　↑?○好　調○　3　ラクエンノミコ　先行　??○普　通○　4　ブルームナイト　差し　??○普　通○　5　トキノメグル　先行　??○普　通○　6　イノセントメリー　差し　??・絶好調　7　ブラッドステイ　先行　↑?○好　調○　8　ダークペガサス　逃げ　??○普　通○　9　キャルロスルーラー　追込　??○普　通○
・・・追込・・・　・・・差し・・・　・・・先行・・・　・・・逃げ・・・
3人　2人　3人　1人
……
【パドック】
「マジかよ……。」
「どしたの？この世の終わりみたいな顔してるけど。」
リアはレースが始まる前から絶望の表情になっていた。
「敵が全員強すぎ……。」
「そんなに？」
そう聞くとコクコクコクコクと激しく頷かれた。
「あと実は私が苦手にしているクラスメートがいてね……。あ、言ってなかったけど、私ら4人以外にも5年特進っているんだわ。……それが今回、レースに参加する娘なんだけど……非常に苦手な娘でね。こうやって噂話していると……。」
「私の事かな？」
「!!!」
突如、会話していた私達の後ろから高くて子供っぽい声が小さな声で話された。
そして、私達の間からニュッと顔を出して私達に笑顔を見せてき

た。
「……ひっ。」
リアが怯えている。普段の彼女ならばこのような反応を見せる事はあり得ないと思うのだが、この日は謎の緑色の髪をしたセミロングで身長の小さい彼女に怯えていた。
「リア～？ひっさしぶり～？」
「そ、そ、そうだね～……久しぶり……。メリー。」
「ホントだね～？……ねぇ？リアの隣にいる君は誰なの～？」
私の方を見て、見た目可愛らしく質問してくる。
……しかし、何か違和感を覚えた。
とりあえず私は自分の名前を告げる。
「私はトキノメグル。リアと同じクラスだよ。」
「へぇ～！私と同じクラスなんだ！私、メリー。イノセントメリーって言うの!!これからよろしくね～？」
普通に可愛い娘だと思うが……。
そう思い、小声でリアに尋ねる。
「……そんなに怖がるような娘か？（小声）」
「マジでヤバいんだって……メグルは知らないだろうけど、去年（４年生）まではメリーの差しが非常に強すぎて、レース直前にキャンセルする娘が続出したんだよ……！（小声）」
「それで私は地方とか、ここ（東京）とかで開かれるレースに参加していたの！それで最近まで学校に来てなかったんだけど、テストと最低出席日数はクリアしないといけないからね！だから、今日はうんと楽しませてね？」
「……小声で話していたはずなんだけど……。」
「忘れてた。メリーとその姉であるキャルロスルーラーパイセンは尋常なく耳が良いんだわ。……噂によれば声に出していない事でも読み取る事が出来るとか……。特に姉の方が。」
「だから、全部聞こえるの～！……隠し事はダメだよ？」
……ようやく先程から感じる違和感の正体が分かった。
にっこりと笑いながら見せるその瞳には、

ハイライトが先程から無かった。

（てか、結構この小学校、強くて変な奴ら多いのな。私だけ大幅な飛び級になってるの、間違いじゃないの？）

……

【観客席】

観客席では以前と同じように１から６年生までの生徒がズラリと観戦していたが、今回のような実技テストでは、実は保護者の観戦が多い。というのも普段から公開されているレース（正式なレース）は学校関係者、保護者の観戦が認められているのだが、保護者については自分の娘の活躍の場を見るためにこのようなテストの時だけ来校する人が多い。（運動会みたいな感じで見に来る。）

第１１Ｒとなれば観客席のボルテージは最高潮となり、生徒どころか出走する前から保護者まで興奮状態になるのだとか。

そんな状況下である数十人のウマ娘がコース内をよく見渡せる所に並んで座って観戦していた。

「今日は席まで用意してもらってありがとうございます。ロードジャストさん。」

「いえ！親が自分の子供の活躍の場を見たいと思うのは当たり前の事です。是非我がライバル、メグルを応援して下さい。」

「ありがとう。」

そのような感じでロードとダイヤが話していると一緒にいるレイやグローも話し出した。

「……いやぁ、これはヤバそうなレースになりそうだなぁ？レイ？」

「まさか、あのメリーまで参戦するとはね。それにブラッド先輩を除く先輩方は全員６年生特進勢……テストになるとフラッと帰ってきてはウマ娘達を脅かす存在……。」

「そんなに強い娘達なの？」

「ええ。彼女らがこの学校においては真の強者と呼ばれるような者達だと思っています。……正直、その道の王者と呼ばれる者でもかなり

の苦戦は強いられますね。彼女らはこの学校内では有名なチーム『ＬＯＴＵＳ』と呼ばれていて、普通の生徒ではほぼ抗う事すら出来ないとされる程の実力者達で、ほとんどが飛び級経験でもあるそうです。今回のレースでは、ある程度の実力からの判断とサクラバクシンオー先輩以外の６年生特進ほぼ全員が中・長距離を得意としているので今回の第１１Ｒには異常な程に強い生徒が揃ってしまっていますね。これは荒れますよ。」

「でもメグルならなんとかなりそうな気もするけどね。」

「そうだな。あいつも大幅な飛び級しているし。なぁ？１年の嬢ちゃん？」

「そうだね！メグルなら頑張ってくれるよ！」

「また倒れなければ良いですが……。」

（頑張れよ！メグル！）

グローの横の席にはメグルのクラスメート達、そして、サクラバクシンオーなどの短距離戦において戦った６年生達もいた。

「……アンタらはどう思っているんだ？……先にバクシン先輩。」

「確かに私のクラスメートは強そうですが……！私はメグルさんが勝つって信じていますよ！」

「そうか。……次、姉貴。」

「おや？グローが私の事を姉貴と呼ぶなんて久しいねぇ？誰かに感化されたのかな？」

「るっせ!!早く答えろよ！」

「せっかちな妹だねぇ。……私はメグルやイノセント、ステイは負けるんじゃないかと思っているよ。」

「なんでだ？」

「まず普通に敵が強すぎる。先に述べた３人以外は全員が６年特進。チーム『ＬＯＴＵＳ』のメンバーは各々が強い特徴（強さ）を持っているからねぇ。一人一人に対抗するのは良策とは言えないと思うねぇ……。特にメグルは彼女らとは初めての顔合わせだから、難しいと思うね。」

「そんなものか？……ふぅん……。」

（（……グロー先輩とナイツ先輩って姉妹だったんだ。））

……

【ゲート】

（実況　６年進学担任）

（解説　６年特進担任）

さあ、今日のレースの中でも１番盛り上がりそうな第１１Ｒ

芝、２６００ｍ！

出場メンバーも錚々たる面子が揃っています！

それでは、一番人気から紹介させていただきます

一番人気、６番イノセントメリー、５年特進

５年生に入ってからは、ほとんどを外部のレースに費やし、幾度となく勝利を掴み取ってきた相当に力のあるウマ娘です。……ただ、学校に居た時間が短すぎて、王者とは呼ばれていない娘ですね。外部で身につけた力は如何程か、レースが楽しみです。

「少しは楽しませてね？みんな？」

二番人気、７番ブラッドステイ、６年進学

長距離の王者、【訝る血】

その名声の防衛となるか

６年生進学のウマ娘ですね。敵全員が特進のウマ娘達ですが、自慢の先行の作戦で魅せて欲しいですね。

「……。」

三番人気、９番キャルロスルーラー、６年特進

一番人気、イノセントメリーの姉

その名の通り愛すべき妹に無情になれるか

今回のレースでは差しや追込が得意な娘が多く、逃げが少ないレースです。レース後半の彼女らの行動がどのような結果をもたらすのか、楽しみです。

（メリー、楽しみましょうね。）

各ウマ娘、ゲートに入って態勢整いました

……

スタート！
各ウマ娘、一斉に飛び出し、前にある坂目掛けて走り出す！
このレースは２６００ｍ、東京レース場と同じように設計されているので序盤からしんどくなりますね。
ブルームナイト、【集中力】で好位置を取る！
イノセントメリー、【一匹狼】！
スピードが安定して速くなります！。
先頭は、８番ダークペガザス
３バ身後ろ、５番トキノメグル
それを見るように、３番ラクエンノミコ
その後ろ、７番ブラッドステイ
１バ身差、４番ブルームナイト
直ぐ後ろ、６番イノセントメリー
更に後ろ、９番キャルロスルーラー
それを見るように、２番コモンマジシャン
２バ身差、１番リアフルス
イノセントメリー、キャルロスルーラー、【逃げけん制】と【先行けん制】を使って前側のウマ娘を疲れさせる！
（なんか、グローみたいな事をされたんだけど。）
《なんか、俺みたいな事をやってる奴がいるんだけど。》
ダークペガザス、【先頭プライド】、【先駆け】で先行集団を更に離す！
リアフルス！調子が悪いぞ！速度が安定しない！
疲労が一気に蓄積します。終盤まで耐えられるか心配です。
ラクエンノミコ、ペースを上げる！
各々がハイペースのこのレース、順位が安定しません。
集団は後ろが延びた状態で長い直線を走り、レースは中盤に入ります！

現在、先頭は、ダークペガザス
少し離されて2番手、ラクエンノミコ
3番手、トキノメグル
その外、ブラッドステイ
それを見るように、ブルームナイト
2バ身差、イノセントメリー
直ぐ後ろ、キャルロスルーラー
2バ身後ろ、コモンマジシャン
更に2バ身差、リアフルス
先頭から殿までおよそ11バ身
1コーナーに入り、お互いの様子を伺っています！
（さてと、一仕事いかさせてもらうぜ！）
コモンマジシャン、【スタミナイーター】！
そして!?
……

『勝つまで借りるぜ！』
【Grimoire of Thief Lv. 2】

……
先行、差し集団！大きくスタミナを減らされた！
コモンマジシャンの固有スキルは【イーター系】のスキルを使った際に奪ったステータスを更に奪うというものです！
長距離戦においてこれはしんどいぞ！
（クッ……。）
（あら？……息を整えないと……。）
（ビックリしたわ。耐えれるけど。）
（コジマのスキルは痛いねえ？）
（メリー！コジマじゃない！）
ステイ、ブルーム、メグル、メリーの4名はもろにシャンの固有スキルをくらい、大きくスタミナを削ることになったが、建て直し、走

り続ける。
しかし、
焦っている……か？キャルロスルーラー？
全く理由が分かりません。何かあったのでしょうか？。
一見関係ないルーラーは意識が移りやすく、調子を崩されやすい傾向にあった。
イノセントメリー、【コーナー回復〇】で減らされたスタミナを回復する！
２コーナーを抜けて向こう正面！
トキノメグル、【直線巧者】を発動させ、自分のペースを上げる！
それにつられたか、ラクエンノミコ、【先行直線〇】でトキノメグルと位置を争う！
続いて、ブラッドステイ、【長距離直線〇】！
先行集団３人の激しい争いが繰り広げられています！。
そのような状況下で残り１３００ｍ！前にはまた大きな坂があるぞ！
現在、高低差約２ｍの急な坂を上っていくウマ娘達！
順位を紹介します
依然先頭は、ダークペガザス
後ろで、ラクエンノミコ、トキノメグル、ブラッドステイ、順番が入れ替わり立ち替わり！
２バ身差、ブルームナイト、落ち着いている
直ぐ後ろ、イノセントメリー
続いて、キャルロスルーラー
それを見るように、コモンマジシャン、スタミナは余裕！
３バ身差、リアフルス、少し遅れぎみか？
長い坂を下り、待ち構えるのは第３コーナー！
ラクエンノミコ、少し押されているぞ！トキノメグルとブラッドステイが上がる！
ブルームナイト！足を溜めているぞ！
（フッ！）

……

『紅く幼き双月の為にその走りを』

【Ｒｅａｌｉｚａｔｉｏｎ　ｏｆ　Ｌｏｙａｌｔｙ　Ｌｖ．２】

……

ブルームナイト！周りを足止めしつつ、徐々に加速！

（うっ……しくじったわ……。）

ラクエンノミコ！大きく失速！

イノセントメリーも失速！

ラクエンノミコは先程の先行争いで押し負けていた所に追撃されましたね……。ここから挽回はしてくれる事を願います。

（おっとっと……ブルーム？やるねぇ？）

前側が固まっているなか、第３コーナー終了！

終盤に突入！そして最終コーナーの４コーナーへと入っていく！

キャルロスルーラー、【まなざし】でダークペガザスを緊張させた！

そして、ブルームナイト、【コーナー巧者〇】でコーナリングを重視する！

最終直線へと向かっていくウマ娘達！

先頭は切り替わって、ブラッドステイ

その外、トキノメグル

後ろ、ダークペガザス

直ぐ後ろ、ブルームナイト

イノセントメリー、上がってきた！

その後ろ、ラクエンノミコ

キャルロスルーラー、コモンマジシャン進出

３バ身差、リアフルス

（スキルが飛び交っててヤバくない……？本当に小学校のレース？

……でもこれが現実なんだ。……やるっきゃない！）

……

『私を無礼(なめ)るなよ!!!』
【オールターフ　Ｌｖ．２】

……

トキノメグル！最終直線に入って加速する！
順位を上げる！
（流石だな。だが、私もそう易々と負けられん!!）

……

『納得いかさせろ!!!』
【Ｎｅｖｅｒ－ｓａｔｉｓｆｉｅｄ　Ｌｖ．２】

……

ブラッドステイ！トキノメグルに追い抜かれても必死に食らいつく！
後ろからブルームナイト、イノセントメリー、キャルロスルーラー、コモンマジシャンが猛烈な勢いで前２人を追いかける！
「はあああああーーー!!!」
「ここからが勝負の醍醐味だぜ!!!」

残り２００!!!
!!!
《……ヒッ！》
急に観客席に小さな悲鳴が響き渡る。
その原因は現在走っているウマ娘の１人にあった。
《……出たね。メリー君の切り札。……相変わらず怖いな。》
イ、イノセントメリー!!!、凄い気迫だ！これは……一体……!?
（えへへ？……にちゃあ……？）
（これが出ると、絶対に私は勝てないのよね……。物凄く不気味な満面の笑み……。）

「……あ、は？」

……

『最後まで楽しませてよ？』

【怪奇現象！メリーちゃん以外は見た！Ｌｖ．３】

……

イノセントメリー!!凄い勢いで加速し、先頭目指して一気に加速!!!

残り、１００!!!

わずかにトキノメグル、優勢！

だが、後ろから恐ろしい奴がやって来た!!!

「さあ？勝負よ？」

（ここでそれを言うのか!?）

「……。はあああーーー!!!」

イノセントメリーとトキノメグルの対決になった！

ゴール板まであと少し!!!

どっちに勝利の女神は微笑むのか!!!?

……

……

……

東　１１　：Ｒ：　京　２６００　：ｍ：　確　定

Ｉ　６　／／／／　／　／／／　アタマ　Ⅱ　５　／／／／　／／　クビ　Ⅲ　７　／／／／　／　／／／　クビ　Ⅳ　４　／／／／　／　／／／　１／２　Ｖ　２　／／／／．

．／芝／　○良○　．ダート　．良．

．タイム　２：５１．０　レコード

……

勝ったのは、イノセントメリー!!!

最後の強烈な追い上げで差しきった!!!

二着、トキノメグル!!

三着、ブラッドステイ!

……

「ヤバすぎだろ。」

「……怖かった。見るだけでこんな怖いと感じるレースって。」

「久しぶりに強すぎるスパイスを食らったようだよ。僕でもこれはしんどいね。……どうでしたか？メグル君のお母様？」

ダイヤはそのように質問されると、少し意外な……いや、普通の返答をした。

「……小学校のレース？これが？……あまりにも強すぎないかしら……。というか、メグルが二着って。え？」

「……メグルのお母様、混乱していますわね……！」

ダイヤの脳がパンクするのをエミリアは必死で落ち着かせようとしていた。

「なんか、ビリビリきたよ！凄かったね！」

「はい！凄かったです！よく頑張りました！メグルさん！それと、一

緒に走っていた私のクラスメート達！お疲れ様でした！」
「やり過ぎだよ……メグル～。でも、燃えた……。」
（（やり過ぎで済ませられるようなものか!?））
（……。）
　各々が感想を延べているなか、フーラルはと言うと、メグルやメリーとはまた別の出走者を遠目から見つめていた。
「……ブルーム。強いのね。」
　と、1人ボソッと呟き、親しき家族の健闘を称えるのだった。

２０話　モブ娘は考える

……君たちは、メイクデビューに負けた時の事をどう思うだろうか。

メイクデビューにて登場する敵キャラ全員は、私が天才（オリジナル）と呼んでいない者達だ。

以前はサクラバクシンオー戦……天才（オリジナル）との戦いにて負けたが、今回は違う。

強いとはいえ、イノセントメリーという馬は前世には存在しない。つまりは彼女も所詮モブなのだ。

私もモブ。それは抗えない事実だ。そして、天才（オリジナル）と比較しても明らかにアドバンテージが彼女らにある。

そして、私はそんな彼女らと戦いたい。勝ってみたい。

……そう思っていた。

だが、今回の敗戦で私は思うことがある。

年齢の差はあるにしろ、現時点でモブであるウマ娘に負けていては必ず天才（オリジナル）のウマ娘には勝てない。

また、私は本当に彼女らに打ち勝ちたいと思っているのだろうか。

彼女らは自分で自分の目標を作り、生涯で一度しかないであろう戦いに勝つために努力している。……そして、私は、彼女らからすれば訳が分からないだろうが、彼女らの目標が全て分かる。……元の馬の功績を知っているし、ゲームやアニメで彼女らが各々のトレーナーと作り出した目標に向けて努力していることを知っているからだ。

……私はそんな彼女らの敵になり、壁となり、彼女らを易々と妨害してもよいのだろうか。

勿論、現時点でそんな事を言えるような立場ではないことは分かってはいる。

しかし、私は……分からないのだ。

好きなウマ娘達とただ走りたい元トレーナー（プレイヤー）が好きなウマ娘達の本気の、選手生命をも賭けた生き様に手を出してはならないのではないのだろうか。ただのゲームプレイヤーが、ファンが、彼女らの邪魔

をして良いのだろうか。
負けたからこそ分かるこの気持ち。
二着であっても胸にポッカリと穴が空くような気持ち。
……努力し続けて来たのに、負けるという不甲斐なさ。
辛い。
「……めんどくさい事を考えているわね。」
(!!)
レースが終わったあと、選手控室に戻っている最中にそのような事を考えていると後ろから小さい声で言われた。
振り向くと、先のレースで戦ったキャルロスルーラーがいた。
彼女は表情が暗く、妹と同様に目に光が無いように見えた。……が、妹とは違った雰囲気を出していた。
「……ごめんなさい。つい、貴女の心を読んじゃったわ。……私はキャルロスルーラー。貴女と妹に負けた名ばかりの6年特進よ。」
(まさか、本当に人の心を読めるというわけ?)
「その通りよ。」
(!!)
寒気を覚えた。
「……さっきの話、全部聞こえていましたか?」
「ええ。貴女が非常に変なウマ娘……という事が分かったわ。でもそれだけ。それ以上は追求しない。しても傷つけるだけだから。」
傷つけるとは……?と思ったが、率直な感想を述べる事にした。
「……。凄いですね。他人の気持ちが分かるなんて。」
そう言うと、暗かった表情が更に暗くなり、哀しそうな目をする。
「嬉しくないわ。……でもそう捉えるような生き方が出来れば良かったのかもね。」
「え……?」
その瞬間に彼女はまるで自分に対して呆れ、そして疲れている雰囲気を出した。……小学6年生が出してはいけないようなもので、こちらが見るだけでも上から物理的な圧力をかけられるようなダルい気持ちになった。

「とりあえず、私達みたいになってはいけない。貴女がそのような特殊な人であるならばなおさら周囲をよく見た方が良い。」
そう言って、彼女は私を追い越して控室へと向かっていった。
（……よく分からなかった。けど、）
（彼女みたいに〝疲れきる〟ような事はしてはいけない……って事で良いのかな？）

静かな通路の蛍光灯が1人の黒いウマ娘を鈍く照らす。
その光によって右耳に付いている黒い小さな石が仄かに蒼い炎を見せていた。
……？……
【夕方　家】
「ただいま～。」
家の玄関扉を開け、小さく声を出す。
すると、奥から母さんがやって来る。
「おかえり。今日のレース、しっかり見てたわ。」
そうだった。……やっぱ、一着取れてないから残念がってるかな？
そのように思っていると、母さんは私の前までやって来て、優しく私の頭を撫でた。
「お疲れ様。メグルの本気で走っている所、とってもかっこ良かったよ？」
優しく微笑みながらそのように告げられた。
「一着取れなくてごめんね？」
「そんな事はない。むしろ、貴女があそこまで頑張れる姿を見れて、私は嬉しかったわ。だって私の娘が一生懸命に戦っているんだもの。親の私が感動しないわけが無いわ。」
……安心した。そして、今まで感じていた緊張が、レース前からあった緊張がようやく解けるような感じを覚えた。
「応援の声が届いていたとは思っていないけど、私を含めて、貴女のクラスメートの娘達、他の娘も応援していたのよ。『頑張れ！』って。」
「そうだったんだ。……ありがとう。」

会話を終え、「あ、お鍋が吹いている！」と言って母さんは慌てて台所へと戻っていった。
私は、私が帰ってくることを見越して沸かされた風呂に入ることにした。
風呂に入っていると、とあることをふと思い出した。
（ルーラー先輩の言っていた事……あっていたかもしれない。今はこんな感じで安心出来ているけど、いつか〝疲れる〟時が来るかもしれない。その時が来させないようにするためにも、しっかりと周りを見よう。……自分を追い求めすぎて空回りしてはいけない。……前世みたいに。）
……
風呂から上がり、いつの間にか仕事から帰っていた父さんを含めて家族３人で夕飯になった。
そして、私が今日レースをしていた事を伝えると……
「俺も！見たがっだ!!!??」
と、泣かれた。
「大体、そういうことは言ってくれよ!!寂しいじゃねぇか!?」
「ごめん。」
「そしたら、仕事だって姉貴に放り投げて観戦しに行ったのに!!」
「それはお義姉さんが怒るから止めなさい。」
「あと、ダイヤが出る場面多くないか!?俺の出る場面も増やせよ!!」
「そんなに少ないかな？」
「え？……どちら様でしょうか？」
「へ？（モグモグ）」
気づいたらバカが勝手に私の横の椅子に座ってご飯を食べていやがった。
「何、呑気に他人の家でご飯食べてるの!?まず、どこから来たの!?いつからいたの!?」
「玄関から、さっきです。」
メグル「悪びれもせずに答えないでよ!!……お巡りさん！不法侵入者がいま～す!!（１１０!!!）」

「ちょっ！ヤッベ！逃げないと！」（ピンポーン！）
「ＨＥＹ!!（呼ばれて飛び出てゴルＣちゃん！）Ｗｅ，ｒｅ ｐｏｌｉｃｅ ｏｆｆｉｃｅｒｓ！
Ｙｏｕ（ちょっと）ａｒｅ（お話）ｕｎｄｅｒ（聴かせてもらおうか！）ａｒｒｅｓｔ！」
「早すぎない!!?」
　黒サングラスをかけた警察官？みたいなウマ娘が３人も家に押し寄せてきていた。そして、赤髪の長いツインテールの警官がズタ袋を持っている……。
「Ｓｃａｒｌｅｔ（スカーレット），Ｖｏｄｋａ（ウォッカ）！　Ｄｏ（やっておしまい！）ｉｔ!!」
「あ、あの～名前言ったら、変装の意味ないですおぉわ!?」（英語表記で）
「「ッし……えっほ、えっほ……！」」（バタム！）
「……。」
（台風一過。）
……
　こうして、バカはあのウマ娘の警察官３人に担がれて持っていかれました。
　不法侵入許すまじ。
　なんか、ゴルシとスカーレットとウオッカのような感じのウマ娘の警察官だったけど、後々名前を聞いたら、彼女らはゴルＣ（略）と、オオワスカーレットと、ウォッカらしいので別人だそうです。
　大事な事なのでもう一度言います。
　別人です。（多分。）

２１話　ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０２

どうも、トキノメグルです。
拐われたマル秘の謝罪文が来たので、ここで読まさせて頂きます。
……
名鑑ｖｅｒ．０２やるからヨロピク（ゝω・´★）
……
全然謝罪じゃないっすね。
文章に絵文字入れてくるのって無しでしょうが。
まぁ、愚痴っても仕方ないんで名鑑に行きましょうか。
……

トキノメグル　★
自己紹介『トキノメグル、今作の主人公、推しは全員だが中でもオグリ、以上』
誕生日『１月１４日』
年齢『６歳』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
好きなこと『トレーニング』
嫌いなこと『作者』
得意なこと『トレーニング』
苦手なこと『シラネ』
耳のこと『前世と比較するとめちゃくちゃ聞こえるので未だに慣れない』
尻尾のこと『痒くなりやすいので手入れは欠かしたくない（だけど、めんどくさい）』
身長『１１８ｃｍ』
体重『前世と比較できるかこれ？』
靴のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』
固有【オールターフ　Ｌｖ．２】『レース場が芝で且つ４種それぞれ

の作戦で1人でも誰かが走っていると、最終直線から少し加速する』
スキル【直線巧者】【末脚】
……

セブンティセブン
自己紹介『どうも～。セブンティセブンです！……え？好きな数字は７７？……違いますよ～。』
学年『私立濃山小学校進学６年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『アニメ』
嫌いなこと『読書』
得意なこと『学習した事を直ぐに扱えるようになること』
苦手なこと『学習した事を持続して扱うこと』
耳のこと『他の人よりも感情によって動きやすいらしい』
尻尾のこと『耳に同じ』
身長『１４７ｃｍ』
体重『普通』
性格『色々な娘達を混ぜた感じ？（ウマ娘に例えるなら）』
靴のサイズ『左右ともに２３．０ｃｍ』
スキル　色んなデバフスキル（付け焼き刃）
……

ゼロワンピーシー
自己紹介『こんにちは。ゼロワンピーシーと申します。皆さんに負けないように精進し続けて参ります。また、プロフィール以外の詳細な情報は本編のアッププロードにて紹介します。』
学年『私立濃山小学校進学６年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『トレーニング』
嫌いなこと『雷』
得意なこと『算数、数学』

苦手なこと『電化製品の操作』
耳のこと『媒体毎の暗号信号を受信しあっているらしい……!?』
尻尾のこと『たまに直角に折れて立っているのはなんなのだろうか……』
身長『１５０ｃｍ』
体重『１０１０００（２）［ｋｇ］』
性格『ミホノブルボン』
靴のサイズ『左右ともに２３．０ｃｍ』
スキル【先頭プライド】
……

ブラッドステイ　★
自己紹介『ブラッドステイだ。私が、皆が納得出来るようなレースを楽しみにしている。』
学年『私立濃山小学校進学６年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
好きなこと『血の滾るレース』
嫌いなこと『つまらないこと』
得意なこと『我慢』
苦手なこと『追求しないこと』
耳のこと『血が滾ると張る』
尻尾のこと『手入れは毎日欠かさない』
身長『１４６ｃｍ』
体重『問題無し』
性格『ナリタブライアン』
靴のサイズ『左右ともに２２．５ｃｍ』
固有【Ｎｅｖｅｒ―ｓａｔｉｓｆｉｅｄ　Ｌｖ．２】『最終直線、自身が先団にいるときに直ぐ後ろ、横にウマ娘がいると、競り合うように速度を少し上げる。』
スキル【中距離コーナー〇】【長距離直線〇】
……

ナイツサイレンス　★

自己紹介『ナイツサイレンスだ。グローの姉として、姉らしい行動を見せてあげたいものだねぇ。……さて、理科室に行くとしようか。もちろん、君も来たまえよ？』

学年『私立濃山小学校進学６年生』

毛色『鹿毛（黒茶色）』

好きなこと『実験』

嫌いなこと『オカルト』

得意なこと『観察』

苦手なこと『早起き』

耳のこと『興味を持つと内側に寄る』

尻尾のこと『激しく揺れるせいでグローに固定されることがしばしば』

身長『１４５ｃｍ』

体重『若干痩せぎみ』

性格『アグネスタキオン』

固有【ＮＯ　ＭＯＲＥ　ＮＥＧＬＩＧＥＮＣＥ　Ｌｖ．２】『自身がデバフスキルを発動させ、更に別のウマ娘が自身にデバフスキルを発動させていると、レース後半に自分の前にいるウマ娘のスピードを少し奪う』

スキル【ささやき】【まなざし】【束縛】

……

シャイニングバーン　★

自己紹介『ガンッダーーーーー!!!……あれ？自己紹介始まっているなら早く言ってよ！メグルちゃん……。こほんッ。こんにちは！シャイニングバーンです！みんなと一緒に頑張るよ！えい、えい、おー！』

学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』

毛色『栃栗毛（茶色）』

好きなこと『アニメ鑑賞（特にガ〇ダム）、武道』
嫌いなこと『ルールを守らないこと』
得意なこと『役になりきること』
苦手なこと『特に無い。』
身長『１１６ｃｍ』
体重『微増』
性格『マチタン？』
靴のサイズ『左右ともに１７．５ｃｍ』
固有【必殺！シャイニング・レッグ!!!Ｌｖ．１】『最終直線で先団にいると、自分の中に眠る熱い魂が呼び起こされ、レース中のやる気がその時点で絶好調に切り替わる（最初から絶好調だった場合でも速度が上昇する。）（また、アニメ好きなウマ娘がいた場合、そのウマ娘のやる気が絶好調になる。）』
……

ラクエンノミコ　★
自己紹介『どうも。ラクエンノミコよ。私は走れるならそれで良かったのだけれど、いつの間にか特進に居たわ。……全く、めんどくさい。』
学年『私立濃山小学校特進６年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
スキル【先行直線〇】
……

コモンマジシャン　★
自己紹介『よ！私はコモンマジシャン。普通のウマ娘さ。やっぱ、レースって良いよな！楽しいし、勝った時の幸福感は最高だぜ！』
学年『私立濃山小学校特進６年生』
毛色『栗毛（金色）』
固有【Ｇｒｉｍｏｉｒｅ　ｏｆ　Ｔｈｉｅｆ　Ｌｖ．２】『イーター系スキルを発動させると同時に発動し、スキルで奪ったステータスを

更に奪う』
スキル【スタミナイーター】
……

ブルームナイト　★
自己紹介『私はブルームナイト。レッド家のメイド見習いとしてお嬢様方のお世話をさせていただいております。母のように強きウマ娘になるために、お嬢様方、レッド家の誇りに恥じぬよう、日々精進して参ります。』
学年『私立濃山小学校特進６年生』
毛色『芦毛（銀色）』
固有【Ｒｅａｌｉｚａｔｉｏｎ　ｏｆ　Ｌｏｙａｌｔｙ　Ｌｖ．２】『時間操作をするように最終コーナーにて相手のスピードを落としつつ、自分は速度を上げ、集団から抜け出そうとする』
スキル【集中力】【コーナー巧者○】
……

ダークペガサス　★
自己紹介『ダークペガサスよ。私に貴女達の自慢の走り……魅せてくれるわよね？』
学年『私立濃山小学校特進６年生』
毛色『黒毛（黒色）』
スキル【先駆け】【先頭プライド】
……

キャルロスルーラー　★
自己紹介『私はキャルロスルーラー、メリーの姉よ。……私に自分から近づかない方が良いわ。その方が身のためよ。』
学年『私立濃山小学校特進６年生』
毛色『桃色』
スキル【逃げけん制】【先行けん制】【まなざし】
……

イノセントメリー　★★

自己紹介『えへへ♪私、イノセントメリー！メリーって呼んでね～？みんなといっしょに走るの楽しみにしてたんだ～。……ちゃんと楽しませてね？』

学年『私立濃山小学校特進５年生』

毛色『緑色』

固有【怪奇現象！メリーちゃん以外は見た！　Ｌｖ．３】『残り１００ｍで自分の後ろにいるウマ娘達のスピードを下げ、自分の中の前にいるウマ娘達のスタミナを下げ、自分は速度を上げる』

２２話　トレセン学園第２回選抜レースの観客席

……トキノメグルです。
この前の不法侵入については忘れてください。アホらしいので。
さて、前期実技テストも終了し、小学生各々の実力がある程度？分かった所で……！
６月!!!……の後半。
【第２回中央トレセン学園選抜レース】
今日は姉さん達の２回目の選抜レースです。
前回は母さんが仕事の関係で行けなかったので私も行かなかったのですが、今回は２人で来ました。
父さんは運営やらなにやらで伯母さんにこき使われているそうなので一緒に観戦出来ないそうです。
（今回から、セリフの書き方が変わるそうです。作者（バカ）の都合上だそうなので何か意見とかあったら是非感想欄にておっしゃってください。アイツに検討するよう言い聞かせますので（しごきますので）。）
……
【非常勤トレーナー室】
山盛りの書類を死んだ目で淡々と片していく姉弟がいた。
判子を押す音やペンが走る無機質な音だけが部屋に響くなか、遂に翔真が涙声になりながら別の机で作業している姉に訴える。
「なんで俺はこんな目にあっているんだ!?」
「仕方ないでしょ。あなたでしか判別出来ないものもあるし、そもそもあなたがＵＲＡから持ってきたものが大半でしょう？」
「ＵＲＡからつってもほとんどが理事長宛ての書類ばかりじゃねぇか!?なんで理事長秘書とＵＲＡ職員兼派遣トレーナーがこんなことやってんだよ!?俺は自分の仕事を増やす為に持ってきた訳じゃないってのに!!」
「理事長が出張中だから。本当に出張が多いお方だからね。というかあなた、今は理事長補佐でしょ？手伝ってあげてるからなんとか耐えなさい。」

「俺はどれだけ兼任すれば良いんだよ……。普通のトレーナーやりてぇよ……。娘の観戦行きてぇよ……。樫本さんが来いよ……。」
「ハイハイ。文句を言わずに頑張る。」
……
【観客席】
私達親子が観客席に向かう頃には既に学園の生徒やトレーナー関係者など大勢の人達で席のほとんどが埋まっており、第1レースが始まる前から会場のテンションは張っていた。
「……凄いな。やっぱり中央は熱気が違う。」
そのようにぼやくと母さんもそれに頷く。
「私が学生の時もそうだった。選抜レースはやっぱり生徒にとってもトレーナーにとっても、本当に大事なレースになるからね。選抜レースの結果によって選手生命まで変わりかねないから。」
確かに。応援している生徒を除いて、トレーナー（特に新人）の態度、走者としてレースに臨む生徒の態度は真剣そのものだった。
それぞれの持つ覚悟の大きさ、望みの高さ、それらを見せつける為に、それらを判断する為に各々の実力を試されるのだ。
今回のレースでは少なくとも1回は選抜レースに負けた者やトレーナー契約を結べなかった者、契約を蹴った者、事情により第1回の選抜レースに出場出来なかった者達が揃うのだが、それらの過去から学び、バネにし、自分が独りでどこまで強くなったかを主張する。その為、第1回のよりも本気度が高くなりやすい傾向にあるのが今回、第2回選抜レースだ。そんな状況下に置かれている中、姉さんやレイン姉はどんな走りを魅せてくれるのか私はとても楽しみにしていた。
「そういえば、姉さんとレイン姉はどのレースで出走するの？」
「確か、ミドリは第9R、レインちゃんは第2Rだったと思うわよ。」
「ということは、レイン姉が割と早めに出走するんだね。」
そのような感じで会話を続け、なんとか2人分の観戦できる位置を見つける。
その後暫く周りの様子を観察しているとなんだか遠くの方でト

レーナーらしき人物達が誰かに群がっているのを発見した。
「ねぇ、ちょっとあそこ気になるから行ってきても良い？」
「そうね。まだレース開始まで少し時間があるし、危ないから止めなさいと言っても聞かなさそうだから行ってきて良いわよ。（メグルならなんとかなりそうだし……。）」
「オッケー。行ってくる！」
「本当に危なかったら帰ってくるのよー。」
そして、私は本来の小学校1年生では行ってはいけなさそうな人混みのヤジウマをしに行くのだった。
……
近づいて分かった。人混みの中心に居たのは、
「すまない。既にトレーナーは決めているんだ。勧誘はよしてくれ。」
そう言い、微笑みながら群がるトレーナー達の勧誘を断る、シンボリルドルフだった。
流石に何人ものトレーナー達が彼女の周囲を取り囲んでいる状態では私の体では危険なので様子を見ていたのだが……。
「……！すまない。少し道を開けてくれ。」
シンボリルドルフがそのように言うと、トレーナー達は渋るように道を開けた。
そして、
「やぁ、久しぶりだな。」
「えへへー。カイチョー！ひっさしぶり！」
ルドルフが微笑みながら目線を送ったのは私の反対方向にいる元気ハツラツなウマ娘だった。
「ねぇ、今日はカイチョーは走らないの!?ボク、カイチョーが走る所、見たくて仕方がないんだ!!」
「すまない、テイオー。今日は私は走らなくてな。」
「えー!!?むぅ……。」
「そんなにしょげるな。今日のレース観戦も私達にとっては大事な事なんだ。何も走るだけがウマ娘ではない。」
……私は知っている。今、ルドルフと対面し、馴れ馴れしく話す私

よりは身長の高い彼女を。
　彼女はトウカイテイオー。ウマ娘の世界ではルドルフに多大なる憧れを抱き、彼女に追い付く為に努力し続ける天才（オリジナル）。私はアニメを見ていない為、この時期には今のような感じの会話を繰り広げていたかは知らないが、少なくとも私が今いる世界では既にルドルフとの接触はあったようだ。
　とりあえず、トレーナー達が悔しげにルドルフを横目に見ながら立ち尽くすのをかぎ分け、私もルドルフの下に行こうとする。
「……！君も来ていたのか。」
「お久しぶりです。ルドルフ先輩。」
　私に気付いてルドルフが私の方に向かう。
「今日は君の姉達が出走する日だからな。前回の事をバネにした今回をも見るのを楽しみにしていたんだ。まさか君も来ているとは思っていなかったが。」
「前回の様子も見てくださっていたんですね。姉さん達は頑張っていましたか？」
「ああ。どちらも懸命に頑張っていたが、やはりここは中央。そう易々とは勝鬨を挙げさせなかったようだ。」
「では、今回のレースがどんなものになるか見物ですね。」
「君もそう言うのだ、君も含めて彼女らを見込んで良かったと思わせて欲しいものだ。」
「……ねぇ。カイチョー？この子は誰なのさ？」
　テイオーが急に現れたウマ娘とカイチョーが話すのを見て不貞腐れながら尋ねる。
「この娘はトキノメグル。今回出走するあるウマ娘２人の関係者だ。」
「よろしく。トウカイテイオーさん？」
「……あれ？ボクの名前、言ったっけ？」
「有名ですから。」
「……へへん！ボクは強いウマ娘だもん！有名なのは仕方ないよね！カイチョーと競うために、越えるために、サイキョーのウマ娘になるために頑張ってるんだ！」

うん。知ってる。
「キミは何年生？ボクは今、小学校４年生だけど。」
「私は小学校５年生ですよ。」
「「うん!?」」
私の学年を嘘偽りなく伝えると、ルドルフとテイオーが固まる。
「え？ボクより圧倒的に身長が低いのに５年生……？」
「き、君！去年まで幼稚園児ではなかったのか!?」
「飛び級させられて。１年生と５年生掛け持ちという訳が分からない学年ですよ。」
「なにそれ……。というか、ボクよりも高学年だったことに驚いたよ。」
「全くだ。普通はそんな差が大きくなるような飛び級はしないはずだが……。」
２人揃って考え込む現実親子。
私はそんな彼女らを見て、（めっちゃ似てるー！）とか、場違いな事を思っていたのだった。

２３話　昇天

「はあぁぁぁぁぁ!!!」
「クソッタレェェェ!!!次は負けない!!!」
「付き合うわ!!??ミドリ！」
「えええええ!!!??」
どうしてこうなった。
真っ赤な太陽に照らされた河川敷を走る４人のウマ娘。テイオー、ミドリ、レイン、メグルは今日のレースによって生じた感情を収めるために走っていた。いや、メグルは成り行きで走らされていたが。
こうなった理由はミドリ、レイン共にそれぞれのＲで２位だったこと。今回のレースで２位だったことでそれぞれにはトレーナーからの勧誘はあり、一緒のチームに所属することになったのだが……。
「「やっぱり、２位って１番悔しい!!!」
と叫びながらメグル達の前を先行していた。

テイオーはというと、
「カイチョーが気に入るウマ娘……何回かボクと話す時にもそういう娘がいるって聞いていたからね！一緒に走ってみたくなったんだ！」
という理由で現在、４人で走っていたのだ。
付け加えると、ルドルフがレース観戦を途中で切り上げてしまったが為にテイオーの話し相手が居なくなってしまったからというのが本当の理由。どうやらルドルフは何か急用が入ってしまったからということで急遽抜けざるを得なかったらしい。その時はテイオーがものすごく寂しそうというか落ち込んでいた。
その後は私の母さんも交えてワイワイしていたが、何があったのかいつの間にか並走させられている。ただ、メグルは振り回されているというか、走らされてはいたが……
うん。めっちゃ嬉しいんだけど。……ヤベェ、嬉しすぎる。
テイオーと並走出来るなんて……。
と、感極まっていた。

「トウカイテイオーさん。」
「なに？」
「シンボリルドルフさんはそんなに私の事を言っておられたのですか？」
「うん。ボクがカイチョーが走るレースが好きでね、レース観戦後もようすを見に行ってはカイチョーに話しかけたんだ。そしたら2回目に見に行った時からカイチョーがボクの事を覚えてくれててね。そこからよく会っては話し合うようになったんだ。その時に話題として出してくるのがキミだったんだ。」
「私はルドルフさんとは1回しか会っていませんけどね……。そんなに興味持たれてたのか……。」
「え？逆に1回しか会ってなくてカイチョーにあそこまで興味を持たれてたの？……色々と気になるなぁ。」
　並走しながらテイオーは少し上を向いて何か不思議そうにしていた。
「そこまで気に入られてるのなら尚更一緒に走りたいよ。メグルは中央トレセン学園に入るの？」
「そうですね。前で走ってる姉達が中央で競っていたように私も中央で走りたいですね。」
「じゃあ、ボクとメグルはライバルになるんだね！だったら今からでも負けないようにしなきゃ！」
「ええ。1年差ではありますが、まずは入学出来るように頑張りましょう。」
　笑顔で会話する2人。彼女らは共に同じ舞台で戦い、競えるように互いに誓うのだった。
「「絶対!!!次は負けない!!!……負けないからなぁぁぁ!!!!」」
　百メートル程前にまで離れているのにも関わらず!!!ハッキリとその怒声が2人に届いた。
「あ、あはははは……なんだかあの2人見てると怖くなってきそうだよ。」

「普段なら殺気まで出るような人たちじゃないんですけどね。よっぽど悔しかったんでしょう。」
「メグルってさ、ボクより小さいのに随分大人みたいな態度だよね。」
「あんな姉たちをずっと見ていたら大人しくなりますよ。私は彼女らの妹ですから。」
「妹だからってそんな大人びた風になるかなぁ……？あと、メグルって飛び級してなかったら何年生だっけ？」
「ルドルフさんも仰ってましたが、小学校1年生ですよ。」
「……。ボクとしては結構複雑な気持ちだよ。だってボクより年下の子がボクより先輩になってるんだもん。」
「社会に出て働いたらそんな年とか関係なくなりますよ。」
「そういうものなのかな？」
（ごめん、前世は高校生で止まってるはずだから、社会とか知らん……知ったそうに言ってる癖に何も知らなかったわ。）
その後、ドップリと陽が落ちるまで走り続け、ミドリとレインの頭が冷えた所で憂さ晴らしは終わりになった。
「テイオーさん、今日はありがとうございました。」
「こっちこそ。良い走り相手が見つかったよ。ねぇ連絡先交換しない？また今度一緒に走ったり、遊びにいこうよ！」
「ぜひ、お願いします。」
その時の私の心情は言うまでもないだろう。
分からない人にはこう言おう、
私はアグネスデジタルと同じ存在になった。

２４話　ボランティア講師始めました

７月です。皆さんお待ちかね夏合宿の時期ですね。私、トキノメグルが在籍する小学校は７月の初旬から８月の後半まで夏休みだそうです。……長くね？

確かにウマ娘の合宿って４ターン（７月前半から８月後半）あったけど、小学校も同じになるものなの？

……気にしても仕方ないね！義務教育の内容出来てりゃＯＫだもんね！

少し話は戻して、私はこの暑いなか、海岸で走ったり、タイヤ引きしたり……なんてことはしません。暑いのは嫌いだからです。じゃあ、何するのかって？そんなの決まってるじゃないですか。

家で筋ト「メグルゥ！勉強教えてェ!!!」

……。

ごめんなさい。皆さんに嘘ついてました。

今、私。

トレセン学園のボランティア講師やっております。ｉｎ夏合宿

……？……

時は遡って６月終わり頃。

私が普段通り学校から帰って直ぐに宿題を終わらせてトレーニングしに行こうかと思った所に、ウチのママンが、

「メグル、今日、たづなさんが貴女と相談しに家に来るらしいから外トレーニング行かないでくれない？」

「え……なんで伯母さんが来るのさ？」

「なんでもトレセン学園の夏合宿についてだって。詳しい事は来てから話すみたい。」

「私、小学生だよ？トレセン学園にはまだ関係ないと思うんだけども。

……分かったよ。意味は全然分からないけど、今日は家でトレーニングしとく。」

「ごめんね。」

そうして、私は家でも出来るトレーニングをしながらたづなさんを待つことになりました。
そして、夕陽が沈み終わる頃にたづなさんがやってきました。
「お久しぶりです。メグルさん。」
「久しぶり。相変わらず、忙しそうだね。」
「ええ……それはもう本当に。」
久しぶりに再会したたづなさんは見た目こそは普通だったが、目が疲れているように見えた。
「それで？今日はどうして私にトレセン学園について相談しに来たのさ？」
「ええ。メグルさんにどうしてもお願いしたいことがあって……」
そこでたづなさんは少し泣きそうな表情になり、
「7月の初旬から行われるトレセン学園の夏合宿に臨時講師として来てくれないですか？」
と、私に訴えてきた。
「「……は？」」
私の横にいた母さんも私と同じタイミングで口を開けた。

……？……
事の詳細は夏合宿に参加予定の先生が急に入院することになり、参加出来なくなってしまったというもの。代替を用意しようという話になったが、他の先生は先生で出張や重要な用事が重なり、結果代替が不可能になってしまったということだった。参加予定の先生が体育関係ならまだしもこれが中学数学・高校数学を請け負っていたので合宿中にも勉強する生徒達にとっては大きな打撃になってしまうということにより、必死に他の人材を探しても条件に見合う講師役は居なかったのだそうだ。
「メグルさんのお父さんが代替として頑張ろうとしてるけど、中等部と高等部を兼任するのは無理がありまして……。お父さん自身にも合宿中には他の仕事が山ほどあるので……。ですが、合宿が始まるのがあとわずかなのに人が居ないものですから。」

そういう事情があって苦肉の策として私に依頼が来たということですか……。
「たづなさん、確かに私は中等部までの内容なら普通に教えられると思いますが、私は小学生ですよ？どうして最終的に小学生の私の元に来たのですか？」
一応、私の元に依頼が来た理由を再確認したいと思い、敢えてその質問をする。
「この際、勉強を見れるなら誰でも良いので……参考書を見ながら一緒に勉強するでも良いので、とりあえず人が欲しいんです……！だから、とりあえず翔真の娘さんである貴女にお願いしに来たのです……。」
「……あの、別に私は良いんですけど何で私の母さんには依頼しないんですか？」
「あら、それは私が中学生以上の子供に勉強を教える自信が無いことは日頃からお父さんには言ってるからね。話がたづなさんにも伝わっていたのでしょｗｗ」
ｗｗじゃあないんだよ……。
その後もお願いしますお願いしますを連呼され、私は断れなくなり、仕方なく了承したのだった。
そして、それを利用して、友達にもトレセン学園の雰囲気を一応味わって貰いたいと不意に思い、友達を合宿に参加させることになっても良いかと尋ねると、
「メグルさんが来てくれるなら全力でご用意します！」
と、なんだかこちらが悪くなりそうな勢いで了承された。

……？……
そんな事を翌日、クラスメート2クラス（1年生の方は一部）に伝えると
「……という訳で、よかったら来る？夏合宿。」
「「「「行きます！」」」」
「2か月間もあるんだよ？長いよ？」

「それでも行くに決まってんじゃん？」
「行きますよ。絶対。」
「……絶対に負かす。あいつだけは潰す……。」
「遠慮なく行かさせて貰おうか！」
と、皆さん用事蹴ってでも行くとの事。熱心だねぇ。
なんか、グローさんが物騒なこと言ってるけど。
……？……
「という訳で友達１０人行きます。」
「了解です。是非いらしてください。」
電話で報告した時には驚かれるかと思ったが、そんな事は全く無かった。
あとはバイト代の話もあったが、それは面倒なので断り、代わりに合宿中の授業の見学や一緒にトレーニングを受けることで話がついた。
だって、トレセン学園の授業やトレーニングを2か月間も無料で受けれるんだもん。普通お金払わないといけないわ。

２５話　夏合宿の始まり

７月前半！

私たちトキノメグル一行は急遽たづなさんの依頼によってトレセン学園の夏合宿に参加することになった！友達１０人＋１人追加とか絶対お断りものだと思ってたけど、彼女曰く、

「トレセン学園のウマ娘にかかる食費、滞在費などと比較しても貴女方にかかる費用は雀の涙ほどなので誤差として処理します。生徒の食費による誤差の方が圧倒的に大きいので、気にせず、合宿に参加してくださいね。寒くなるのは理事長の懐だけですから。依怙贔屓？そんなもの知りませんよ？」

ええ……誤差って……。そういう扱いで良いわけ？とか、思ってたけどどうせ理事長のポケットマネーから出るし、いっか！

という訳で、何台もの貸し切りバスが目的の合宿所へと向かうなか、私たち小学生組はトレセン学園のウマ娘達と楽しく交流していた。

因みに小学生組メンバーは、

トキノメグル
アイネクライト
エミリアレッド
フーラルレッド
ブルームナイト
アイリスフェザー
ビクトリング
シャイニングバーン
リアフルス
レイショット
バルトグロー
ロードジャスト
の１２名。

「へぇ、たづなさんのお誘いで合宿に参加することになったのね。」
「はい。良い機会でしたので勉強にさせていただきます。」
「夏合宿って楽しいイメージがあるだろうけど、実際は凄くハードだからね？場所もよく分からない所だから帰ることも出来ないし、大半の生徒は憂鬱だよ。」
「そういうものなのですか。まぁ、本来なら夏休みのこの期間に自由に過ごせないのは確かに辛いかもですね。」
「合宿、スッゴク楽しみだよ！フーラルちゃんはどう!?」
「うん……。みんなと過ごす夏休み……楽しみだよ。」
「はしゃいでいるわね。フラン？」
「……。」（コクコクコクコク）
「引き連れてきて悪いわね。ブルーム？」
「いえ。お嬢様方のお世話を任せられている身ですのでお気になさらず。私自身もこの合宿で勉強させていただきます。」
「何台も貸し切りバスが縦に並んで走行している……トレセン学園はやっぱり凄いわね。」
「ああ、メグルには感謝しかないな！早く海で泳ぎたいぜ！」
「……おい、このウマ娘を見なかったか？」
「なに、ミホノブルボンさんだけが写った破れた写真見せながらそんなことを言ってるの？あと、そのシーンはなに？ベンチプレス？」
「なんか言いたくなった。あと、メグルなら何か返してくれると思ったから。」
「……。」
「マジヤバって感じ？」
「メグルの人脈どうなってやがるんだ……。」
「私たちがここにいれるだけでも凄いことよね……。」
「皆、2ヶ月もの間、しっかりと学ぼうではないか！」
　各々がバスの中ではしゃぎながら過ごす中、別の所では不安な声も上がっていた。
「ねぇ、数学の先生が入院してから替わりの先生って誰か分かった？」
「分からない。学園からは見つかったということは言われたけど紹介

はされてないから……。」
……それ、私っす。たづなさんから合宿所に着いたときに父さんと合わせて数学の補助講師兼中学数学担当臨時講師として紹介されるそうです。
なので、私はほとんどの生徒からはたづなさんに特別に招待された小学生の内の1人だと思われているそうです。

一方、メグル達一行が乗るバス以外のあるバスでは……
「なぁ、今年の夏合宿にはたづなさんが招待した小学生がいるんだったよな？」
「せやな。まさかトレセン学園の合宿にまで参加出来るっつうことはよっぽどの運の持ち主なんやな！……せや、そのチビッ子どもにトレーニングやレースで見せつけようやんか！」
「お前なんかチビどころかじゃりん子でぇ？」
「あ～!?誰がじゃりん子やねん!?」
「じゃりん子だろぉ～？」
「なんや～!?このインチキ江戸っ子ぉ！大井は江戸ちゃうでぇ？」
「あー！それは言っちゃダメなやつだろぉ！」
「あと、じゃりん子言う割にはアンタの方が背えちっこいよなぁ!?」
「ほとんど変わらんだろうがぁ！」
「おぉ？なんや？やるんか？」
「やるか!?」
「あの……バスの中は危ないですから……止めてくださいよ～！」

背の小さいウマ娘2人は直ぐに沸点を迎え、喧嘩するのを止める背の高いウマ娘。そんな様子を同じバスに乗る他のウマ娘や先生は（またか……。）と、思いながらその光景を横目にこれから行われる合宿の前の雰囲気を各々想うのだった。

……？……
合宿地

「着いた～!!!」
そう言いながらバスから飛び降りたクライト。彼女の目の前に広がるは、綺麗な広い海……ではなく、宿泊所だった。
「まぁ、そうだよね。いきなり海に行くわけないもんね。荷物とか置かないといけないから、クライト、行くよ。」
「了解!メグルちゃん!」
それでもクライトは目を爛々とさせて宿泊所に向かっていった。
（なんか、本当にウララとか見ている感じやな……。気分和むわぁ。）
自然にホッコリとした気持ちになりながら他の気分揚々な小学生組と一緒に合宿所へと向かうのだった。

……

「それでは、各生徒は決められた部屋に向かい、荷物を置いてきて下さい。その後は合宿所の担当職員並びに夏合宿の授業の講師を改めて紹介します。みな、トレセン学園のウマ娘として恥無き姿勢を保つように。」
高等部の生徒会会長がトレセン学園のウマ娘に合宿所での行動を説明し、一旦お開きとなった。
私たちには小学生組として専用の部屋が3つ用意され、4人ずつに分かれて過ごすことになった。
既に私たちも過ごすメンバーは決めており、3班に別れ、それぞれの部屋に向かった。
1班
アイネクライト
フーラルレッド
ブルームナイト
リアフルス
2班
エミリアレッド
ビクトリング

トキノメグル
バルトグロー
3班
アイリスフェザー
シャイニングバーン
ロードジャスト
レイショット

……

「それでは最初に私たちがこの2ヵ月もの間お世話になる職員の方々に挨拶をします。センター長の野田さん、今年もお願いします。」
センター長の名前が呼ばれ、会長からマイクが渡される。
「こんにちは！今年も学園の皆さんが来てくれるこの夏を待っていました！2か月という期間ですが、私含めセンター職員一同、皆さんのトレーニングや生活の支援をさせていただきます！よろしくお願いします！」
高等部会長が司会をし、センター長の挨拶、他の重要な施設の管理者や担当者が紹介と挨拶をしていく中、私と父さんは講師陣の人達の一番外側に立っていた。
そんな私の姿を見て、
「招待された小学生もきちんと挨拶されられるんだね。」
「たづなさんの招待を受けてるんだから代表して施設の人達に挨拶するんだろうね。」
とか、ヒソヒソ言われていた。
合宿所関係者の挨拶が終わり、講師陣の紹介が行われる。そして、ついに私たちの紹介になった。
「今回の合宿では、中学・高校数学の担当の城崎先生が急に参加出来なくなったので、代わりの方が授業を行います。それでは駿川翔真さん。お願いします。」
「駿川翔真です。いつもは姉貴と共に理事長補佐を行っているＪＲＡ職員ですが、今回は夏合宿の間、高校数学教えてやれって姉貴に言わ

れてやることになった者です。どうぞ姉貴と娘同様よろしくお願いいたします。」
「あぁ、たづなさんの弟さんだったんだ……。」
「あれ？ミドリのお父さんじゃない？」
「そうだよ～。あとその横にいるのは……」
「翔真さん、ありがとうございます。続いて、トキノメグルさん、お願いします。」
「どうも。横の駿川翔真の二女、トキノメグルです。今回は小学生組の参加を歓迎してくださり、ありがとうございます。皆さん方の２か月の活動を観察しながら私たちの将来について学んでいきたいと思っていますのでよろしくお願いします。」
「「……。」」
皆が少しポカーンとしているのを確認して続ける。
「あと、私は父さんの手伝いをしに来たので、何かあったら私にも相談してください。」
会長が２人とは言っていない為、私は敢えてはぐらかし、混乱を呼ばないように挨拶した。
とはいっても、
「「……？」」
という風に後に言ったことが分かっていない人達も居たのだが。

別編　【幻空世界に響くファンファーレ】

オープニング

日本トレーニングセンター学園、通称、中央。
学園の休日であるこの日、なにやら理事長、秋川やよいと理事長秘書、駿川たづな、理事長補佐、駿川翔真は倉庫にてある作業を行っていた。
「ぜぇ、はぁ……本当に要るんか？こんなもの。」
翔真とたづなが運んでいるものは以前使った『ＶＲウマレーター』。以前、シンボリルドルフ、グラスワンダー、エルコントルパサーが試運転させ、効果があると言われたものだ。
「いえ、あれはシンボリルドルフさんではありません!!ゴールドシップさんです！」
「たづな。書類上では合っているのだ。何も問題は無かった！……とにかく、今回はこの『ＶＲウマレーター』を増台し、より効果を確認する！」
そう言い、この前までは3台だったのが、何を思ったのか、９台にまで増えた『ＶＲウマレーター』にガリガリに痩せた理事長は生き生きとした目をしながら扇子の先を向ける。あまりにも多すぎる機械達に駿川姉弟はうんざりしていた。
「大丈夫！今回はしっかりとアポイントメントを取っており、名簿も作った！今回の『第２回ＶＲウマレーター試験運用』をきちんと行い、データを取るぞ！」
そして、理事長はメンバー表を取り出し、たづなと翔真に見せる。
「えっと……シンボリルドルフ、エアグルーヴ、ナリタブライアン、スペシャルウィーク、サイレンススズカ、トウカイテイオー、メジロマックイーン、ゴールドシップ、トキノメグル……。マジで多いし、ゴルシはおるし、生徒会総出だし、俺の娘おるし……。」
「そういうことなので、今回は大規模の実験となる！……実は以前、ゴールドシップが作り出したワールドが少々気になってだな……。

トレーニングに大きく活かせそうなワールドだったからそれを利用したいというのもある！なので、ゴールドシップには今回、正規メンバーとして参加してもらう！また、グラスワンダーやエルコンドルパサーは前回に参加してもらったので解説にまわってもらう！」
「多すぎます……。一体どれだけのお金がかかっているのですか!!」
たづながそう言うと、理事長はガバッと振り向き、扇子を広げ、
『金欠!!』
と、扇子と書いている事を言いながら……
「ポケットマネーは出し尽くし、家計は火の車……メジロ家に借金までしてしまった！」
「アホですか!!!」
「食事は水と雑草ともやし……。」
「だから痩せてたのか!!」
「というか、生徒の家から借金するとはどういう了見ですか！」
「あ、間違えた……条件付き寄付だった。」
……？……
メジロ家
「……という訳で……お願いします！」
そう懇願する理事長の頭の先は静かに椅子に座る無言の老年の女性だった。
「いや……理事長。何を仰っていますの!?生徒の一族からお金を借りるなど……学校として、理事長個人として、どうしてこのようなーーー」
「それ以上は。マックイーン。」
手を出し、隣にいて興奮するマックイーンを制す。
「……分かりました。理事長の想い。受け止め、一部支援しましょう。」
「あ、ありがとうございます！」
「しかし！」
その瞬間、部屋の空気が変わり、理事長とマックイーンは体を震わ

せる。
「結果によっては後で支援内容を打ち切り、返還を請求します。また、監視、報告の為にマックイーンを実験に参加させなさい。」
「わ、分かりました……。」
……？……
「という訳で、半分借金、半分寄付という状態なのだ……！ポケットマネーはあちら側が用意した口座に振り込み、手持ちは無い……！その為、食事もあまり出来ない！だが、結果が出れば良い！出せれば、戻ってくる！」
そう言いながらから笑いする理事長。
（なんでそんなギャンブルやってんだよ……。俺、そんな教え子知らねえぞ!?）
……？……
当日!!
体育館に並んだ９台の機械の前に集められたウマ娘達。痩せ細った理事長は目を輝かせながらデータの採集を心待にしていた。
「ふむ……これがＶＲウマレーターか。会長、以前の試走の時には参加出来なかったのですよね。」
「ああ。試走の為に会場に向かっていたのだが、背後からずだ袋を被せられてな……。抵抗も出来ず、ただ運ばれている内に気が遠くなってしまっていた。そして起きた時には生徒会室の椅子に座って書類を片していた。」
「なんだその事件臭そうな匂いを出しながら結局夢オチみたいなそれは。」
「分からない……。だが、これだけは分かっていた。」
「何がですか？」
「……袋が生臭かった。というかそのニオイのせいで気絶してしまった。」
「「は？」」
……
「ゴールドシップさん……身体から生臭いニオイがするのですが

……。」
「あたりめぇよ!!鯛を捌きまくっていたからな!!船を出し、マグロを釣りに行って1ヶ月……このニオイはそんなマグロを釣ろうとした時に釣れまくった鯛達の生きた証だ!!」
「一体、いつそんな船を出してまで漁に行って帰って来たというのですか!!」
「相変わらず、ゴルシさんは凄いですね！」
「スペちゃん……あれは凄い……とは少し違う気がする……。」
「ともかく、ボク達もあの機械でトレーニング出来るんだ！早く乗って試してみたいよ!!」
「テイオー。今回の実験ではゴルシが作り出したワールドの中でトレーニングするみたい。グラスやエルに聞いたら、ファンタジー的な世界らしいよ。」
「そうそう！ＲＰＧみたいに闘いながらトレーニング出来る！カイチョーもいるし、楽しみだよ！メグルもだよね！」
「うん。」（というか、私にとってはこの世界ですらファンタジー要素は感じるけど。しかし、【幻想世界　ウマネスト】か……楽しみだな。）
……
「それでは諸君！学園の為……私のポケットマネーの為……頑張ってきてくれ！」
（なんでポケットマネー!?）
そう言われ、９人のウマ娘達はＶＲウマレーターに乗っていく。
そして、各々が事前に説明されていたやり方で起動していくのだった。
その瞬間、９人のウマ娘達の意識は飛んだ。
……
「待ってください！意識が飛ぶような設定にしてはいなかったはず！皆さん聞こえますか!!?返事をしてください!!理事長！最初からこのようなレベルに設定していましたか!?」
「最低レベルにしていたはずだが……。」
「いや、最高になってるぞ……。間違えたのか!?」

見ると、すべての機械のＶＲトレーニングレベルが最大になっており、試走している全員がただ走ったり立っているだけの状態になっていた。
「……ん？なんだ？このニオイは？」
翔真が全部の機械を調べているとそれらから変なニオイがした。
「生臭い……。」
……

……？……
【空の世界】
「……い、おい！起きろ！メグル！」
「……うん？……グルーヴ……副会長？」
エアグルーヴがかなり焦った様子でメグルを起こし、起きあがるとそこにはトレセン学園は無く、青空に浮かぶ島々があった。
「……ｏｈ．思った以上にファンタジー。」
「感心している場合か!?……ＶＲとはいえ、ここまで現実に近い世界を作られていると、怖くなるな。体の感触やら痛覚もある。」
そう言いながら自分の頬をつねって痛みを確認するエアグルーヴ。
そのように２人揃って目の前の景色を見てスゲーと思っていると、
「……と、言うわけで、お前ら！見たことあるよな？この黄金の槍!!というか久々だな!!あぁ……会いたかったぜ!!」
ゴールドシップがなにやら、所謂スピカのウマ娘達に向かって金色の槍……？みたいなものを見せていた。
「……ったく、何をやっているんだ。ゴールドシップの奴は。」
グルーヴの隣には口に含んでいる若枝を無くして少々苛立っているナリタブライアンがいた。
「ゴルシの事だ。このような世界に来るとますます破天荒ぶりが酷くなるな……。会長はどこにおられるか分かるか？ブライアン。」
「知らん。」
メグルはというと……。
（ゴルシの持っているの……黄金の槍？……ということはまさか……

!?ここは【幻想世界　ウマネスト】じゃない!!?槍なんて無かった!!
……えと……じゃあここは一体……!!?)
と、1人でなにやら世界の真理を暴こうとしていた。
……
「ゴルシさん、黄金の……槍……ですか?見たことあるような無いような……。でもとてもキレイでカッコいいです!」
「ボク、ゴルシが興奮する理由がずれてる気がするんだけど違うのかな……。」
「同意ですわ。しかし、ここがトレセン学園の関係の場所では無いのであれば、VRによって作られたトレーニング用ファンタジー世界と言ったところでしょう。私でもこのような世界に来て興奮はしていますわ。それになんだか懐かしい……。」
「広い草原……いっぱい走れそう……。」
各々が考え込んだり、呆然としたり、草原に眼を輝かせたり、槍をグルグルと回しまくっている中、不意にゴルシが槍を掴んだまま近くの大岩に向かって突撃し、槍でおもいっきり突き始めた。
「何をやってるんだ……ゴルシ。」
「ホントそれ。」
「……クソッ。枝の代わりを探さないと。」
「ゴルシー槍持ってるからって岩突きまくったらダメだよー!」
「ウマ娘の力では岩が崩れて環境破壊になりますわ!!止めてくださいまし!」
「でぇじょうぶだ!!」
そう言うと、ゴルシは槍で突くのを止めた。
「あら?意外にも素直ですわね。」
と、マックイーンが思っていると、ゴルシが。
「さて、問題だ!今からヤラセじゃなく、本物のファンタジーってことをテレビの前、ラジオの前、カーナビの前、スマホの前で見ている皆さんに証明するための事を起こすぜ!一体それはなんでしょーか!?」
「とてつもなく嫌な予感がしますわ……。」
「という訳で時間切れ!」

「早い!?分かんなかったよ……。」
「正解は……これだ!!!」
　そう言いつつ、槍を先ほどよりも振りかぶり、突いていた大岩にガキンッとなる程の音をたて刺す。
　その瞬間……地面が揺れ始めた。
「な、なんだ!?揺れが激しいぞ!!しかし、スマホの地震速報は無い……!?というか、圏外!?」
「地震か……。私にはあまり効かないな。」
「ブライアン副会長は自分で地面割ってちょっとした地震起こしてるからね!!?」
「え……なんで岩が動いているの!!?」
「ファンタジーの世界って岩が簡単に動くんですね!!」
「スペシャルウィークさん!?そういう悠長な事を言っている場合ですか!?」
「うーんあそこは地面がぬかるんでそうね……。」
「スズカさん!?早く現状の様子を確認してください!!」
「キタキタキタキターーー!!!目を覚ませ!!ゴーレム!!!」
　ゴルシが大声でそのように大岩に向かって叫ぶと、岩が立ち上がった。

ゴグガァガガァグワァ!!!

「……おい、メグル。私の目の前には岩が立ってるように見えるが幻覚だろうか?」
「グルーヴ副会長。気は確かだと思います。私にもそう見えます。」
「固そうな身体だな。」
「なんで平然としているんだ……?」
「ちょっと!!?ゴールドシップさん!?これは……一体!?」
「寮長に砕かれる大岩だ!!」
「絶対に違いますわよ!!」
「ゴルシ!その岩、よく分からないけど怒ってる気がするよ!!」

「え？私達、結構危険ですか？」
「当たり前でしょう!?岩が立って声みたいなものを出しているんですよ!?これが私達に向かってきたら……。というか逃げてください!!ゴールドシップさん!!」
「よしッ！ずらかるぞ!!」
　そう言いながら、マックイーンやスペ、エアグルーヴなどウマ娘達がいる方向に走るゴルシ。

ゴグガァガガァグワァ!!!
　そして、起こされた事に激昂しているのかゴーレムと言われた大岩がこちらに向かって走ってきた。
「ゴールドシップさん!?なんでこっちに逃げてくるのですか!!?」
「おいおい、どんな時でも９人は一緒……そう誓い合った仲じゃねえか！」
「ゴーレムが来てるよ!!?に、逃げないと!!スペちゃん！スズカ！」
「え！岩がこっちに来てる!!?」
「ようやくこの広大な草原を走れるのね……。」
「なんでスズカはちょっと嬉しそうなの!?」
「……っておい！岩がこっちに来るぞ！逃げなければ！」
「あいつらもこっちに来る！逃げるぞ！メグル遅れるなよ。」
（な、なんでこの世界に来て早々こんな目にあってるの!!）
「お母ちゃぁああん!!たすけて～～～!!!」
　魔物に追われ全速力で逃げる８人のウマ娘達。
　この世界で彼女らに再び待ち受けているものとは……
……

【幻空世界に響くファンファーレ】
……
……？……
【ある町の北側】
「……果たして皆は一体どこだろうか。というかここはどこなのか……。」

会長はというと8人のウマ娘とは別の所、町の中で皆を探していた。
「しかし、このまま1人で探していても埒があかない。誰か人に尋ねるとしよう。」
そういい、多くの人がいそうな場所へと足を運ぶのだった。
……？……
「やはり、ここの世界には見たことが無いものばかりだな。人間だけではない。獣人……角の生えた者もいるな。やはりファンタジーといったところか。……む、あの者に尋ねてみようか。」
」
ルドルフは背が小さいある人物に目を付け、この世界の情報などを尋ねようとした。
「いらっしゃ～い。ここはよろず屋。何がご入り用ですか？ちょっとした探検に行かれるなら短剣がオススメですよ！」
「……。」
「……あれ？どうかしましたか？」
「探検に行くなら短剣……か。面白い！」
「やっぱりですか！面白いですよね!!良かったー！気付いてくれる方が居るなんて……。」
「ならば私も……私はここには初めて来たのだが、実はここの場所は町の北側だそうで。人も多そうだし、情報を得る事に期待していたんだ。君みたいな面白く奇態な人物と出会えて私はとても嬉しい。」
「キタの4連発……。成る程。ここの場所には初めてでしたか！ならばこれを……この町の地図です！実はそこの道の通りにはあまり知られていない……未知のお店があるんです！後で行きませんか？」
「ウム。だが、手持ちが無くて困っている。どこもかしこも怪我ひとつ無い健康な身体だっていうのに……。」
そこまでいくと、商人……シェロカルテは興奮した！
「貴女のようなお方に出会えて驕らないわけが無い！奢りますよ！私はシェロカルテ！」
「ありがとう。私はシンボリルドルフ。君みたいな同士とも言える者

と今までどうして会えていなかったのか不思議なくらいだ。泣けてくるよ。」
「「なんでこの2人はダジャレばかり喋っているんだろう。」」
そうして意気投合したシェロカルテとシンボリルドルフは店に行き、ジュースを飲みながらダジャレを言いまくるのだった。
……？……
「……!!」
エアグルーヴ、ナリタブライアン、トキノメグルが逃げている中、急にエアグルーヴが失速しかける。
「どうした!?」
「……な、何故かは分からないが、急に体の調子が……。」
「なんでこのタイミング!?頑張って！」
エアグルーヴ自身もなぜこのようになっているか全く分からないまま、本能に身を任せ、ゴーレムから逃げ続けるのだった。

第1R　騎空士リデビュー！

「はぁ……はぁ……ここまで来れば安全ですよね……？」
魔物からなんとか逃げ切り、とある町にたどり着いたトキノメグル達。
上がった息を整えながら、改めて周囲を見回すと……
そこには中世ヨーロッパのような雰囲気でありながらどこか落ち着く雰囲気を醸し出す場所で普通の人間もいれば猫のような耳が生えた者、異常に背丈が小さい者、角が生えた者が行き交い、日本では絶対に見れそうにない光景が広がっていた。
「凄いな……。街の感じも普段のとは違うし、本当に別の世界を再現しているのだな……。」
「そのようだな。……だが、露店にはケバブみたいなものや豚の丸焼き、腸詰めみたいなのがあったぞ。食ってきていいか？」
「全部、肉……。野菜も食べた方が良いですよ……。」
「小さいのに姉貴みたいな事を言うな……。」
「のんきに食べ物の事で盛り上がるな。いち早く理事長達に実験のデータを渡さないといけない。というか、食べ物とかは食べられるのか……？」
「そ、そうですよね……。無駄な行動は避けて早く帰りたいですし……。」
グルーヴ、ブライアン、メグルは街に入って普段の生活では見たことがない景色に感化されていた。ゴルシを除いた4人も3人と同じような事を感じていた。そんな7人を差し置いてゴルシはいきなり大きな声を出して注目させる。
「しかぁし！アタシ達が帰る方法はただひとつ！幻空の試練をクリアすることであるッ！」
「いきなり、何を言い出したかと思ったら、ゴルシ。ふざけているのか？」
「いんや。この前、授業中に宇宙からやってきたレーダーを受信していたらな……」

「絶対に居眠りだな。あとで尋問するか……。」
「おお怖い。……話を戻して、幻空の試練を受けろ!!!って。お天道様は言ってたぜ？」
「なんなんだ？その試練って……。」
「フッ……そんなの決まっているだろ？」
　天高く拳を突き上げ、不敵に笑うと……
「わからんッ!!!」
「「は、はあああ!?」」
「だってぇ、ゴルシちゃんは～事業部長じゃなくてぇ平課長だし～。ぶっちゃけぇ、ゆわれた通りに槍ブン回してただけっていうかぁ～。」
「なんだと？私達はこんな訳の分からん仮想世界に引導も無しに落とされたということか……？答えろ！ゴールドシップ！」
「お、落ち着け！ブライアン！ゴルシも私達と同じ境遇……なはずだ！気持ちは分かるが、当たる相手が違うと思うぞ！」
「案内役ならいるぜ？」
「「何？」」
　そうゴルシが答えると、ウマ娘達は慌てていた様子を静め、ゴルシを見つめる。
「という訳でそろそろグッドモーニング！三日月槍近!!」
　そう言い、持っていた黄金の槍を叩く。
『痛!!』
「「は？」」
「「「え？」」」
「紹介するぜ！こいつはアタシの使い魔、槍えもんだ！」
『むぅ……眠っていたのに、叩いて起こさないで下さいよ……。あ、どうも、ご紹介に預かりました、【エデソ】……です。また来てくださったんですね。ウマ娘の方々。』
「「……。」」
「や、や、槍が……シャッベッタァァァァァ!!!!!!……。ヒュッ……。」
「メグル!?おい、おい！しっかりしろ！」
　ゴルシが叩いて、槍から声がする。

そんな状況を目の当たりにした８人。
その内のメグルが壊れ、そして倒れた。
……
「……う……うう……。ファンタジー……ウマ娘……転生……グランブル……」
「全く、訳が分からなくなるな。倒れたメグルの気持ちも分かる。魘されながら何か呟いているが。あと、最後のはポ〇モンだな。」
そう言いつつ、膝枕で顔が青白くなったメグルを寝かすエアグルーヴ。
「そして、ゴルシと……エデソだったか？話を続けてくれ。」
ゴルシがメグルを哀れな目で見ながら、話を再開させてゆく。
「アタシもこの世界に来てから思い出したんだ。この世界は【空の世界】って言うんだけどよ、アタシらは前に【空の試練】ってのをこなしていたんだ。スペやスズカ、テイオー、マック、エデソ、団長率いる騎空団と一緒にこの世界を制圧したのは良い思い出だぜ……。」
『制圧なんかしていません。しかし、ゴルシさんの言っていることの大半は合っていて、ウマ娘の５人と騎空団の人達と一緒に冒険した日々はとても楽しかったものです……。』
「おいおい、エデソ。あれも忘れるなよ？デカイ魔鯛を釣りに行ったこと……鯛職人としてあんくらいデカい鯛を捌けたのは名誉なことだったぜ……。」
『思い出させないで下さいよ。……というか今更ですけど、なんでまだ生臭いんですか。』
「別に良いだろー？また、鯛捌きに行こうぜ？」
そのような感じでゴルシとエデソが喋る中、未だに現状が掴め切れていないのか、４人と1人は難しい顔をしていた。
「てなわけで、お前ら４人は思い出したか？」
「そ、そう言われても……。」
「ええ……。このような世界は覚えてはいませんわね……。多分。」
「そうだよー。こんな世界に来たことあるなら絶対覚えてるもん！」
「でも、懐かしい雰囲気はあったのよね……。何か他にキッカケがあ

れば判りそうな気もするのだけれど……。」
「大体、この世界はＶＲで作られた架空の世界だろう。なんでお前ら５人が架空の世界に行ったことがあるんだ。」
ゴルシ以外の４人が悩んでいるなか、ブライアンが苛立ったように問う。
対して、ゴルシは……
「さぁな？行けたんだから行けたんだ。」
としか答えなかった。
……？……
「とりあえず、案内役というならどこか休めるような所を案内してくれ。エデソ。……あと、自己紹介を忘れていたな。私はー」
『エアグルーヴさん……ですよね。』
「な!?……何故知っていた？」
『私は試練の案内人。試練の参加者の名前などのプロフィールは既に知っています。』
「「……。」」
副会長ズは黙り込んでしまった。
「それはそうだけどよ、騎空団の奴らとは別れたのか？」
黙り込んでしまった副会長ズに代わってゴルシが問う。
『それが別れてなくてですね。あなた方が元の世界に帰ってしまった後でも一緒に旅をしていましたよ。』
「おほー！てことはまた、アイツらと旅出来そうなんだな！早速案内してくれよ！」
そう、ゴルシが興奮したように頼むと、エデソは少し声のトーンを落として答えた。
『わかりません。』
「は？」
「「「え？」」」
「どういうことだよ？別れてないんだったら居るんだろ？」
『私、今迷子なので。それと、まだ私はそんなに成長していないので。まだ私、赤ちゃんですから。』

「おいおい、お前、まだ赤ん坊だったのかよ!?あの日から１００年も経っても尚成長してないって……カー!!!羨ましいぜ！その成長具合!!」
『何が羨ましいんだか。あと、１００年も経ってません。』
「てか、なんで迷子の仔猫ちゃんになってるんだよ。」
『だってゴルシさんがこの世界に来たことで元の持ち主が帰って来たということより貴女の手元に召喚されてるんですよ。勝手に召喚しておいて何を言うんですか。』
　そのような感じで２人？の話が続いていくのを見せ続けられているウマ娘は混乱していた。
「全く話が見えないんだが……。」
「私もだ。」
「ねぇ。さっき言ってた『幻空の試練』ってなんなのさ？」
　テイオーが試練と呼ばれたものを気に掛け、エデソに尋ねる。
『幻空の試練とは、以前皆さんがこなした空の試練とは内容が異なり……』
「異なり？」
『魔王を倒してもらいます。』
「「「魔王!?」」」
『それも３人。』
「「３人もだと!?」」
　いきなり槍から魔王を２人も倒せと言われた６人のウマ娘達は唖然とする。
『この試練がこなせれば、あなた方は【真の最強のウマ娘】となり、元の世界にも帰れるでしょう。』
「はぁ……つまりはその魔王とやらを倒さなければ私達は帰れないということだな？」
『その通りです。』
「めちゃくちゃだ！何故、私達が倒さなければならない……？」
「別に良いだろー？結局はその魔王にちゃちゃっと会って、ちゃちゃっと殴ってちゃちゃっと帰れば良いんだろ？」

「そんなコンビニに行くみたいに言わないでよー！」
「う……日差しが……目に染みる……。」
　ブライアン、ゴルシ、テイオーが言い争っているなか、今までグルーヴの膝枕の上で寝かされていたメグルがようやく起きた。
「……起きたか。メグル。調子はどうだ？」
「あ……グルーヴ副会長。調子は大丈……。今、これ、どんな状況ですか？」
「ああ。ちょっと今はブライアンが現状を納得出来ていなくてな。少し不安定になっているんだが……。とりあえず、あの槍、エデソから色々私達がこれからやるべき事を聞いていたんだ。……む？どうした。顔が真っ赤だぞ？」
　メグルはいつの間にか顔を赤面させ、震えていた。
「いやいやいや!!!な、なんで私がグルーヴ副会長のお膝のお上で寝ているの!!!?」
「!?大きい声を急に出すな！……ビックリするだろうが。」
（いやいや、あのグルーヴさんだよ？女帝様だよ？そんな畏れ多いお方の膝枕って……前世であれば（皆から）殺され（リンチ）、デジたんがいれば尊死（とうとし）……。いや、私も死にそうだわ。……そうだ。これは夢だ。現実ではない。ＶＲだし。うん。うん。）
　メグルは再び気が吹っ飛びそうになるのを止め、異常に興奮している現状を収めようと必死になっていた。
　そして、そんなメグルが過呼吸になっているなか、グルーヴが自分の額とメグルの額にそれぞれ手を当て、熱を確かめ始めた。
「ピ？」
「……ふむ。少し熱っぽいな。体は平気か？メグル？」
　その瞬間、メグルはまるでボンッと音を立て爆発するような、デジたんとか、二次創作のテイオーとかがやりそうな精神状態になり、再び倒れてしまったのだった。
「!?メグル!?しっかりしろ!!」
「……我が生涯に一片の悔い無し……ガクッ……」
「そんな事を言うな!!生きろ!!!」

……？……

「その後、なんやかんやあって、アタシ達は前に一緒に冒険した騎空団の連中をまずは探すことになったぜ！」

「なんやかんやとは一体何ですの!?」

「知らね。」

「マックイーンさん。ゴールドシップさんは、そういうウマ娘ですから……。」

「というか、メグル……。グルーヴにおんぶされてるのってなんだか妹みたいだね！」

「テイオー。メグルも好き好んで倒れている訳では無いんだ。そっとしてあげろ。」

結局、ゴルシが言ったように彼女らは以前、『空の試練』の時に一緒に冒険していた、ルリアやビィ、ウェルダーなどが属している騎空団を捜すのと会長の発見を試みることになった。

この状況は以前と割と似たような雰囲気になっているが、今回はエアグルーヴ、ナリタブライアン、トキノメグルの3名も加わって探すことになった。

しかし、相変わらず行動の何もかもが破天荒なゴールドシップ、食べ物を売っている露店ばかり見ているメジロマックイーン（甘味）、スペシャルウィーク（大盛）、ナリタブライアン（肉）、街の外側の草原を眺めて左旋回をし続けるサイレンススズカ、ぶっ倒れてしまったトキノメグルとそれを背負うエアグルーヴ、喋る槍エデソの一行は端から見れば変人の集まりだった。

「まともなのボクしかいないじゃん!!?」

テイオーだけがまともなポジションと化していた。

『……お店を見るのは良いですけど、お金持ってませんよね。』

「そういえば持っていませんね……。お店にいっぱい気になる食べ物があるんですけど……。」

『私がある程度管理しているのでそれを召喚します。』

「おおー！これはあれだな？冒険の始めに王様からもらうなけなしのあれだな！」

『よく分かりませんが、限度はありますので考えて使ってくださいよ。……はい。』
エデソが自分でくるっと振るように回ると各々の手にはこの世界のお金、ルピが握られていた。
「どういう原理なんだ……？」
『後で教えます。それより早く騎空団の人たちやカイチョー……？を見つけましょう。』
そして８人のウマ娘は騎空団を捜す班とルドルフを捜す班に主に分かれ、街の中を観光するのだった。
……？……
ある屋台にて、
「お嬢ちゃん、良い食いっぷりだな！」
「ああ。この世界に来て何時間か経ったからな。腹が減っていた。」
「そうかそうか！うまそうに食ってくれて嬉しいから、ほら！もう一本サービス！」
「……頂こう。」
鳥型の魔物を炭火で焼き、軽く塩を振った素朴な焼き鳥だったが、ブライアンは貪るように頬張っていた。
「……ああ、そういえば。ここら辺りで蒼い髪の少女と翼が生えたトカゲを見なかったか？」
ブライアンはその焼き鳥の屋台の店主に向かってある騎空団を探していると尋ねた。
その騎空団はエデソがどうやらウマ娘５人と以前別れてからも一緒に旅をし続けていたらしい団体で、ブライアンが問うた人物らはその騎空団の中でも異彩を放っていた者達の代表例だった。
「ん？蒼い髪の少女？……ああ！その少女がいる騎空団ならここらでは有名だな。ここ、ポート・ブリーズにはいろんな騎空団は来るが、その騎空団がやって来ると毎回大騒ぎになる。そういや、最近は街の中がいつもよりも賑やかだし、来てるかもな。」
「そうなのか。奴らがどこに居るかとかは分かるか？」
「流石に分からねぇな……。」

わりぃと謝りながら鳥を焼く店主と焼かれた鳥を食べ続けるブライアン。
そんな2人を優しく包み込むように爽やかな風が吹き抜ける。
「……！心地良いな。」
「あたりめぇよ！ポート・ブリーズにはティアマト様のご加護があるからな！ティアマト様が見守ってくれるお陰でこの島も発展したし、騎空団も来て賑やかな訳で。……そういえば、こういう風が吹くとティアマト様が現れるんだよな。……もしかすると本当に来てるかも知れねぇ。」
「そのティアマトっていう奴が現れるとその騎空団が現れるのか。」
「理由は知らないがその騎空団の団長か蒼い髪の少女の近くによくティアマト様は現れるんだよ。そうなりゃ俺らポート・ブリーズのもんはお祭り騒ぎで喜び合いながら謎の音楽と共に舞い、ティアマト様に日頃の感謝を伝えるのさ。」
「ふん……。（変な文化だな。）」
その後、ブライアンは焼き鳥を食べ続け、エデソがどこからか召喚させたルピを払い、店を後にした。

……？……

【ポート・ブリーズ　ある街の広場へと続く道】
「グルーヴ副会長……！そろそろ下ろしてください！」
「まだお前は病み上がりだ。大人しくしておけ。」
「いやいや、中学生にもなっておんぶされるのはしんどいって！」
「実際は小3と同じ9歳だ。たまには元の年齢らしい行動をとっても良いのだぞ？」
（いや、副会長の目の前でなんでそんな事が出来ると思うの？畏れ多くて出来ません!!）
メグルを妹分だと思っているグルーヴは赤面しているメグルを背負ったまま目的の騎空団がいないか捜していた。
「メグル！あっちの方で賑やかな催しをやっているようだ。行ってみないか？」
「それ、観光する時の言葉じゃありません？」

「……いや、ちゃんと捜してはいるんだぞ？ただこういう体験もそうそう無いからな。私も好奇心はかられているのだ。」
「まぁ、こういう所にその騎空団も観光に来てるかもしれませんね。行ってみますか。それじゃ下ろしてください。」
　メグルはそう言うと、グルーヴの背中から降りようともがく。が、グルーヴの両手の固定はてこでも動かないように固かった。
「ダメだ。お前では迷子になりかねないからな。」
（降ろしてよ……！恥ずかしい……！）
……
【広場】
　広場では大勢の子供達がステージの前に群がっていた。
「ねぇねぇ！今からあの騎空団の人たちのショーが始まるんだよね？」
「今回はどんな事をやるのかな～？」
「メグル、何か今からステージでショーをやるみたいだぞ？捜し続けるのもあれだから、少し休憩がてら観賞しようか。」
「降ろしてください。観ますから。」
　ようやくグルーヴの背中からメグルは解放されたのだった。
……
　少し時間が経つと４人の青年、淑女がステージ上に現れ、ショーが始まった。
「みんな！今日は来てくれてありがとうな！俺はラカム！今日は情報によるとこの辺りにヤバい奴が居るみたいなんだ！俺たちはそいつの調査、討伐の為に来たんだ！そんな危険極まりない依頼をこなすために一緒に頑張ってもらう俺のイカした仲間を紹介するぜ！まずは団長！」
「こんにちは～！ジータって言います！何が出ても平和を守るために頑張るよ！」
「おっし！そいじゃ、次は氷の女剣士！カタリナ！」
「カタリナだ。君たちと仲間を守るためならいくらでも戦おう！」
「最後は小さな怪物魔女ッ娘！イオ！」

「色々余計よ！……イオって言うの！応援してね！」
４人が簡単な自己紹介を終えると、いきなり警告音が鳴り響き、４人が動揺する様子を見せる。
……
「うわぁ！スッゴく大きなエヴィフライ！」
「あれと戦うんだ！」
「揚げたてジュワジュワ……！」
警告音と共にステージの上から現れたのは、油ジュワジュワ揚げたてのメチャクチャデカいエビフライだった。
（（なんでエビフライ!?））
「ありゃなんだ!?ドデカいエヴィフライか!?」
「あんなのが暴れたらこの街どころか空の世界までもが危ないわ！」
「空の世界の平和は私達が守る！エヴィフライなんぞに後れをとってはいけないぞ！」
「よし、みんな！行こう！」
そして、４人は街の平和の為、空の世界の平和の為、息を合わせて宙に浮かぶエビフライことエヴィフライに本気の攻撃をしかけるのだった。
……？……
死闘の末、エヴィフライはラカムを除いた女性３人に倒され、ショーは無事成功した。その後、遠くから眺めていた２人のウマ娘は唖然としていた。
「なんか……日本じゃ絶対に目の前では見れそうにない光景でしたね。」
「全くだ。ＶＲの技術は本当に凄いな。架空世界のはずなのに本物とまるで変わらない。……現実離れはしているが。」
「言葉が上手く出せないですよ……。」
たまたま観たショーのあまりにも幻想的な光景に感極まるものを覚えた２人は暫く当初の目的を忘れ、ベンチに座って休憩し続けていたのだった。
……？……

【夜　宿】

エデソが何故か召喚できるお金によってウマ娘達はお金には苦労していなかった……が、情報収集には苦労していた。

８人のウマ娘が宿の食堂に集合し、各々が得た情報を照らし合わせていた。

「……私が焼き鳥屋の店主から聞いた事はこれで以上だ。……だが、お前らもっとましな情報を持って帰れよ。」

骨付き肉を噛み千切りながら文句を言うブライアンが席についている円卓の周りには表情を暗くした６人のウマ娘達がいた。そして、除かれた１人、ゴルシはブライアンの話なぞ全く聞かずエデソと謎の言語で喋っていた。

「……ゴルシは放っておく。とりあえず、まとめると？今、私達がいるこの陸……いや、島はポート・ブリーズという名で、ティアマトという神？がいるらしい。ティアマトが現れる時は目的の騎空団の代表者が大抵いる。……で？女帝様とメグルはある騎空団のショーを見て、ＶＲ技術に感動。残りの５人は会長を捜すために尽力してもらった筈だが、会長の情報は一切掴めなかった……。ふざけてるのか？」

「だってぇ……ゴルシがふざけるから……。」

「関係ない。それを見越して人数分けを３対５にしていたからな。……だがな、女帝様が見ていたそのショーが目的の騎空団である可能性があるにしても確認出来なかったというのと５人も居て目的の成果も得られませんでした？観光気分はもう仕方ないにしろ役割はこなせ。」

その後、ブライアンは黙り込み、黙々と肉を食い千切りまくっていた。

……？……

次の日、今度は情報の齟齬があってはいけないというブライアンの考えの下、グルーヴとメグルが観たというショーがあったステージに８人で向かうことになった。

「宿の客の話だと今日もその広場でのショーがあるらしい。別の題目だが同じ騎空団に所属している者たちがやるらしい。私達はそこに

行き、目的の騎空団か判断する。……くれぐれも見惚れて目的を忘れるなよ。」
「……昨日は悪かった。」
「ああ。副会長様ならもっとしっかりしろ。グルーヴ。それとメグルもだ。」
「了解です……。」
……？……
【広場】
　昨日に引き続き大勢の子供達がステージの前に群がり、ショーが始まるのを今か今かと待っていた。
「多いな。」
「昨日と同じぐらいだ。やはり子供となるとこういうショーとかが好むのだろうか。次のファン感謝祭ではこのような催しを生徒会主催でやってみるということを会長に提案してみるか……。」
「止めろ。騒がしくなる。」
「良いと思いますよ。ブライアン副会長もグルーヴ副会長もカッコいいですし、こういうものをやってみたらファンの人たちは盛り上がると思いますよ。」
「私が休めないだろうが。」
「感謝祭で休んでどうするんです!?しっかりとファンの人たちにお礼しないといけないでしょ！」
「ま、まぁ……そうだな。」
「その為にもこのショーとか観て、勉強しましょう！」
「いや、だから！ショーとかは私はやらないぞ！」
……
「しっかし、メグルは本当にあの2人と仲が良いよねー。」
「メグルさんは中等部生徒会メンバーのお一人。高等部生徒会とは交流も少なくは無いのでしょう。」
　真横でメグル含めた3人の会話を聞いてテイオーは思っていた事をマックイーンに話し始めていた。
「でもブライアンとかグルーヴとかって今でこそ根は優しいって分か

るけど、最初に見た時は恐いって思わない？ボクもカイチョーは優しいと思ってたけど、トレセン学園に入学してからは良い意味で恐ろしいと思わされたよ。」
「……その割には会長さんやあのお二人に馴れ馴れしいですわよ？」
「まぁ、それがボクの取り柄だから！」
「意味が分かりませんわ……。」
……
そうこうしている内にショーが開演し、昨日のとは違った出演者5名が現れた。
その瞬間に子供たちの歓声が辺りに広がる。
出演者の各々がテーマされている色のスーツを着ており、ウマ娘のほとんどは日曜テレビでやる子供向け番組のショーに近いものだと気づいていた。
「なんでしょう？スーツみたいなのを着ていますね。」
「あのスーツは戦隊ものかしら？戦隊ものは子供には人気のジャンルだからね。スペちゃんはこういうものは観たことはなかったの？」
「はい。トレセン学園に入学する前は田舎でこういうショー自体ありませんでしたし、東京に来てからも観る機会は無かったので……結構楽しみです！」
「そうね……。私も小さい時の事を思い出して観てみようかしら。」
楽しそうにステージの方を向くスペシャルウィークの様子を見てサイレンススズカも心なしか幼少期の事を思い出し、微笑むのだった。
……
「熱血リーダー、キクウレッド！」
「森への想いは全空一、キクウグリーン！」
「クールビューティー、キクウブルー！」
「一諾千金な商人、キクウイエロー！」
「ウロボロスと共に、キクウピンク！」
「5人揃ってグラサイ戦隊キクウジャー！空の世界はオイラ達が守るぜ！」

空の世界のヒーロー達、キクウジャーの目の前には悪の組織の数々の敵が現れる！
キクウジャー達は各々の得意な戦法……剣や銃、魔法、爆発物、そして拳で善に対峙する者達を粛清するのだ！
……
ショーが進行していく中、ブライアンは元の世界では考えられない光景にひどく混乱していた。
「魔法……？剣や銃、拳は分かるが、どうも魔法だけは意味が分からない。」
「まぁまぁそこはＶＲ上のファンタジーってことで。グルーヴ副会長は昨日のショーを観たからある程度は慣れてますよね……って、なんでしゃがんでいるんですか!?お腹でも痛めましたか!?」
「い、いや……お腹ではなく、体全体が重く感じてな……。何故かキクウイエローの発言を聞いていると、体の力が抜けるというかなんというか……。」
「言霊かなんかですか!?」
エアグルーヴはキクウイエローが技を繰り出す度に発せられる言葉によって体調を崩していた。
メグルはその原因を調べるべく、イエローの発言に耳を凝らすと……。
「これを食らって目の前真っ暗～」
「ん？」
「この武器で血飛沫をあげて～って、ダジャレが物騒すぎました～」
（ダジャレか!?）
エアグルーヴは普段会長のダジャレを聞いて体調を悪くしていたのが影響したのか他者のダジャレを聞いても体調を悪くなる一種のアレルギー反応？みたいな症状を出していた。
「お？さっきの小さなトカゲ、人化して拳で敵に殴りかかってるぜ？」
「人化って……あれでは竜人みたいですわね。」
キクウレッドは戦闘になると防御フォルム（竜人）へと変身し、圧倒的な力（物理）で敵を叩きのめしていた。

「……正義ってなんだろう。（ん？トカゲ？）」
……
ショーは終盤へと突入し、見た目○ジラのような敵の吐いた見てるだけで体が焼かれるような紫色の炎によってキクウジャー達は満身創痍になってしまった！
「オーマイバハームト!!!巨大な悪を目の前に膝をつくヒーロー達！今こそ、プレミアムな声援でキクウジャーを応援しよう！頑張れ！キクウジャー！」
「「頑張れ！キクウジャー!!!」」
司会のお姉さんが呼び掛けると子供達も応えるようにキクウジャーを応援する！
その声援に応えるようにキクウジャー達はボロボロの体を起こし、正義の力で再び悪に立ち向かう！
「……ふぅ。皆の応援がある……。オイラ達はまだ戦える！戦わないといけないんだ！行けるな!?お前ら！」
「「「おう!!!」」」
復活した５人はひかり始めた。
そして、最後の力を振り絞る！
「最後だ。俺からいかせてもらうぞ！……レンジャーに不可能は無い！ＵＬＴ１００（アルティメットハンドレット）スティルショット!!!……イエロー！」
「はい～！本気、出しちゃいますよ～？……よいしょ!!お次はブルーさん～」
「世界に背くものは消え失せろ！ガンマ・レイ！……ピンク！」
「了解！これが真理の一撃だ！アルス・マグナ!!」
「「「止めを！レッド!!!」」」
「ああ！食らえ、キクウレッドキック!!!」
４人の必殺技が集結し、ヒーロー達の何倍も大きいその敵を包み込む！そして、リーダーであるキクウレッド自慢の肉体による攻撃で死闘は終演を迎える！
「グガァ…グギャァァァ゛ァ゛!!!……」
その敵が断末魔のような声を出し、力尽きた瞬間、ヒーロー達、子

供達から大きな歓声があがる。
　そして、ウマ娘達も現実の世界では見られない壮大な光景に感銘を受けていたのだった。
　だが、ショーはここで終わらなかった。
「何!?見ろ!さっきの敵が……!」
　最後に倒れた大型の敵がひかりだし、その形をぼかしてゆく。そして、消えた……と思えたのだが、その場所にはある人物が満身創痍の状態、フラフラになりながらかろうじて立っていた。
「お前は!!エンペラー!!!」
「フッ……見事だキクウジャー。我が魔力を用いて怪獣に化け、我が野望を果たす為に貴様らを消さんと思っていたのだが……こうも返り討ちに会うとはな!」
　そこに現れたのは怪しげな金属製の仮面を着けた、少女だった。
「今回の作戦は中止にし、我らは引き上げるとしよう……。だが、必ずや貴様らを滅ぼし、この空の世界を手中に収める!その日が来るまで艇の中で狭い思いをしながら怯え続けるが良い!!……さらばだ。」
　そう言い残し、エンペラーは消えた……。
「あのエンペラーが関わっていたのか……!このままでは世界がどんどん凶悪なものに支配されてしまう!」
「だがよ、この街の平和は守られたんだ!オイラ達は最初から大きな平和を守るんじゃねぇ、小さな平和を守って大きな平和を取り戻すんだ!」
「そうだな。悪をこれ以上増やさないためにも、小さな事から一生懸命に取り組む……とても大事なことだ。」
「エンペラーにもっと悪い事をさせないためにも、お……私達ももっと頑張らないとね!みんな~!今日は応援に来てくれてありがとう!」
　そうして子供達の大歓声を受けながらキクウジャーショー『対決!悪の皇帝ゾゴラ!』は幕を下ろした。
……
　ショーが終わり子供達が満足そうな表情で帰路に着く中、ウマ娘達

は驚愕していた。
ショーの迫力も理由の1つだったが、彼女らが驚いている大きな理由は他にあった。
「な、な、なんでカイチョーがショーをやってたの!!!?」
「分かりませんわ！何があってあんな事をされていたのでしょう……。」
ウマ娘達が捜していた人物、シンボリルドルフらしき人物がエンペラー役で登場し、最後の場面を演じていたのだった。
「さ、さすがのゴルシちゃんでも目が飛び出してトム目玉になってたぜ……。」
「トム目玉ってあれ？猫の罠やら作戦やらをネズミに上手くかわされた時に猫が驚く時の……。というか、マンガの目玉の表現をどうやって再現したの……？」
「ふざけている場合じゃない！会長らしい奴が見つかったんだ！」
「と、ともかく、皆急いで演者の控室へ向かうぞ！」
ウマ娘達はステージの裏側、出演者達の控室へと急いで向かった。
……
控室があるフロアに向かおうとすると警備員らしい人に止められた。
「ちょっと待ってくれ君たち。ここから先は勝手に入っちゃいけないんだ。」
「出演者の関係者なんです！会わせてください！」
「そう言うファンって多いんだよね～。ファンなら会いたいって気持ちも分かるけど、今日はダメなんだ。」
「出演者にシンボリルドルフという人はいませんか？その人に会いに来たのですが。」
「シンボリルドルフ……？キクウジャーの面子じゃないよな……。」
「エンペラーって役を演じていたウマ娘です！」
「？……ああ！ゲスト出演の人か！って、だから知っていても会わせられないって！」
トキノメグルとエアグルーヴが警備員と口論になり始めるのを感

じた他の従業員や警備員、更には一部の出演者までもが出てきた。
「どうしたんだ、一体？」
「ああ、どうもこの人達が今回のショーの出演者の関係者を名乗っていてな。ただそう言うファンがいてこの前大騒ぎになったろ？だから通せられないと説明しているんだが、帰ってくれなくてな……。」
２人と話していた警備員が他の警備員と相談する中、ゴルシがある人物を見つけた。
「おん？おーい！ウェルダー？ウェルダーだよな！ひっさしぶり!!!」
そう言い、ウェルダーと呼ばれた人物に向かって駆け出すゴルシ。
「ちょちょちょちょ！待って！勝手に入っちゃダメなんだって！」
警備員がそう言うのもむなしく、ゴルシの破天荒さには敵わなかった。
そして、ゴルシがジャンプし、その人物へドロップキックを仕掛ける！
……
「シルバー！久しぶりだな！っておわ！……危なかったぜ！」
間一髪役用に作られた模造刀２本でゴルシのドロップキックを止めたウェルダーは焦りながらもゴルシに笑顔を返していた。
「その対応力……鍛えたな。相棒。」
「当たり前だ！だが、シルバーのキックも強い……！」
「……フッ」
そうして２人は各々の得物を納めた後、暫くぶりの再開として握手していた。
……？……
「本当にお知り合いでしたか……。失礼しました！」
あの後、ウェルダーがゴルシ含めたウマ娘達を客人と説明し、８人はようやく控室へと向かうことを許可されたのだった。
「シルバー、エデソは知ってるか？少し前に艇からいなくなってしまったんだ。」
「エデソなら私が喚びだしちまってよ。ちゃんと持ってるぜ。今、疲れて寝てしまってんだよ。」

『……スゥ……スゥ。』
　エデソはショーを観ていた時の周囲の盛り上がりの影響を食らい、疲弊して寝てしまっていたのだった。
「こういうところは赤ちゃんらしいんだよなー。」
「確かに。エデソは武器の癖によく横になって寝ているんだよな。」
（（なんで武器が喋る事や寝る事が前提の話になってるんだ？））
　ゴルシとウェルダーがエデソの寝ることについて話す中、生徒会3人はそもそもの所で疑問を抱いていた。
……
　ウェルダーに案内され、出演者控室にたどり着いたウマ娘達。
　そして、ウェルダーが開ける前にテイオーが勢いよくその部屋の扉を開いた。
　そしてその部屋の中では……
「あそこは、『その日が来るまで、車中泊』とかがよかったかもしれませんね～。あとは『さらばだ！』の後にサラダバーに行くとか～。」
「成る程。セリフの中にダジャレを言うのも興。考えれば考える程、悔やむべき点がいくつも出る。」
「アドリブは難しいですからねぇ～。逆にセリフには忠実で違和感はありませんでした～。」
　そのようにセリフにダジャレを入れる事の是非についての反省会を行っているキクウイエローこと、シェロカルテとエンペラーこと、シンボリルドルフが居た。
　そして、その部屋の様子を見たテイオー、そしてその後ろから見ていたエアグルーヴは何故か力が抜けてしまったのだった。
……
「すまない、皆。出来るだけ早く合流するべきだったのだが、私自身もこの世界においての土地勘など無いからな。無闇に1人で探すよりも協力者と共にじっくりと情報を集めた方が良いと思ったんだ。」
　ルドルフは他のウマ娘達に謝罪し、今までの己の境遇を説明していた。そして、ウマ娘達はルドルフからシェロカルテの伝である騎空団の協力を受けている事を聞いた。

「会長。もしかしてその騎空団には蒼い髪の少女と翼の生えたトカゲはいますでしょうか？」
「ああ。トカゲでは無くてドラゴンだがな。その２人も所属している騎空団だし、なんなら私はそのドラゴンと共演していた。君らがこのタイミングで私の下に居るということはショーを観たからだろう？その中でキクウレッドがそのドラゴンに当たる。」
　そう言いながらルドルフはその共演者に腕を伸ばし指し示す。
　そしてまた、ゴルシが大きく反応するのだった。
「やっぱりな！トカゲ姫じゃねぇか!!」
「オイラはトカゲでも姫でもねぇ!!……て、ゴルシか？久々だなぁ！元気にしてたか？」
「おうよ！見ての通りの元気１００倍ゴルシマンだ！」
「何を基準に１００倍かは知らねぇけどよ、元気そうなら良かったぜ！それで今日はどうしたんだよ？」
「ああ……今日はな……カクカクシカジカ……。」
「フムフム……。」
　そうしてゴルシはそのドラゴン、ビィに事の顛末を話すのだった。
「……ということだぜ！」
「カクカクシカジカしか言わねぇからわかんねぇ！」
「お？この赤いマスクカッコいいな！被って良いか？被るぜ！」
「話を聞け！あと勝手に衣装をさわるんじゃねぇ！」
「ゴルシちゃんキック!!!」
「暴れるな！……その蹴りかた、ショーで使うから後で教えてくれ！」
「飽きてきたでゴルシ。」
「早すぎねぇか!!?」
「お？この本はなんだ？」
「それはカリオストロの！それも勝手に触るな！」
　文字通り破天荒、ゴールドシップはやりたい放題やっていた。
　そして、こういう時のゴルシは一部の強者以外は止められないので放っておくしかないため、ルドルフ以下は放置していた。
「なんか、どっと疲れちまったぜ……あの姐ちゃんは今は無視すると

して、話はルドルフから聞いているぜ！この空の世界とは別の世界から来てしまって、元の世界に帰る為の方法と手段を探しているんだよな？」

ビィの問いに頷くウマ娘達

「オイラ達はそういう困ってる奴らはほっとけないんだ。以前と同じように一緒に旅をしながら探さねぇか？団長やルリアも会いたがってたし、ルドルフとよろず屋の提案に賛成してたしよ！」

ビィの提案は拠り所の無いウマ娘達には願ってもない事だった。彼女らは勿論と返事をし、こちらの世界に来たウマ娘全員が揃った事と手段が見つかった事により安堵するのだった。

ウマ娘名鑑
ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０１

はい、どうもトキノメグルです。
昨日はバクシンオーとグローとレースが出来て本当に楽しかったです。
今回は私、私の家族、クラスメート、先輩、作者について今、分かる範囲内で名鑑風に話していきます。（何回自己紹介すんねん。……今後もこういう紹介を何回かします。）
まずは、私、現在のトキノメグルから。

……

トキノメグル　★
自己紹介『トキノメグル、今作の主人公、推しは全員だが中でもオグリ、以上』
誕生日『１月１４日』
年齢『６歳』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
好きなこと『トレーニング』
嫌いなこと『作者』
得意なこと『トレーニング』
苦手なこと『シラネ』
耳のこと『前世と比較するとめちゃくちゃ聞こえるので未だに慣れない』
尻尾のこと『痒くなりやすいので手入れは欠かしたくない（だけど、めんどくさい）』
身長『１１８ｃｍ』
体重『前世と比較できるかこれ？』
靴のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』

固有【オールターフ　Ｌｖ．１】『レース場が芝で且つ４種それぞれの作戦で１人でも誰かが走っていると、最終直線から少し加速する。』
……
トキノミドリ　★★
自己紹介『私、トキノミドリ！強くて速いウマ娘になるために……！頑張るよ！』
メグルとの続柄『姉』
誕生日『５月４日』
学年『中央トレセン学園中等部１年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『メグルやレインと一緒に走ること』
嫌いなこと『勉強（だけど、頑張る！）』
得意なこと『時間把握』
苦手なこと『空間把握（方向音痴）』
耳のこと『最近、緑色のカバーを着けてみた』
尻尾のこと『最近、寝癖のようにブワッと広がるので手入れが大変』
身長『１５３ｃｍ』
体重『問題ないよ！』
靴のサイズ『左右ともに２３．０ｃｍ』
固有【Ｇｒｅｅｎｓ　Ｒａｎ　Ｌｖ．２】『レース場が芝で且つレース中盤に先団にいると先頭目指して少し加速する。』
……
トキノレイン　★★
自己紹介「トキノレインです。伯母さん、お母さんみたいになれるかな？……ううん。なれるよね！」
メグルとの続柄『従姉』
誕生日『６月６日』
学年『中央トレセン学園中等部１年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『雨に打たれながら、先輩と散歩すること』
嫌いなこと『へっくちゅん！』

得意なこと『復習』
苦手なこと『予習』
耳のこと『ミドリの真似をして自分も青色のカバーを着けてみた』
尻尾のこと『雨や水で濡れても直ぐに乾く』
身長『１５０ｃｍ』
体重『少し痩せた』
靴のサイズ『左右ともに２２．０ｃｍ』
固有【フォール・レイン　Ｌｖ．２】『レース場の天気が雨で且つ中盤で自分の前と後ろにウマ娘がいると雲を分けるように少し加速する。』
……
ダイヤグリーン
メグルとの続柄『母』
職業『俳優・声優《グリーンダイヤ！》（キュピーン！）』
好きなこと『子供達の成長を見守ること』
嫌いなこと『子供達が無理をすること（特にメグル、貴女よ！本当に心配したんだから！）』
……
駿川翔真
メグルとの続柄『父』
職業『非常勤トレーナー（以前はトレセン学園の常勤トレーナーだったが、とある理由で非常勤に切り替えた）』
好きなこと『家族に決まっているだろ!!』
嫌いなこと『姉の愚痴話』
……
アメノホマレ
メグルとの続柄『叔母』
職業『郵便局員、シングルマザー』
好きなこと『レース観戦』
嫌いなこと『姉のタックルもどきの抱擁』
……

駿川たづな
自己紹介『こんにちは、トレセン学園の理事長秘書、駿川たづなです。みなさんがより良い学園生活を送れるよう、支えてまいります♪』
メグルとの続柄『伯母』
誕生日『５月２日』
職業『中央トレセン学園理事長秘書』
好きなこと『家族や親戚に会うこと、ラーメンと餃子定食』
嫌いなこと『膨大な量の仕事を学生時代からの友人兼上司から押し付けられること』
???『???』
……
アイネクライト
自己紹介『アイネクライトだよ！走るのが大好き！皆と一緒にレースをたくさんしたいな～！』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『食べること』
嫌いなこと『食べないこと』
得意なこと『勿論、走ること！』
苦手なこと『メグルちゃんが持っている本を読むこと』
耳のこと『アイリスとメグルが話していると何故かピクピク動く』
尻尾のこと『好きなことや得意なことをしたりする時、大きく揺れる』
身長『１２０ｃｍ』
体重『ちょっと太った？』
性格『スペちゃんとウララをそれぞれ半分にして混ぜた感じ』
靴のサイズ『左右ともに１９．０ｃｍ』
……
エミリアレッド
自己紹介『エミリアレッドと申します。レッド家の者として恥じぬ

存在になるために、日々精進してまいりますわ！』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『芦毛（青紫色）』
好きなこと『食べるのなら、パック納豆がいいですわ。特に納豆と卵とネギを混ぜた納豆卵かけご飯。健康的でいいですわよ。』
嫌いなこと『うるさいこと』
得意なこと『魅せる走りをすること』
苦手なこと『算数（今は！今はですわ！）』
耳のこと『双子の妹の声を聞くとピクッとなる』
尻尾のこと『誉められると揺れが速くなる』
身長『１１５ｃｍ』
体重『完璧』
性格『マックちゃん』
靴のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』
……
フーラルレッド
自己紹介『フ、フーラルレッドです……。えと、お姉さまからはフランって呼ばれてるの……。その……よろしくね？』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『栗毛（金色）』
好きなこと『アニメ、ドラマ鑑賞』
嫌いなこと『騒がしいこと』
得意なこと『足音をたてずに素早く歩ける』
苦手なこと『人気が多い所』
耳のこと『好きなアニメ、ドラマの話になると少し伸びる』
尻尾のこと『耳と同じような内容でよく揺れる』
身長『１１４ｃｍ』
体重『痩せぎみ』
性格『ライス（妹）』
靴のサイズ『左１７．５ｃｍ　右１８．０ｃｍ』
……

アイリスフェザー
自己紹介『アイリスフェザー。クライトとは保育園よりも前から知り合っている幼なじみ。……絶対に彼女には負けない。』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『芦毛（白色）』
好きなこと『走ること以外特になし』
嫌いなこと『まず嫌いにならなければ良い』
得意なこと『……走ることだ』
苦手なこと『だから、苦手なことも（以下略）』
耳のこと『ペタッて曲がるってなる時は眠いときらしい』
尻尾のこと『揺れている時は心が揺れているときらしい。』
身長『１２５ｃｍ』
体重『変動なし』
性格『よく分かんねぇな。ビワか？イクノか？』
靴のサイズ『左右ともに１９．５ｃｍ』
……
ビクトリング
自己紹介『ビクトリングだ。とりあえず、この学校には強い奴が多いみたいだからな。……速く戦いたいものだ。楽しみで仕方がない。』
学年『私立濃山小学校ウマ娘科１年生』
毛色『黒毛（黒色）』
好きなこと『食べること、勝負事』
嫌いなこと『本気を出さないこと』
得意なこと『ポーカーフェイス（勝負内のみ）』
苦手なこと『国語』
身長『１２２ｃｍ』
体重『要る情報か？』
性格『ウオッカ、アマ寮長、フェスタを１…１…３にした感じ』
靴のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』
……

バルトグロー　★
自己紹介『俺は、バルトグロー。俺の周りに居ると……ヤケドするぜ？』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『黒毛（黒色）』
好きなこと『本気で走るレース』
嫌いなこと『自分が邪魔されること』
得意なこと『けん制』
苦手なこと『ロードにうまくのせられる事』
身長『１４５ｃｍ』
体重『計測不可』
性格『ウオッカとロジカルじゃないシャカールを混ぜた感じ』
靴のサイズ『左右ともに２１．５ｃｍ』
固有【Ｔｒｙ　ａｇａｉｎ　ａｎｄ　ｄｅｆｅａｔ　Ｌｖ．１】『レース後半で自分が抜かされると反骨精神で抜かし返そうと少し加速する。』
スキル【逃げけん制】【先行けん制】
……
リアフルス　★
自己紹介『よっ！アタシ、リアフルス！強い奴追いかけ、引き離す……！マジでこれ、超最高だから。アンタもやってみな！追込！』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『鹿毛（赤茶色）』
好きなこと『追込、気分をアゲること』
嫌いなこと『逃げること』
得意なこと『溜まった宿題の追込（……？）』
苦手なこと『静かなこと』
身長『１３８ｃｍ』
体重『増えたり減ったり』
性格『ネイチャとヘリオスを混ぜた感じ』
靴のサイズ『左右とも２２．０ｃｍ』

固有【マジで最高！皆！　Ｌｖ．１】『やる気（調子）が絶好調の時且つレース中盤に後ろ側にいると気分アゲアゲで少し加速する。』
スキル【コーナー巧者】【仕掛け準備】
……
レイショット　★
自己紹介『こんにちは、レイショットです。私の全力を出すために、集中してレースに臨みますよ！』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『白毛（白色）』
好きなこと『アニメ鑑賞、オンラインサバイバルゲーム』
嫌いなこと『調子を狂わされること』
得意なこと『集中』
苦手なこと『スタートダッシュ』
身長『１４０ｃｍ』
体重『増減なし』
性格『若干バクシン』
靴のサイズ『左２２．０ｃｍ　右２１．５ｃｍ』
固有【ゼロ距離ショット　Ｌｖ．１】『スキル【集中力】又は【コンセントレーション】を使った上でレース後半の時に前のウマ娘と極端に近いと集中力の賜物がようやく出るように少し加速する。』
スキル【集中力】【ウマ好み】
……
ロードジャスト　★
自己紹介『僕は、ロードジャスト！特進５年生のクラス長……学級委員だ！僕達の活躍をしかとその目に焼きつけてくれたまえ！』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『毎年、宝塚に行く際には必ず公演とレースを見る』
嫌いなこと『そんなものは無いよ？』
得意なこと『Ｉ　ｃａｎ　ｄｏ　ａｎｙｔｈｉｎｇ！』
苦手なこと『強いて言うなら……昨日の自分かな？』

身長『１４３ｃｍ』
体重『いつも完璧』
性格『まんまオペラオー』
靴のサイズ『２３．０ｃｍ』
固有【ｒｏａｄ　ｏｆ　ｌｏｒｄ】『レース中盤に抜かされそうになると主君の為の道だと誇示するかのように少し加速する。』
スキル【逃げコーナー】【逃げ直線】
……
サクラバクシンオー　★★【天才（オリジナル）】
学年『私立濃山小学校特進６年生』
固有【学級委員長＋速さ＝バクシン　Ｌｖ．２】
スキル【直線巧者】【先行直線】
……
シンボリルドルフ　★★★【天才（オリジナル）】
学年『中央トレセン学園中等部』
役職『中等部生徒会長』
固有【汝、皇帝の神威を見よ　Ｌｖ．１】
……
エアグルーヴ　★★★【天才（オリジナル）】
学年『中央トレセン学園中等部』
役職『中等部副生徒会長』
固有【ブレイズ・オブ・プライド　Ｌｖ．１】
……
マルゼンスキー　★★★【天才（オリジナル）】
学年『中央トレセン学園中等部』
固有【紅焔ギア／ＬＰ１２１１―Ｍ　Ｌｖ．１】
……
シラネ
自己紹介『こんにちは、作者ことシラネです。今作、【転生したら……ウマ娘だった。】をお読み頂きありがとうございます。これからも精進して参りますので今後ともよろしくお願いいたします。それ

では、メグル、あれをどうぞ！』
メグル「引っ込んでろ！」
シラネ「ありがとうございます。（ＧＪ）」
メグル「Ｍかよ……。」
シラネ「Ｍであり、Ｓでもあります！（ピシッ）」
メグル「こんな奴放っておいて、次、行って下さい。お時間を取らせてしまって申し訳ないです。それでは！」
シラネ「ちょっと待って、まだ、話し終わってな……」
終わり。

ウマ娘名鑑ｖｅｒ．０２

どうも、トキノメグルです。
拐われたマル秘の謝罪文が来たので、ここで読まさせて頂きます。
……
名鑑ｖｅｒ．０２やるからヨロピク（ゝω・´★）
……
全然謝罪じゃないっすね。
文章に絵文字入れてくるのって無しでしょうが。
まぁ、愚痴っても仕方ないんで名鑑に行きましょうか。
……

トキノメグル　★
自己紹介『トキノメグル、今作の主人公、推しは全員だが中でもオグリ、以上』
誕生日『１月１４日』
年齢『６歳』
学年『私立濃山小学校特進５年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
好きなこと『トレーニング』
嫌いなこと『作者』
得意なこと『トレーニング』
苦手なこと『シラネ』
耳のこと『前世と比較するとめちゃくちゃ聞こえるので未だに慣れない』
尻尾のこと『痒くなりやすいので手入れは欠かしたくない（だけど、めんどくさい）』
身長『１１８ｃｍ』
体重『前世と比較できるかこれ？』
靴のサイズ『左右ともに１８．０ｃｍ』
固有【オールターフ　Ｌｖ．２】『レース場が芝で且つ４種それぞれ

の作戦で1人でも誰かが走っていると、最終直線から少し加速する』
スキル【直線巧者】【末脚】
……

セブンティセブン
自己紹介『どうも～。セブンティセブンです！……え？好きな数字は７７？……違いますよ～。』
学年『私立濃山小学校進学６年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『アニメ』
嫌いなこと『読書』
得意なこと『学習した事を直ぐに扱えるようになること』
苦手なこと『学習した事を持続して扱うこと』
耳のこと『他の人よりも感情によって動きやすいらしい』
尻尾のこと『耳に同じ』
身長『１４７ｃｍ』
体重『普通』
性格『色々な娘達を混ぜた感じ？（ウマ娘に例えるなら）』
靴のサイズ『左右ともに２３．０ｃｍ』
スキル　色んなデバフスキル（付け焼き刃）
……

ゼロワンピーシー
自己紹介『こんにちは。ゼロワンピーシーと申します。皆さんに負けないように精進し続けて参ります。また、プロフィール以外の詳細な情報は本編のアップロードにて紹介します。』
学年『私立濃山小学校進学６年生』
毛色『鹿毛（茶色）』
好きなこと『トレーニング』
嫌いなこと『雷』
得意なこと『算数、数学』

苦手なこと『電化製品の操作』
耳のこと『媒体毎の暗号信号を受信しあっているらしい……!?』
尻尾のこと『たまに直角に折れて立っているのはなんなのだろうか……』
身長『１５０ｃｍ』
体重『１０１０００（２）［ｋｇ］』
性格『ミホノブルボン』
靴のサイズ『左右ともに２３．０ｃｍ』
スキル【先頭プライド】
……

ブラッドステイ　★
自己紹介『ブラッドステイだ。私が、皆が納得出来るようなレースを楽しみにしている。』
学年『私立濃山小学校進学６年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
好きなこと『血の滾るレース』
嫌いなこと『つまらないこと』
得意なこと『我慢』
苦手なこと『追求しないこと』
耳のこと『血が滾ると張る』
尻尾のこと『手入れは毎日欠かさない』
身長『１４６ｃｍ』
体重『問題無し』
性格『ナリタブライアン』
靴のサイズ『左右ともに２２．５ｃｍ』
固有【Ｎｅｖｅｒ―ｓａｔｉｓｆｉｅｄ　Ｌｖ．２】『最終直線、自身が先団にいるときに直ぐ後ろ、横にウマ娘がいると、競り合うように速度を少し上げる。』
スキル【中距離コーナー〇】【長距離直線〇】
……

ナイツサイレンス　★

自己紹介『ナイツサイレンスだ。グローの姉として、姉らしい行動を見せてあげたいものだねぇ。……さて、理科室に行くとしようか。もちろん、君も来たまえよ？』

学年『私立濃山小学校進学６年生』

毛色『鹿毛（黒茶色）』

好きなこと『実験』

嫌いなこと『オカルト』

得意なこと『観察』

苦手なこと『早起き』

耳のこと『興味を持つと内側に寄る』

尻尾のこと『激しく揺れるせいでグローに固定されることがしばしば』

身長『１４５ｃｍ』

体重『若干痩せぎみ』

性格『アグネスタキオン』

固有【ＮＯ　ＭＯＲＥ　ＮＥＧＬＩＧＥＮＣＥ　Ｌｖ．２】『自身がデバフスキルを発動させ、更に別のウマ娘が自身にデバフスキルを発動させていると、レース後半に自分の前にいるウマ娘のスピードを少し奪う』

スキル【ささやき】【まなざし】【束縛】

……

シャイニングバーン　★

自己紹介『ガンッダーーーーー!!!……あれ？自己紹介始まっているなら早く言ってよ！メグルちゃん……。こほんッ。こんにちは！シャイニングバーンです！みんなと一緒に頑張るよ！えい、えい、おー！』

身長『１１６ｃｍ』

体重『微増』

性格『マチタン？』
靴のサイズ『左右ともに１７．５ｃｍ』
固有【必殺！シャイニング・レッグ!!!Ｌｖ．１】『最終直線で先団にいると、自分の中に眠る熱い魂が呼び起こされ、レース中のやる気がその時点で絶好調に切り替わる（最初から絶好調だった場合でも速度が上昇する。）（また、アニメ好きなウマ娘がいた場合、そのウマ娘のやる気が絶好調になる。）』
……

ラクエンノミコ　★
自己紹介『どうも。ラクエンノミコよ。私は走れるならそれで良かったのだけれど、いつの間にか特進に居たわ。……全く、めんどくさい。』
学年『私立濃山小学校特進６年生』
毛色『黒鹿毛（黒色）』
スキル【先行直線〇】
……

コモンマジシャン　★
自己紹介『よ！私はコモンマジシャン。普通のウマ娘さ。やっぱ、レースって良いよな！楽しいし、勝った時の幸福感は最高だぜ！』
学年『私立濃山小学校特進６年生』
毛色『栗毛（金色）』
固有【Ｇｒｉｍｏｉｒｅ　ｏｆ　Ｔｈｉｅｆ　Ｌｖ．２】『イーター系スキルを発動させると同時に発動し、スキルで奪ったステータスを更に奪う』
スキル【スタミナイーター】
……

ブルームナイト　★
自己紹介『私はブルームナイト。レッド家のメイド見習いとしてお

嬢様方のお世話をさせていただいております。母のように強きウマ娘になるために、お嬢様方、レッド家の誇りに恥じぬよう、日々精進して参ります。』

学年『私立濃山小学校特進６年生』

毛色『芦毛（銀色）』

固有【Ｒｅａｌｉｚａｔｉｏｎ　ｏｆ　Ｌｏｙａｌｔｙ　Ｌｖ．２】『時間操作をするように最終コーナーにて相手のスピードを落としつつ、自分は速度を上げ、集団から抜け出そうとする』

スキル【集中力】【コーナー巧者〇】

……

ダークペガサス　★

自己紹介『ダークペガサスよ。私に貴女達の自慢の走り……魅せてくれるわよね？』

学年『私立濃山小学校特進６年生』

毛色『黒毛（黒色）』

スキル【先駆け】【先頭プライド】

……

キャルロスルーラー　★

自己紹介『私はキャルロスルーラー、メリーの姉よ。……私に自分から近づかない方が良いわ。その方が身のためよ。』

学年『私立濃山小学校特進６年生』

毛色『桃色』

スキル【逃げけん制】【先行けん制】【まなざし】

……

イノセントメリー　★★

自己紹介『えへへ♪私、イノセントメリー！メリーって呼んでね～？みんなといっしょに走るの楽しみにしてたんだ～。……ちゃんと楽しませてね？』

学年『私立濃山小学校特進５年生』

毛色『緑色』

固有【怪奇現象！メリーちゃん以外は見た！　Ｌｖ．３】『残り１００ｍで自分の後ろにいるウマ娘達のスピードを下げ、自分の中の前にいるウマ娘達のスタミナを下げ、自分は速度を上げる』

ウマ娘名鑑ｖｅｒ．ｏｌｄ【緑色の金剛石】
ウマ娘名鑑ｖｅｒ．ｏｌｄ—０１

……

ダイヤグリーン（現在）

自己紹介『どうも、ミドリとメグルの母、ダイヤグリーンです。……昔の事ですか？……あの時はワガママでしたねぇ。フフッ。』

毛色『芦毛』

メグルとの続柄『母』

職業『俳優・声優《グリーンダイヤ！》（キュピーン！）』

好きなこと『子供達の成長を見守ること』

嫌いなこと『子供達が無理をすること（特にメグル、貴女よ！本当に心配したんだから！）』

……

ダイヤグリーン　★★★（過去）

自己紹介『……懸命。自分の拠り所は……目標のある自分だけ……。』

学年『高等部』

固有【果て無き勝利の幻想　Ｌｖ．１】レース場が芝で自分の前にウマ娘がいると、理想郷を求めて加速する。

……

駿川翔真（現在）

自己紹介『２人の愛娘と愛する妻を持って今、とっても幸せなバカとは俺の事！駿川翔真だ！……昔の事？……ダイヤと会った事ぐらいしか覚えてねぇよ？』

メグルとの続柄『父』

職業『非常勤トレーナー（以前はトレセン学園の常勤トレーナーだったが、とある理由で非常勤に切り替えた）』

好きなこと『家族に決まっているだろ!!』

嫌いなこと『姉の愚痴話』
……
駿川翔真（過去）
自己紹介『1ヶ月休み無し、勤務時間毎日16時間以上（残業有り）、給与毎月変動、保険自分で加入、寮付（トレーナー室）……アットホームな職場です。……職場改善を求めます。』
年齢『16歳』（緑色の金剛石　1話）
職業『常勤トレーナー？』
……
アメノホマレ（現在）
自己紹介『レインの母親のアメノホマレです。学生の時は、はっちゃけてましたね……。懐かしいものです。』
毛色『鹿毛』
メグルとの続柄『叔母』
職業『郵便局員、シングルマザー』
好きなこと『レース観戦』
嫌いなこと『姉のタックルもどきの抱擁』
……
アメノホマレ　★★★（過去）
自己紹介『こんにちは。中等部生徒会長のアメノホマレと申します。出会える全てのウマ娘とのレースに全力を出すことを誓います。』
役職『中等部生徒会長』
学年『中等部』
固有【雨の誉れと誓い　Lv.1】天気が雨で、先団にいれば残り200mから凄く加速する。また、天気が雨以外で先団にいれば残り400mから加速する。
……
駿川たづな（現在）
自己紹介『こんにちは、トレセン学園の理事長秘書、駿川たづなです。みなさんがより良い学園生活を送れるよう、支えてまいります

♪』
メグルとの続柄『伯母』
誕生日『5月2日』
職業『中央トレセン学園理事長秘書』
好きなこと『家族や親戚に会うこと、ラーメンと餃子定食』
嫌いなこと『膨大な量の仕事を学生時代からの友人兼上司から押し付けられること』
好きな言葉『努力は必ず実る』

……
駿川たづな（過去）
??? ???
自己紹介『こんにちは。トレセン学園の高等部生徒会副会長、駿川たづなです。みなさんがより良い学園生活を送れるよう、支えてまいります。……また、私は妹からあるあだ名で呼ばれていますが、妹以外の方がそのあだ名で私を呼んだ際には……必ず丁重に〝おもてなし〟させて頂きます♪』
役職『高等部生徒会副会長』
学年『高等部』
固有【??? Ｌｖ？】
?????
……
秋川やよい（過去）
自己紹介『歓迎ッ！ようこそ、我らがトレセン学園へ！ウマ娘達の夢、応援してやってくれたまえ！』
役職『高等部生徒会会長』
学年『高等部』

注意事項

今作を読むにあたっての補足&最新話リンク

どうも、トキノメグルと作者です。

今回は、今作、【転生したら……ウマ娘だった。】を読むにあたって色々補足し、内容をより分かりやすくするためにする為のものですので、本編に直接関係する話ではありません。

ご理解のほど、よろしくお願いします。

尚、追記する場合がございます。

・原作との改変

今作ではある程度は原作、史実に基づいて書いていくつもりですが、個人で作っている作品ですので、多少改変する場合がございます。その為、ゲーム【ウマ娘プリティーダービー】で登場しているキャラクターと今作で登場するキャラクターの設定が異なる場合がございます。

ある程度は似せる予定ですが、読者によっては意見が別れる場合もあるかと思います。ご理解頂けると幸いです。

・レース場について

特定のレース場では、実在しているレース場（競馬場）をモデルにレースの内容を作成しております。例えば、東京レース場では無い場所であっても東京の中でレースをしている場合、距離やゲート、直線やコーナーの位置、坂などを東京レース場（競馬場）と同じ設定にしております。

他の特定のレース場も同様の設定にします。

・オリジナルキャラクター（ゲーム【ウマ娘プリティーダービー】のキャラクターでは無い）について

今作で登場している作品オリジナルキャラクターは全て架空のキャラクターです。作品を投稿時、作者が確認した範囲内で現実の馬では無い名前をつけております。ですが、今後（現在を含む）、同じ名前、似たような名前、別のネタから取っている名前などが生まれてくる場合がございます。（実際、何人かのオリジナルウマ娘では、既に何個かのネタを交えた名前をつけております。）しかし、今作品は全てその馬や元ネタとは一線を引き、関係が無いものとします。ご理解のほど、よろしくお願いします。

・【天才（オリジナル）】と呼ばれるキャラクターについて（2／7追記）

今作独自の呼び方です。

ウマ娘に登場するネームドキャラクター（プレイ可能キャラクターが主）の事を指します。

また、現在、ゲーム【ウマ娘】のシナリオ内で登場する、【ハッピーミーク】、【リトルココン】、【ビターグラッセ】を含みます。

現在、マンガやアニメなどで登場しているキャラクター【ベルノライト】や【ブロワイエ】などは含みません。（予定）

とりあえず、強めのキャラクターだと思ってください。

・今作のウマ娘名鑑について

不特定投稿の話になります。

バージョンナンバーが変わっても情報に追記が無いキャラクターはバージョンが変わったウマ娘名鑑には記載しません。

キャラクターの横にある★は、才能開花というもののランク付けになります。（主に固有スキルのレベルに影響します。）

また、【性格】の所は、トキノメグルが前世でやっていたゲーム【ウマ娘】の中のキャラクターに「あ、なんか、似ている。」と、思ったの

を書いています。
本編中にも入れますが、ウマ娘名鑑だけは章を分けても投稿します。

・レースの実況解説について
本編中にレースがある話がございます。
現在、変更が無い場合、１３話【天才は天才と愚才を生み、皆に恐怖と畏怖を与える】の設定、また、１３話以降で投稿する話の中にあるレースの設定予定になります。
実況者の実況はレース中、又はレース前の実況解説には句点が付きません。
解説者の解説はレース中、又はレース前の実況解説には必ず句点が付きます。
（）内の言葉はレース中、又はレース前の実況解説では省略されます。
例
（実況）トキノメグル！快調に飛ばしていきます！
（解説）作戦は逃げのようですね。彼女の脚質には適しています。
（実況）掛かっているか、トキノメグル
（解説）スタミナを切らさないか心配です！。

・レース中の出走者、観客席の発言と思念について
レース中に出走者、又は観客席にいるキャラクターから発言、又は思念があることがあります。
出走者は発言の時は「」、思念の時は（）を用います。
観客席からの発言の時は『』、思念の時は《》を用います。

・スキル演出について（２／２２追記）
ゲーム【ウマ娘】の設定の中にスキルというものがあります。

それに基づいて、今作でもキャラクター達がスキルを使う場面がございます。
スキル使用時、【】を用います。
また、１４話【トキノメグルと男子高校生】以降の話では、スキルの種類を通常、回復、デバフ、バフ、バッドの５種類に分け、色別にします。（ゲーム【ウマ娘】では主に５種類に分けており、そこから何種類にも派生しております。）
通常：オレンジ色、回復：青色、デバフ：赤色、バフ：緑色、バッド：紫色
キャラクター達がスキルの中には通常スキルの上位互換がございます。
上位互換になっているスキル、所謂金スキルと呼ばれるものなのですが、今作でもそのスキルを用い、通常スキルとは別の区別をします。
金スキル使用時には【】を用います。
例
グロー（まずは、お手並み拝見！【逃げけん制】！）
バルトグロー、【逃げけん制】を使って、先頭集団を疲れさせる！
「ここで決める!!!【全身全霊】!!!」
「大吉大吉大大吉！【スーパーラッキーセブン】!!!」

・固有スキル演出について（１／３１追記）
ゲーム【ウマ娘】の設定の中に固有スキルというものを所持している主要キャラクターがいます。
それに基づいて、今作でもキャラクター達が固有スキルを使う場面がございます。
固有スキル使用時、『』、【】を用います。
また、スキル使用時と同様、１４話【トキノメグルと男子高校生】以降から色別にします。
例
……

『私を……！無礼（なめ）るなよ!!!』
【オールターフ　Ｌｖ．１】

……

・順位掲示板について
レース終了後、順位を表示いたしますが、その際にあたって、軽く注意点を。

……
……

という、
『……』が2個連続で縦に並んでいる場合がございます。
これが出ると、スクロールを少し長めに行うと、順位掲示板が出て来るように設計しております。
試してみれば分かりますが、素早すぎたり、遅すぎるスクロールをすると、設計上少し変な感じに表示されます。（文章には問題はありません。）
例（かなり長めに例を取っております。ここでどのようなものかお試し下さい。また、何回も試したい時はページを閉じ、再度このページを開いてお試し下さい。）

……
……

……

東３：Ｒ：　京１２００：ｍ：確　定

Ⅰ７／／／／／／ハナ　Ⅱ９／／／／／／

／／１／２　Ⅲ１／／／／／／３１／４　Ⅳ

５／／／／／／１／２　Ⅴ４／／／／

・／芝／：良：　・ダート：良：

・タイム　１：０１．２　レコード

……

・タイムについて

本編中にレースがある話がございます。

タイム自体の記載は５話【正月土手ラン】から、掲示板上での記載は８話【ピッカピッカの～５年生♪】からとなっております。

タイムは作品オリジナルキャラクターのみのレースで記載し、ゲーム【ウマ娘】のキャラクターが登場するレースでは現実のお馬さんや史実に敬意を示し、作中内に記載はしません。

・バ身差について（２／４追記）

競馬やウマ娘をよく知らないという方にむけて、バ身についての補足をさせて頂きます。

今作では【ウマ娘プリティーダービー】の設定を優先しています。
バ身差が小さい順です。（掲示板上の表記です。）
ハナ差（ハナ）：約２０ｃｍ、タイム差０
アタマ差（アタマ）：約４０ｃｍ
クビ差（クビ）：約８０ｃｍ
１／２バ身（１／２）：約１２０～１３０ｃｍ
３／４バ身（３／４）：約１８０～１９０ｃｍ
１バ身（１）：約２５０ｃｍ
１　１／４バ身（１　１／４）：約３００～３２０ｃｍ
（省略）
１０バ身（１０）約２５００ｃｍ
大差（大差）約２５００～ｃｍ

・出走表について
本編中にレースがある話の中で１３話【天才は天才と愚才を生み、皆に恐怖と畏怖を与える】から導入したものです。
チーム対抗戦用の出走表の中で★が付いているキャラクターが存在します。そのキャラクターは各々のチームのエースメンバーに指定されており、他のメンバーはエースを援助する形でレースに参加することが大半になっております。
個人戦用、チーム対抗戦用のものを作る予定ですので、楽しみにしていただけると嬉しいです。

・新話投稿について（１／２７追記）
章分けの都合上、未読の部分がこの補足になっているかと思われます。（新規の方以外）
また、しおりをウマ娘名鑑専用の章やこの補足に設定していた場合、しおりが新しい話が投稿される度に勝手にずれる事があります。
注意して利用し、お楽しみください。

・誤字について（御礼と謝罪）（１／２７追記）
誤字報告を今までにしてくださった方々、本当にありがとうございます。
又、皆様に誤字の関係で不快な文章になっていたこと、お詫び申し上げます。
この場をお借りして御礼と謝罪とさせていただきます。
また、何か誤字などを見つけた際には遠慮なくご指摘お願いします。

・別シリーズについて（２／２０追記）
現在、本編『転生したら……ウマ娘だった。』に関係しているシリーズ、『緑色の金剛石』を投稿しています。（作者のリンクから検索が出来ます。）
いくらか昔のトレセン学園の様子をテーマにした作品ですので、是非読んでいただければと思います。
また、別編の投稿を開始しました。本編とは話がずれる物語ですが、コラボや現実世界での時間に沿った（作者の気まぐれ）によって書かれる話です。

・『……』と派生するものの表記について（２／１追記）
この作品では、『……』を多用しています。
キャラクター達の言葉にも使われていますが、時間的な間隔等を表現するためにも多く使われています。
現在、間隔として使われているのは以下のものです。
……
本編１８話までは全ての時間の間隔、手紙や機械によって表示されているものの表現として使われています。

ウマ娘名鑑では各キャラクターの間に使われています。
本編１９話以降では時間の間隔としては、少し未来の時間になったことを表現するために使われます。

……？……
本編１９話以降で登場する時間の間隔を表現するものです。
『……』よりも大きな時間の変動があった場合に使われます。

……
……
（空間省略）
……
（掲示板表示空間）
……
（掲示板表示準備線、掲示板表示開始線、画面スクロール停止推奨線）
ギミック『掲示板』が表示される前に使われる表現です。
これが使われている所を見つけた場合は『掲示板』を正しく動かすためにも適切なスピードでスクロールをお願いします。
また、掲示板が不適切な挙動をした場合でも作中内の文面には問題は発生しません。